



# 案山子



2018年冬号

新潟大学文芸部

夢の指先 現の足音

大島治輔

あなたに会って見たかったんだ。

第一印象はあどけない、だった。大きく見開かれた瞳も紅潮して尚志を見上げる頬も、何をそんなに期待しているのか、抑えきれない興奮に溢れていた。犬ならば千切れんばかりに尻尾を振っていただろう。猫ならばピンと両耳を立てていただろう。あなたの話を読みました、と言われるまで尚志はその場違いな迫力に思わず圧倒されていた。

奴はマシンガンの如く尚志の小説について語り始めた。その内容が殆ど駄目出しであることに気付いたのは暫くした後だった。曰く、これでは最近人気のサスペンス小説の劣化版である。展開が二番煎じ。狂気の描写も月並み。肝心のシーンで真に迫るような説得力も無ければ想像力を掻き立てるような言葉の美しさも無い。故にキャラクターに感情移入しにくい、等。

「多分さ、あなたはファンタジーとか非日常的事件とか、そういうの考えるのあまり得意じゃないだろう。コテコテだもん。でも、ここの日常パート。この描写はとても良い。とてもリアルだ。観察眼が鋭いんだね。まさに神の視点だ。三人称の粹、ここに極まれりって感じ。ストーリーのインパクトを追求するより、もっとこういう…例えば社会派の題材とか、リアリズムを追求した方があなたは輝くと思うよ」

尚志は半ば啞然としながらも、今の流行りは人間の暗黒面を描いた猟奇サスペンスだから、と答えた。

奴は他愛ない、といった顔をした。

「確かにそうだね。でも、狂気が人間の本質なのかい？ そんな訳無いだろ。人の一部にすぎないはずだ。もしそれを蔑ろにして、歪な暗黒面を人の本性と祭り上げる話ばかりだとするなら、そんなものスプラッター映画と何が違うの？ 地味な現実とか、人情とか。そういう話が好きな人だっているはずだし、必ず流行する時が来ると思う。人気ってそういうものでしょ。だからそういう時、あなたはきっと素晴らしい物書きになる」

別れの時、奴はもう一度、今度は少ししおらしげに尚志のもとへやってきた。

「ごめんなさい。色々偉そうなこと言ったけど、自分はあなたに、本当に良い文章だったと伝えただけなんだ」

名前は、と問うと、<sup>しんじ やえ</sup>進士八重、と答えた。

後日奴の小説を読んでみた。奴は誰よりも美しい言葉で物哀しい情緒を綴る物書きだった。

懐かしいことを思い出した。

吐息も白む曇天の下、尚志が赤くかじかむ指を折って数えてみると、既に片手で余る程の年月が経っていた。尚志がまだ学生だった頃、ああして出会った八重との関係は。

出身も学校も違う二人は『小説』というたった一つの縁の下、それでも不思議と馬が合った。大学を出た後は住居が近所になったことも相まって顔を見に足を運ぶことも少なくない。

会う度に二人は様々な事――身の回りのことに最近読んだ本、そして最後には必ず自分の書く小説について飽きることなく話していた。

もし、と尚志は考える。もしあの時、自分達の関係がそれで終わっていれば、尚志は平日にこんな所でほつき歩けるような身分にはならなかつたらうに、と。

大通りから少し外れた閑静なマンションの4階406号室。尚志は迷うことなくそのインターホンを押した。扉の向こうからはがたん、と物音がした後、鍵の解除される音がした。

「…ああ、ショージかあ。おはよう」

「人が来たらまずはドアホンで通話しろと何度も言っているだろう」

伸ばし放題のぼさぼさの頭に灰色のルームウェア姿でぼんやりと顔をのぞかせた八重に尚志はため息をついた。ついでに言えば今は午後3時を過ぎている。さらに言うと尚志のことを、――本名はナオユキだがペンネームがショウジなのである――八重はペンネームの方を好んで呼ぶ。理由は知らない。

扉をくぐった尚志はざっと部屋を見渡して、さらに大きなため息をついた。そこら中に放られ

た服、資料と筆記用具で散乱した机、中途半端に開いたまま蹴飛ばされた段ボール。郵便受けに手をつっ込んでみれば封筒や紙切れで一杯になっていた。ずぼらな1DKに、パソコンのスピーカーからは荘厳なオーケストラの合唱がハウスタストを震わせて響いている。

「モーツァルトのレクイエムか。『怒りの日』だな」

「…すごい。合ってる」

フローリングからCDパッケージを拾い上げると、八重は驚いたように尚志を見た。外界とほとんど変わらない温度の中、裸足をペタペタと滑らせながら。

尚志は冷蔵庫を開いた。中には茶の入ったペットボトルが二本と醤油、味噌、マーガリン。冷凍庫はものの見事に空っぽだった。尚志はついに頭を抱えた。

「八重。最低限外に出られる服に着替えろ。買い物に行くぞ」

「今？」

「今」

「一緒に？」

「当たり前だろ、お前野垂れ死ぬぞ。作り置きしてやるから」

「…ありがとう。やっぱりシヨージはすごいよね。しっかり者で、頭も良いし運動もできる。しかも物知りで料理も旨い。本当にすごいや」

ちょっと待って、と頷くと八重はクローゼットを開いた。八重が尚志から死角になるところに行くと、尚志は取り出した郵便物を確認し始めた。大体が求人広告やライフラインの領収書であった。食事とは裏腹に光熱費や水道代はきちんと納めているらしい。

正直、尚志はこの手の賛辞は嫌いだった。勉強は親に促されるままやって来た感覚であったし、人並み以上にはある体力も小さい頃からやっていた柔道の影響に過ぎない。雑学も今までの教育の副産物であり、料理に至っては一人暮らしの際必要に迫られて会得した、ただそれだけである。それらは何一つとして尚志が生まれながらに持っていたものではないし、他者と比べて特出したものでもない。あまりにも空虚で惨めな世辞だ。知らず、郵便物に皺が出来る程手に力が入っていた。

何をムキになっているのだろう。皺を広げようとした手元を見ると、一つだけ手書きの宛先の封筒が混じっていた。

「藤岡晴美？ 八重、知り合いか」

白いパーカーに黒のジーンズで出てきた八重に尚志が聞いた。着替えた姿も部屋着と大差ない気がしたが、黙っておくことにした。

あー、母からだ。と、八重は事も無げに言った。え、と尚志は思わず聞き返した。

「お前『進士八重』って本名じゃないのか」

「あれ、知らなかったっけ」

進士なんて苗字そうそういるわけじゃないか。八重はしれっと言い放った。あまつさえ、本名とは一ミリも掠っていないという。数年越しの真実に尚志はただただ啞然とするよりほかなかった。八重は腹を抱えて笑いだした。脱力しきった尚志に、八重は少し考えたようなそぶりを見せると、なぞなぞを出す児童のようにイタズラな笑顔でこう言った。

「進士八重。一個文字を小さくすると？」

進士八重。しんじやえー。

ハッと息を飲んだ。脳天から脊椎に冷水を垂らしたように血の気が引いていく。

温度を失いかけた額にと、と軽い衝撃が響いた。

「冗談だよ」

八重の白い人差し指が、尚志の大きな額の中央を突いていた。男性的というには繊細過ぎる、女性らしいというには質素過ぎる指の間から、八重のいとけない笑顔が目尻から崩れていく様が垣間見えた。

チンジャオロース

スーパーにて、今宵のディナーはシチューと青椒肉絲に決まった。尚志としてはこの組み合わせは邪道に違いないのだが、第一優先事項は偏食気味の八重にバランス良く肉と野菜を食わせることだ。作り置きすることを考えると、小分けにできる青椒肉絲と置いておくほど旨味の増すシチューの魅惑に抗うことは出来なかった。

費用は全額八重持ちとなった。数日分の飯を作ってもら以上当然だ、というのが八重の主張だった。尚志としては、今夜は自分も食べるからその分くらいは、と思ったのだが、それを言うと八重はおもむろに適当な文芸雑誌をカゴに入れた。譲る気はないと悟った尚志は大人しく引き下がった。

帰宅後すぐに調理を始めた。途中読書を中断させられ不貞腐れながらも尚志を怒らせてしまったのではと怯える八重の手伝いもあり、無事テーブルには二人分の夕食が湯気をたてられた。白米に青椒肉絲とシチュー、副菜に冷奴。尚志にはやはり奇妙な組み合わせにしか思えなかったが、八重に気にした様子一切無く、ニコニコとしながら食事でありついた。

「シヨージ、最近どう？」

お椀の中で危なっかしく箸を回しながら、八重は唐突に聞いてきた。猫舌の八重には食べる前に何でもかんでもかき混ぜる癖があった。

「長いのを一本書き上げた。これからは塾の方が忙しくなる。そっちは？」

「『ネオンの鳶』…一昨年出したのがドラマ化するんだって」

「確か、水商売の女の話だっけ。それは…凄いじゃないか」

言ってから、尚志は凝り性もなく情けなくなった。八重も尚志も職業は同じ小説家だが、その境遇はあまりにも違う。八重はデビューしてすぐに大きな賞を取り、専業作家として十分生活できている。片や尚志は未だ振るわず、文章を書きながら塾で非常勤講師としても働いている。

就職は国家公務員か警察キャリア組か。大学時代、尚志はそれが狙える所にいた。親からの期待もあったし、自分でも行ける限り上を目指すつもりでいた。しかし、期待を裏切って小説家という安定しない道を選んだ息子を親は認めてはくれなかった。特に父親とはもう年単位で顔を合わせていない。

「書きあがったやつ、まだある？」

「いいや、もう出した。データは残っているけど」

「どんな話？ねえ、今度来るときに持ってきてよ」

「題名は『デス・ゲーム』。大学受験の塾の話だが…当分時間取れなくなるって言っただろ。いつになるか分からないぞ」

「いいよいいよ、いつだって。シヨージは多忙なのに…いや、多忙だからこそ、なのかな。読

む度、書く度に鋭くなっていくから本当に楽しみなんだ」

米を掻き込んだまま、口元を抑えて捲し立てる八重に尚志は苦笑した。奴は好き嫌いが多いわりに出された料理は米粒一つ残さない。一品食いの悪癖も猫舌ならではの合理的な理由があると聞いて以来、目をつむることにしている。最後に奴が手に取ったシチューにはすっかり乾いた膜が張っていた。

「なあ、お前今でも俺は売れると思ってるのか」

スープカップの縁に口を付けたまま、八重はきょとんと尚志を見据えた。尚志の自嘲に歪ませた口は、笑いのみの通行を許さなかった。ほんの世間話のつもりだった、のに。

「だって、俺たちスタートは一緒だったはずだろ。それなのにこんなに差がついちまったんだ。俺にはきっとお前みたいな才能は無い。どんなにお前が俺の文章を気に入っていても」

八重は瞬きをして視線を尚志とシチューの間で行き来させている。すまない。お前に飯を食わせることが目的だったのに。それでも一度滑り出した言葉は止まらなかった。

「それとも、お前は嗤っているのかもな。無様な俺を見るとさぞ優越感に浸れるのだろうよ。才能がものを言う世界の中で、馬鹿みたいに足掻く身の程知らずな俺を…」

情けない。みっともない。口に出せば出す程不安と劣等感で頭が潰れそうになった。八重はシチューを勢いよく掻き込み、無言で手を合わせると、咀嚼しながら苦しいの？ と言った。

「…ああ」

「つらいの？」

「…ああ」

「逃げたいの？」

「……」

「その苦痛は、いらぬもの？」

「……………」

尚志は力無く首を横に振った。当然さ、と八重は微笑んだ。

「物書きがそれを捨ててしまったら次こそ自分たちは何者でもなくなってしまう。だから、よかった。君はとっくに小説に魂を売ってしまったってことさ。どうせ人間何したって後悔するんだから。寧ろこちらは幸福だよ。物書きは言いようのない苦しみを合法的に昇華する手段を持っている」

そんなものは絵空事だ。夢物語だ。輝く八重の言葉が脳に、胸に、容赦なく突き刺さり、血飛沫を上げていく。

だが、同時に尚志は安堵した。八重は変わっていない。学生時代に出会い、大学卒業と同時に小説家としてデビューを果たした八重は、いつだって気ままで、夢想家で、己を偽ることを知らない。社会人と呼ばれるような歳になってなお、世間ずれしていない子供のような人。

「君がその気なら絶対大丈夫だよ。君のことが好きっていうのは否定しないけど、でも、これでも勘は当たる方だよ？」

星空を掬い上げたかのようなきらきらとした大きな瞳。尚志は力が抜けて破顔したのを感じた。結局のところ、俺はこいつに引っ張られて、こいつの純粹さにのぼせてこんなところまで来てしまったのだ。

しょうせつ  
「… 身体 目当てとは、やっすい好意だな」

「安くないよお！ 君が日の目を浴びるまでちゃんと自分で稼ぎつつ、一途に、貞淑に待つつもりなんだから！」

「何が貞淑だ。『ネオンの鳶』で散々ベッドシーンを書いたこと知ってるんだぞ。恋人いない歴＝歳の数にくせに、無茶しやがって」

「あ、あれは担当の編集者に無理矢理…ッ」

ここで耐え切れずに二人は吹き出した。

もし、自分が八重を追わなかったら、いつこんな馬鹿笑いをするのだろうか。誰が苦痛に固執する姿を肯定してくれるというのだろうか。だからきっと、俺はこれでよかったのだ。少なくとも今はそう信じることができた。

厳正なじゃんけんの結果、皿洗いは八重の仕事となった。奴は裸足でたたらを踏みながら、指



先を真っ赤にして皿をこすっていた。尚志は何も言わずに水道水をお湯に切り替えた。暖房のスイッチを入れ、カーテンを閉めようとする、真っ暗闇に真っ白な綿が舞っているのが見えた。

「道理で寒いはずだよ」

台所から戻ってきた八重もひょっこりと窓を覗き込んだ。口ではそう言いながら、温水で手を温めてきた八重は顔までほかほかとしているようだった。夜の綿雪を背景に、窓ガラスに映る八重は儂げな程に小さい。背が低いわけではないが、猫背と童顔、そして隣に大柄な尚志がいるせいで今にも消えてしまいそうな気さえした。なあ、と呼びかけると、何だい、と存外静かな声が返ってきた。

「そういや、まだちゃんと言ってなかったなって。ドラマ化、おめでとう」

「……ありがとう。律儀なやつだね、君は」

言葉とは裏腹に、ガラス窓に映った八重の顔は少し曇った気がした。

「嬉しくないのか？」

「そういう訳じゃない、と思う、けど…」

奴はレースカーテンの裾をキュッと握った。八重は隠し事が出来ない、というよりしようとしていない。言葉を探し迷うことはあれど、言うか言うまいかで悩む様は見ることが無かった。

「…ねえ、ショージ。自分は幸せだよ。好きなことで食べていけている。心配して訪ねてくれる友達もいる。正直これ以上の幸福はないと思う」

そうだな、と言おうとして尚志は息を飲んだ。さっきから奴の言葉と表情が一致しない。ブラックホールが渦巻くような、ひどく空虚な目をした奴がそこにいた。

「自分は確かに感じていたんだ。打算と官能の中で、それでも自分の為だけに生きた女の自己犠牲を。女を救おうとした男の献身的な身勝手を！ 恋物語なんて書くつもりは無かった。ゴールインなんて考えもしなかった。だってそれが一番美しい最後だって信じたから！ 男に足を洗われて、男に寄りかかるよりほかなくなって、それでハッピーエンド？ それなら彼女がネオン街で感じた幸せは偽物だったの？ 自分は誓ってそうは思わない！ あの時、彼女は確かに無二の幸福を得たんだ！」

ガラス上の結露が八重の顔を滴る。流れた水滴に二分された顔はどんな表情を浮かべていたか、尚志は覗き込むことが出来なかった。ここまで荒れた八重を悲痛に思えど、かける言葉がまるで思いつかない。

『進士八重』飛躍の一作とまで言われた『ネオンの鳶』。しかし、あの中に出てくる金と愛の間で揺れる男女も、情熱的な交わりも、奴は本当は書きたくなかったのかもしれない。だが一方で尚志の冷静な部分は是非も無い、と結論を出していた。水商売の女が主人公ともなれば読者は愛欲を期待する。詳しいことは知る由もないが、尚志には編集者の軌道修正は功を成しているように思えた。そして、プロの作家として生きていくのならこういうこともあるのだろうと。

「そんなに苦痛だったのか？」

「わかる人にはわかるんだよ。いつだったか君が書いたサスペンスみたいに、『進士八重』はハッピーエンドが下手だって」

ねえ、ショージ。ガラス窓に八重の横顔が映っている。少し首を捻れば視界に八重が入る。そんな簡単なことさえ、尚志は出来なかった。蛇ににらまれた蛙のように、暗い雪空の向こう側の虚像から目が離せなかった。

「自分は幸せだよ。幸せ過ぎるほどに。それなのに、どうしてこんなにも虚しいの？」

ついに尚志は目を閉じた。冷え切った瞳がまぶたで覆われ、ツンとした冷気が目の奥を突きさすように痛んだ。

一人じゃ生きていけないくせに独りでないと生きられない。

苦痛に喘いでばかりいるのに苦悩がないと呼吸もできない。

「そりゃ、お前が物書きだからさ」

冷気は目の奥の神経を伝って胸を貫いた。口から出た答えはあまりにも凡庸で明白で、八重の求めるものとはかけ離れていることだけは確かだった。

そっか。八重は呟いた。

尚志は温まった目をゆっくりと開いた。ガラスの向こうでは八重は正面を向いていた。

「…難儀なことだね。我ながらに」

「全く、とんだ業を背負ったもんだ」

「本当に。…いやな世界だね」

ままならない。

何が、どう、なのか。訳も分からないまま、この六文字が二人を包んで揺蕩っていた。

季節は巡った。

春の陽気は未だに姿を見せないが、尚志が勤める塾の生徒達は十人十色の春を迎えていた。第一志望合格を決めた者、第二第三志望で妥協した者、妥協できずに浪人を選んだ者。最善、と言い難い者も少なからずいたが、彼ら彼女らは最後に顔を合わせたときには笑っていた。だから尚志は、その笑顔を信じることにした。

桜が花開く少し前、何とか時間を作って八重に会いに行った。『デス・ゲーム』を届けに。そして奴に飯を食わせるために。今回はハヤシライスを作った。ついだにご飯を半熟オムライスにしてやると、奴は無邪気に喜んだ。公平なじゃんけんの結果皿洗いに従事する八重の後姿は相変わらず筋肉も贅肉も無く、侘<sup>わび</sup>しい程にひよろっとしていた。後日、メールで小説の感想が届いた。「タイトルに反して妙に優しい雰囲気だったから驚いた。教え子達が可愛いんだね。でも、これはこれで瑞々しい魅力が出てるよ」と最後に書いてあった。生活の為、致し方なく就いた職ではあるが、尚志とて生徒たちを小説のネタにするくらいの情は沸いていた。生きていく以上後悔は避けられない。だからこそ、輝くべき若者の未来に少しでも多くの幸福が待っていますようにと祈るのだ。それにしても瑞々しいとは。尚志は少し照れ臭く思った。

尚志はまた新しく長編小説を書き始めた。

とある晩夏の日のことだ。

この地域は夏が終わるのが早い。そう言ったら同僚の講師に「それはお前の地元がおかしいだけ」と言われた。尚志の故郷では十月上旬くらいなら三十度前後の気温も珍しくない。それなのにここは九月に入るとめっきりと爽やかになってしまう。

大半の受験生が本格的にエンジンをかけ始めるこの季節。これから半年、どれくらい予定が埋まるのかと自宅でスケジュール確認をしていた矢先、一通のメールが届いた。『デス・ゲーム』が提出した出版社主催の文芸大賞を受賞したのだった。

尚志は何度も何度もその通知を読み返した。出版社で懇意にしている編集者にまで確認も取った。電話口で「工作中だ！」と怒鳴られながらも、彼は確かに尚志が大賞を取ったこと、高名な評論家の某氏が「純文学のように鋭く、大衆文学のように馴染みやすく、児童文学のように瑞々しい」と絶賛していたことなどを話してくれた。

「少し早えが、おめでとさん。良くここまで踏ん張ったな」

そう言った編集者に、尚志は今書きかけの長編小説があることも伝えた。それならば完成次第うちに持ってこい。頃合いを見て出版してやる、と彼は言ってくれた。

「気張るねえ。何をそんなに焦っているんだか。だがまあ、小説家としてやっていけるかどうかは二作目にかかっている。こっちが待ちくたびれねえ程度に心血注いでな」

尚志は何度も感謝の言葉を述べて、電話を切った。続いてパソコンを起動させると、八重に宛てて受賞の由<sup>よし</sup>をメールした。

やっと、やっとだ八重！ お前の言葉は間違っていた！ようやくお前への道が開けたぞ、八重！

メールを送信すると、そのまま尚志は書きかけの小説に取り掛かった。いつもならば出勤・講義をしなければならぬ時間だが、偶然にも本日は日程調整のため塾は休講であった。今日一日は自分<sup>しょうせつ</sup>のためだけに費やせる。はやる気持ちを抑えつつ、今夜は寝ないで書くぞ、青臭く意気込んだ。

ピロン。

単調な電子音に尚志の意識は浮上した。寝ないで書く、そう思う程度の気力はあったのだが、全く身体は正直だった。自分はもう若くないらしい。

今何時だ、と時刻を確認する前に受信メール『進士八重』が目に入った。未だ少しぼんやりとしながら流れるようにメールタブをクリックした。

『拝啓 阿部尚志様

文芸大賞受賞おめでとうございます。連絡を聞いたとき、私は我が事のように喜びました。この賞は有名な作家を何人も輩出しているらしいので、今後の貴方の更なる飛躍に、より一層の期待が高まります。本当におめでとうございます。

さて、せっかくの機会なので暫し私情を語ろうかと思えます。先程貴方の受賞を我が事のように喜んだ、と書きましたが、訂正いたします。正確には我が事、なのです。貴方の受賞は、当然貴方の努力の賜物です。しかし同時に私のエゴの成功でもあるのです。ええ、包み隠さず言いましょ。長くなりますから、工作中ならどうか後回しにしてください。貴方の邪魔をすることは私も本意ではありませんから。

ではお話いたしましょう。

貴方はずっと、私が目指すから、私に引っ張られるように文学の世界に来てしまったと思っていますでしょう。まずそこから違うのです。私が貴方を引っ張っていたのではない。貴方が私を押しこんでいたのです。きっと今、尚志は訳が分からないと思っていますでしょう。確かに、初めて出会った時の貴方は、読書好きが高じて文章を書き始めただけの、ただの文学少年でした。文章を仕事にしようなど、ましてや小説家になろうなど夢にも思っていなかった。実際そう言っていましたね。でも、あの日。私が初めて貴方の小説を読んだとき、私は星が落ちた様な衝撃を受けたのです。こんなにも整然と俯瞰的に、それなのに自然とその状況に同調できる。こんな文章を書ける人がいたのかと。最も、そのお話は貴方の苦手なサスペンスのせいでのっぺりコテコテになっていたのだけ。ええ、忘れませんとも。

あの時、私はきっと貴方に恋をしたのでしょう。貴方の文章に惚れて、私は物書きになったのです。物書きになったから、文学の道を夢見てしまったのです。在りし日の青春に埋もれるはずだった『進士八重』の原点は尚志なのです。だから私は、私が売れたのだから君も売れるはずだと信じていた。納得していただけたかな。

物書きになったときから、小説が私の全てになった。いや、違う。元々他に私ができる事なんて何もなかった。出身大学も君より2ランクは下だ。体力も生活能力も無い。さぼり癖もあるし、人と関わることも好きじゃない。君はこの手の賞賛は嫌いだらう。でも私は本当に凄いなと思っていて。突出していなくても、人から求められる力を君は努力して身に付け、さらにそれを人のために使うことができる。私には何一つとしてできないことだ。私の中ではいつも「死んじゃえ」「役立たずが」「ゴミめ」って嘯くんだ。馬鹿みたいだろ？ でも事実なんだ。

話が逸れたね。ともかく、私には小説しかない。私の小説は人の感情とそれをより美しく表現する言葉でできている。君がそう言ってくれた。嬉しかったよ。だからどんなに小さな悲しみも苦痛も受け止めて、噛み砕いて、ろ過して生きてきた。私の皮膚を突き抜けて、私の骨を擦り削って、私の血液で濾された言葉が私を生かしてくれた。

ねえ、尚志。人は生きる意味を持って生まれてくる訳じゃない。後から意味を作って、もしくは生きたいと願って生きるものでしょう。私は分からなくなったんだ。住み着いた自己嫌悪も、否定された圧迫感も、分かってもらえない息苦しさも、物の数でもなかった。それを言葉にできない、飲み干せないほどの虚無感に比べたら。人が人として生きていること、どうして世の人々はその悲しさに耐えられるの？ 悲しい、嬉しい、苦しい、楽しい…無限の感情ですら、「虚無」としか言えない空虚の下位互換でしかないのだよ。怖いよ。辛いよ。虚しいよ。心はそう感じているのに、この指先は文字一つ掴めない！ 今の私はがらんどうだ。空のバケツほど大きな音が鳴るように、私の中ではとっくに折り合いをつけたはずの罵倒が声高々にリフレインしている。「死んじゃえ」「役立たずが」「ゴミめ」それにしてもあまりに貧困なボキャブラリーだ。私はあまり喧嘩とかしたことが無いからかな。

尚志。私が友人として君に求めるのは三つだ。一つは、私の思いを知ってほしかった。この支離滅裂かつ目汚し甚だしい文章が真に偽りのない私の本心だ。二つ、これからも君は物書きで居続けてくれ。これは私が頼まずとも大丈夫だろうと思っているが、せっかくの機会だ。私に身内面をさせてほしい。恐らく私は地獄に落ちるだろう。舌を抜かれようが、窯で茹でられようが、私はいつだって君の味方だ。君の幸福を祈っている。三つ、君に自殺した友人を持たせてしまった事を許してくれ。君が小説家として花開こうとした今、私に一切の未練はない。あるとすれば死というものを記すことができない無念だけだ。

私はもう人ではいたくないのだ。さようなら、最愛の友よ。

椅子を蹴飛ばして、鍵をかけるのも忘れて尚志は駆け出した。外はすっかり暗くなっている。が、道筋は覚えている。全速力で走る尚志に冷えた空気が駆け巡る。脳血管の過剰労働で頭に殴られたようなぐらつきを感じる。目の前が白く点滅する。懐かしい感覚だ、と尚志は捨て置く。人生の中でこれまでにない程、自分の大きな体と今までの運動経験に感謝した。

大通りを少し外れた閑静なマンション。その4階の406号室に影は飛びついた。

「八重！」

ドアホンを押すと噛みつくように叫んだ。応答なし。ドアノブを捻った。鍵がかかっている。開かない。

「八重、いるんだろ？ 返事をしろ！」

扉を拳で叩く。扉は僅かに振動するのみでびくともしない。

聞こえない。

裸足がフローリングをペタペタと滑る音が。

のんきにカチャリと鍵の開く音が。

伸ばし放題のぼさぼさの髪にだらしないルームウェア姿で、ああ、ショージかあ、と言う締まり無い声が。

「八重——」

夜、寝静まる。誰の足音も聞こえない。

『もしもし？』

「もしもし、阿部です。もうすぐ出発の時間なので、ご挨拶をと思ひまして」

『まあ、尚志君。今日が出発なのね。それで…』

「…すみません。まだちょっと…」

『そう…。ごめんなさいね。あの子のことでは尚志君にも沢山迷惑をかけちゃったもの』

「そんな、気にしないでくださいよ。俺がやりたくてやったことも多いのですから」

『尚志君…いいえ、駄目よ。いくつになっただって子の問題は親の責任なのだから』

「そういうものなんですかね。俺からしたら晴美さんの教育に非は無かったと思いますよ」

『そういうものなのよ。色々考えちゃうもの。もっと会いに行けばよかったとか、小説家の道も反対すればよかったとか…』

「…手厳しいですね。そういう所、奴にそっくりですよ」

『それは買い被り過ぎよお。あなたの親御さんだってきっと同じ気持ちよ』

「そう…です、かね？ うちの両親なんて俺が小説家になるって言ったら勘当紛いに追い出したくせに、デカイ賞を取った途端諸手を上げて認めだしたんですよ」

『あら、そっちだって私に言わせれば立派なご両親よ。追い出したのはあなたを真剣にさせるため。例え売れなくても一人で生きていけるようにさせるため。口にしていなかっただけで、きつとご家族もずっと尚志君のことを心配していたわ』

「親の心子知らずってやつですかね。っと、すみません。そろそろ時間ですね。晴美さん、色々とお世話になりました」

『こちらこそ。もしあなたがいなかったらと思うと、今でも生きた心地がしなくなるのよ』

「俺もです。また、連絡します」

『行ってらっしゃい。あの子を…よろしくお願いします』

雪が降っていた。ガラス越しに目を凝らしてようやく見える程度の粉雪が、灰色の滑走路にち



らちらと舞っている。飛行機止まらないといいな。尚志は一人呟いた。

「いいのか。電話切っちゃったぞ」

いくつもの鞆とケースに囲まれて座り、ぼんやりと空虚を眺める奴に聞いた。その顔は不健康な程に青白く、頬はこけ、髪と肌は痛ましいまでに荒れている。げっそりと表情の抜け落ちた奴は幽霊のようだった。

「何で、こんなところに…」

「ん？ もう一回説明してほしいって？ いいぜ。俺たちはこれから飛行機に乗ってアメリカに――」

八重は力なく首を横に振った。気分が悪いか、と聞くと、人混み、と返ってきた。

「何で人混みがいやなんだ？」

「たくさん人がいる。その一人一人が、みんな人生を背負っている。…押しつぶされる。気持ち悪い」

便所行くか、と聞いた。八重はまた首を横に振った。

あれから半年が経った。

八重は今も生きている。駆け付けた尚志がすぐに警察と救急に通報したから。幸い後遺症も残らなかった。しかし八重の枝のような左手首には大きな一文字が残った。切った場所と深さから本気で死ぬ気だったのだろう。後に医者からそう聞いた。

八重は死んだように生きている。天の川を写し取ったような瞳はどこまでも曇り、血の通わなくなった頬はめっきりと動かなくなった。飯もさらに食べなくなった。食べた後戻すこともあつたらしい。療養のために実家に帰り、近頃はなんとか人間らしい生活をするようになったそうだが、八重の家族はお手上げ状態だった。何を話しても八重は自殺願望を捨ててくれない。初めて八重の実家を訪れた際、晴美は泣きながら尚志にそう教えてくれた。

尚志はというと、この半年間死に物狂いで働いた。今まで通り講師の仕事をこなしつつ、小説を書き上げ、編集者とも打ち合わせを重ね、偶に八重の顔を見に行き…。八重が実家に帰った後は、空いた時間を全て一本の小説のために費やした。三月になって教え子たちを送り出し、長編小説の最終チェックもパスして、そして尚志は今、八重を連れてアメリカへ移住しようとしている。

「どうしてアメリカなの」

「アメリカって自由の国だろ。あとだだっ広いから」

「どれくらいいるつもりなの」

「さあ？ 満足するまでだな」

「お金どうするの」

「それなりの貯蓄はある。後は本が売れることを祈るだけだ」

「大賞取って、これからじゃないの」

「担当には話を付けてある。勿論お前の方も」

「英語、苦手なんだけど」

「奇遇だな。俺もだ」

「うそつき」

「嘘じゃねえよ。…最後以外」

八重は笑わなかった。

尚志は八重の前に膝をつき、視線を合わせるとあのな、と八重の手を包み、優しい声で言った。  
。

「生きていたくないっていう、お前のその思いは否定しねえよ。でも本当にそれで死んでしまっているのか？ なあ、進士八重先生。世界にはお前の言葉で輝く物がいくつある？ 俺たちはどこへでも行ってもいいんだ。人混みが嫌なら人のいないところに住めばいい。抛り所が欲しかったら籍を入れてもいい。そうしたらお前の虚無も何か分かるんじゃないか？ 苦痛に喘ぎながら、それを言葉に昇華するのが物書きじゃないのか？」

相変わらず虚ろな瞳をしていたが、そこにはちゃんと尚志が映っていた。八重はしばらく黙っていたが、やがて震えながら口を開いた。

「そんなの、絵空事だ。夢物語だ。知らなかった。君がそんな傲慢なことを言うなんて」

「傲慢なのはお互い様だろ。勝手に自己完結しやがって」

尚志は立ち上がった。八重は座ったまま、目は尚志を追っていた。表情の無い、しかし見上げた先の眩しさに目を細めた、そのことがどうしようもなく尚志を安堵させた。

「初めてお前の小説を読んだとき、俺だって感動したよ。お前より文章の上手い奴、ストーリーが面白い奴、そういうのは見たことはあったけど、お前ほど一途に感情を書こうとした奴は初めてだったから。俺には絶対に真似できない。なのに目が離せない。あの感じは、忘れられないさ」

八重は瞬きをした。その顔には長らく映ることのなかった色が、困惑が浮かんでいた。そういえば、尚志は小説に関しては分析・批評ばかりで、主観的な感想を言うのは初めてだった。そう思うと途端に照れ臭く、歯切れが悪くなってきた。

「つまりだな、お前が何と言おうと俺はお前に惹かれて物書きになったんだ。死にたきゃ俺より長生きしろ」

目を見開いた八重が目の前にいる。見上げた大きな目には、僅かに頬を紅潮させた尚志が映っている。八重の口は小刻みに震えている。開こうとして、また閉じて、しかし閉じきれず、不規則な呼吸だけがようやく漏れていた。空港の雑踏の中、とあるベンチの一席。そこは確かに無音だった。

——航空からの出発便をご案内いたします——

アナウンスが無音の空間を切り裂いた。二人はどちらともなく滑走路に目を向けた。ちょうど一機の飛行機が空へ飛び立ったところだった。

時はもうすぐそこまで来ていた。

尚志は飛行機から目を離して八重の方を向いた。今度は正面から、直接八重の目を見ることができた。

「八重。ここまでだいぶ強引にきちまったけど、俺とて嫌がる相手を無理やり連れていく気はない。俺は行く。お前は、どうしたい？」

八重の開きっぱなしだった口元がキッと一文字に結ばれた。半年ぶりに尚志は八重の顔の筋肉

が動く様子を見た。不格好に歪んだ顔は泣いているようにも、怒っているようにも見えた。

「…酷い。ひとの死に介入して、生に縛り付けて、こんな所まで無理矢理連れ出した挙句、最後は自分で選べなんて」

そうだな。尚志は答えた。

「自分は死んでおけばよかったんだ。そうすれば、少なくともこれ以上無様を晒すことはなかった。なのに、なのに、新しいプロローグを突き付けられても、自分には何もできないのに。こんな不細工なエンドがあつてたまるか！」

近くを歩く何人かが八重の叫び声に振り向いたが、二人は気が付かない。

尚志は驚くことも怖気づくこともなかった。それどころか、穏やかな笑みさえ浮かべて言い放った。

「最低なエンドで結構。それでお前が死なないのならな」

奴の奇妙に歪んだ顔が、一瞬さらにくしゃくしゃになった。俯き、両手で額を覆い、一度だけ鼻を吸る音が聞こえた。

「…馬鹿野郎」

最後に八重はそう呟き、ふらりとベンチから立ち上がった。

あまり時間の余裕は無い。両手にバッグとケースを持つと、小走りで搭乗口に向かった。八重はやっぱりふらふらとしていたが、何とか尚志の後ろについて来ていた。

尚志はもう『進士八重』の本名を知っている。しかし尚志は奴を『八重』と呼び続ける。八重が頑なに尚志を『ジョージ』と呼ぶように。

「フライト中暇だろ。新しく書いた長編があるが、読むか？」

「読む。どんな話だい」

「今回は物書きの話なんだけどー」

しょうせつ

お前 のためならば何だって欲張るし何だって捨ててやる。これは世界で一番、身勝手に慈悲深い人たちの  
お話。

やがて来る素晴らしき日々

文月遼、

▼PLAY BACK

「映画を撮ろう」

夏休み直前、「映画部」の部室に集う三人を前に下村克己部長はそう言った。私は手元のリモコンで五十インチの4Kテレビの一時停止ボタンを押した。ガラの悪い男達が跳ねたり殴り合っている場面を見て「あっ、今の動きなら私でもできそうだなー」なんて思った矢先だった。

「かっちゃん。急にどしたん？」

唐突な部長のつぶやきを聞いて、部長の隣に座っていた岳前果凜はスマホのフリック入力を止めて顔を上げる。盛り気味の赤いツーサイドアップが揺れて、部長の顔にべちんと当たる。

「風邪ですか、かっちゃん先輩」

「健康だ。話を戻すぞ庵野。なぜ人は記録を残したがると思う」

かっちゃん、もとい我らが映画部部長は眼鏡を直し、私に問いを投げかける。記録を残すって、そりゃ……

「経験を残すためです」

「優等生な答えだ。次！」

うわ、一番部長に言われたくないセリフだ。切れ長の目に銀縁の眼鏡なんて、いかにも優等生然としたビジュアルのクセに。

いーと歯を剥き出しにして威嚇する私を部長は無視する。

「思い出づくり？」

「小学生でも思いつくような凡庸な答え。大正解だ」

部長はぱちんと指を鳴らし、褒美だとばかりにお茶請けのチョコレートを果凛先輩の手元に置いた。

「茶番はいいから続けろよ」

果凛先輩と部長のやり取りを見ていられないとでも言いたげな声が飛ぶ。その声の主は部室の片隅に置かれたフジカラーのベンチに寝転がっている少年からだ。冷房が一番利く特等席で寝転がる姿は、根元が黒くなってプリンみたいな金髪もあって、ネコ科の大型動物を思わせる。石動真琴、私の唯一の後輩だ。

「真琴。一応先輩なんだから、敬とこうよ」

「眨してるのか分からんフォローはよせ」

「だから、話を進めろっての。悠喜センパイも黙ってる」

私は口許にバツ印を作って沈黙のポーズを取る。ふざけているのかと、真琴のこめかみがひくついたらけれど、いちいち突っ込むのも面倒になったのか、枕にしていた腕をもぞもぞと動かし…真琴が眼を見開く。ここで私にブチ切れておけば話がうやむやになったのでは気付いたようだけれど、もう遅い。

「そう、思い出だ。人は失われた時間を永遠にしたいという欲望に支配されている。それに例外はない。そもそも――」

いわく、記録は空間を超越する。「かつてあった」証明として残り続ける。彼の演説にこの場にいる誰もが、飽きたところで、

「もうすぐ卒業するから思い出作りしたいってことですよね」

と、私は話を切り上げた。真琴は「やっちまった」って顔をしてるし、一番話に乗っかりそうな果凛先輩も、話に飽きているのかスマホのフリック入力を再開している。

「無粋な要約に感謝しよう」

私に話を遮られたことに不満がありそうにこちらに目を向け――私はせめてもの意趣返しとあつかんべーをする――、けれど要約の内容を否定しなかった。

「でも、機材はどうするんです？」

「問題はない」

先輩の後ろには、いつの間にか三脚に設置されたビデオカメラがあった。キャノン製、EOS80モデル。

「実はテストも兼ねて回していたのだよ。こうした他愛ない日常を撮ると言うのもまた一興だと思ってな」

「いつものことですが、唐突ですね」

特殊なアルバイトをしているとはいえ、躊躇なく十萬を支払う豪胆さに、私は息を漏らすしかなかった。

「ンな新品ばっかで使えるのかよ。そもそも、映画、撮ったことあんのか？」

真琴のうんざりしたような言葉に、部長は胸を張って部屋の壁一辺を占有するスチールブックの山を示す。

「サンプルなら沢山ある。だろ？」

「そんなこと言ったら、オタクは全員名監督だ」

「スパルバーグはクロサワオタクだろう」

「中学校の数学からやり直せバカ」

いかにもチンピラ然とした風体の真琴から飛ぶまっとうなツッコミを聞いて、果凜は思わず噴き出した。

「かっちゃんは単にからかっただけだって」

「映画を撮るのは確定なのかよ……」

沈黙を降参と捉えたのか、部長は真琴と私を交互に見て満足そうに頷いた。私は下手に喋って巻き込まれるのが嫌で黙っていただけなんだけど。とはいえ、映画を撮ったことのない私に任せられることなんてタカが知れて……

「主演は石動と庵野」

とんだ大役だよ。私も驚いたけど、真琴の驚きようはそんなものじゃない。加えていた紙パックのジュースがむせ返り、ベンチから身を起こそうとして、そのまま床に崩れ落ちた。



「シロートに主演だ？ 何考えてんだクソメガネ！」

「素人しかいないのだから仕方あるまい。それに、他に人もおらんだろう。ちなみに俺は監督兼撮影。果凜は脚本他演出だ」

確かに、うちの部員はここにいる全員。早々増えても困るとは言え、存続ギリギリの人数だ。先輩が色々こなすのであれば必然的に私達が演者ということになるのは当然の話だった。

身を乗り出して果凜先輩のスマホの画面を覗き込む。メールソフトをメモの代用に使っているらしく、鉤括弧付きの会話文と、風景や行動の走り書き……いわゆるト書きが延々と綴られていた。少なくとも、今の思い付きを聞いて書ける量ではない。先輩も始めから部長とグルだったと考えていいだろう。

「ちなみに、どんな作品なんですか？」

「お？ 意外と乗り気じゃん？」

「ゴネてもキリが無いですから」

口ではそう言ったけれど、結構その気になっているのは本当だった。素人同然の自主制作と言っても主演という言葉が聞けばちょっとはワクワクするのが年頃の女の子ってものだろう。

「ちなみに、どんな役ですか？」

「妻子持ち教師と不倫して身籠ったけど墮ろされて自殺寸前まで追いつめられてる病み系女子高生」

少女漫画原作の映画っぽいコメディを考えてたから、想像より二十倍くらい重い設定が飛んできた。ちょっと返事に困った。病みかー。ぶっちゃけ自信ない。私は見ての通り、どこにでもいる、ちょっと運動が得意で映画が好きな女子高生で、別に禁断の愛を経験したこともないし、そういう経験は置いとくとしても身籠ったこともましてや墮ろした経験も無い。あれこれ考える様子を悟ってか。果凜先輩はにへっと笑って鞆の中に入っていた数冊の本を見せる。

「別に本当にやれってわけじゃないから、安心してよ」

「いや、そう言われたら流石に断りますよ」

「だよなー」

本を受け取り、鞆の奥にしまう。真琴と言えはいそいとベンチに戻ってむすっとした表情でいる。

「でも、真琴はいいの？ 自分の役、気にならない？」

「気になるも何も」

真琴はそう言って部屋の隅にあるロッカーに手をかける。およそ映画おたくのボンクラが集まる部屋にしてはいやに物々しい存在感を放っている。テンキーに19860208と打ちこむ。

取り出すのは安っぽい玩具みたいなプラスチック製の拳銃。グロック19。いわゆる第五世代モデルだ。先端にはマズルブレーキと打撃用のスパイクが備えられている。

私のようなうら若き乙女でも人を殺せるような小さなグリップやボディを除けば、特徴がないことが特徴の拳銃だった。

「集まったのはガラガラ喋る為だけじゃねーだろーが」

その言葉を聞いて、部長も私も、ロッカーへと向かう。果凛先輩だけは銃を見て何かに気付いたように手を叩く。しかし、しっかりと来ないのかグロックと真琴を交互に眺め、んーとお唸っている

「どうしたよ、果凛センパイ」

「あー、まこちゃんにはこの銃、ちっちゃいかなって」

「ちっちゃいもなにも、これがウチの得物だろ」

「そーゆんじゃなくてさー。なんて言うの？ 見栄え？」

「見栄えで命を預ける得物を選べっかバカ」

そう言いながら真琴は更に奥から仕事道具を取り出した。スタームルガー社製MP9、シャツの下に着るポイントブランク社のボディーマー、弾丸ポーチ、その他諸々が机の上に並ぶ。

「ったく、緊張感ねーな」

「しょーがないっしょ。そうだ、仕事の後もカメラ回そうよ」

「部長、今日の仕事が終わったらごはん行きましょうよ」

「ファミレスでいいな。カメラのせいで懐がヤバイ」

「だと思った」

いつからこうなっているのかは分からない。けれど、世の中には人間に化けたロボットだとかアンドロイドが潜り込んでいて、日に日に生きているそれと私たちは戦っている。そういうことになっている。

普段はボンクラ高校生。そして仕事があれば一転、サブマシンガンと拳銃片手に暴れまわる。

「私たちの仕事を取ってる方が、映画になりそうですよね」

ぽつりと呟いた言葉を聞いて、果凛が嘖き出す。部長もつられて呵々と笑った。自分で言っているのもおかしくて、笑ってしまった。真琴も声は上げないものの、口許を歪めていた。

こんなことにも気づかないくらいに、私達は平然と殺す殺されるの世界へ行くんだ。

## ▼▼FAST FORWARD

たん、たん、たたんと軽い銃声が響く。腕を折り畳み、上半身や腰を捻ることで照準を合わせる。お腹に二発、反動で銃が跳ねるままに任せて胸に二発。腕を伸ばして拳とグリップを後頭部に引っかけ、そのまま後頭部を強引に引き下ろし、プロテクターのついた膝で顎を砕く。この一連の流れは三秒とかからない。銃のスライドが下がりきって弾切れを示す。そのままホルスターに押し込んで、腰のサバイバルナイフを引き抜く。

「それ、の手にはノリンコ製の54式拳銃が握られていて、今にも七・六二ミリのフルメタルジャケットをぶっ放して私の胸を抉ろうとしている。それ、との距離はおよそ七メートル。拳銃による銃撃戦が最も発生しやすい距離だ。

銃弾を避けることは到底できない。けれども、やれることはある。強引にからだをねじって、自分の身体を強引に射線から外す。照準が一瞬だけずれる。調整しようと銃がぶれる。

「ーッ！」

コンマ数秒。けれど、その時間があれば十分だった。手首をスナップする要領でナイフを「それ、の顔目がけて投擲。

ノリンコを片手に持ち替えて、「それ、は無造作に顔を覆う。艶消しの黒いナイフがシリコンやポリウレタン樹脂で成形された皮膚を突き破って、掌を貫く。

「それ、は痛みを感じない。ロボットだから、マシンだから。だだっだー。なんて。」

生身の人間なら泣き叫ぶような痛みにも無頓着に、それ、は私を撃とうとする。ロクに定まってもいない照準で。ここからは祈るしかない。ポイントブランクのボディアーマーは、トカレフの七・六二ミリを止めてはくれない。七メートルの距離を詰めるのが早いのか、どこかを撃たれて身動きが取れなくなって……その先は考えるのを止めた。できるだけ姿勢を低く、廊下を駆ける。

グロックよりもいくらか重たい銃声が数度響く。壁や床を銃弾が抉ったけれど、幸運にも私は生きていて五体無事。

地面を這っている蛇が飛びつくのを意識して……果凛先輩のアドバイスをイメージして、私は腕を伸ばす。肩甲骨ごと前に持って行くようにして片手で拳銃の銃身を、もう一方の手で銃を握る手首を絡め捕り、そのまま身体ごと腕をねじって、銃を持つ姿勢を崩し、銃を奪い取る。地面を蹴って後ろに飛びながら即座に二連射。首と胸にぶすぶすと穴が開いて、それ、は地面に倒れた。

「インチキ格闘術かと思ったけど」

先輩の使っていた格闘技、思いのほか、けっこう一使えるわ。

そんなことを思いながら、残った弾丸を全部叩き込んだ。

よし。空のマガジンを交換する。両腕を引き付けるように構えて、私は建物のクリアリングを再開する。

## ▲▲REWIND

学校の屋上——立ち入り禁止で、おまけに授業中ともあれば、誰も来ない場所。そんなところで、あたし、はフェンスを乗り越えて縁に立ち、錆びついた網に手をかけて身体を揺らす。

「——」

口ずさむのはルイ・アームストロングの『愛は全てを越えて』。  
We have all the time in the wo

愛しあいたいだけ。Just fo Love それ以上も、Nothing more それ以外も望まない。Nothing less

ただ、愛しあいたい。Only love ただ、Only love それだけでいい。

「おい、何やってんだ」

ひどく冷たい声だった。振り返ると、立っているのはいかにも不良っぽい顔立ちの青年だ。`あたし、は、歌を止める。

「飛び降りる予行練習。どんな感じかなって」

`あたし、は決めた。この子が自殺を止めるように説得してきたら、飛び降りる。そうすれば、`あたし、のお腹にできた空っぽの気持ちを、この子にも伝えられるような気がして。

「えーと、その。止めとけよ」

手の力を緩めようと思ったら、少年は言葉を続ける。

「こっ、ここで人死にが出たら、マジで立ち入り…… 屋上に来れなくなんだろ。サボれないじゃねーか」

これから人が死のうとしてるのに、なんて身勝手なんだろう。

「ふふ……変な子……んふっ」

「んふふふ……くくっ……ごめっ……無理……」

「カットカット！」

ひー、苦しい。ごめんなさい。フェンスにしがみつきながらぶるぶると笑っている私を見かねてか、部長と真琴が駆け寄って来る。

「真琴はともかく、庵野は途中までいい調子だっただろう」

「それが問題なんですよー！」

笑い混じりに返事をする、真琴はバツの悪そうな表情を浮かべ、いつものようにキレた。

「悪かったな、シロートだよ！」

そう。真琴の演技は思った以上にヘタクソだった。果凛先輩は「まこちゃんに合わせたキャラを作ったよー」なんて言ってたし、確かにホンを見るに真琴っぽいチンピラだけれど、それにしても演じるのに苦労しているようだった。それがなんだか可愛かったり、おかしかったり、そ

んな感情の爆発が今の笑いだった。

「そもそも、悠喜だって何だありゃ！ 教師とやるような頭にオガクズの詰まった女が『女王陛下の007』なんて見てるワケねーだろうが！」

「オガクズ詰まっても映画は見えるでしょ。果凛先輩にちゃんと根回ししてたもんねー！」

真琴の辛辣なブーイング。演じる「あたし」と私が別人だとしても、なんとなくバカにされてる気がして思わずムキになる。ちょっと尖ってた方がメンヘラ感が出るよねって言うお墨付きはちゃんと貰っていた。よく考えたらこっちも酷い言い方だ。

けれど、よりにもよってオガクズ呼ばわりとは酷い。というか、この映画の撮影をはじめてからどうも真琴からの当たりが強くなってきている。脚本や押さえられる場所の都合で、出会ってからのシーンも何本か演じている。私も真琴もある程度キャラクターは掴めるようになってきているはずだけれど、どうも真琴の演技はぎこちなさがぬぐえない。それどころか、何度もショットを撮るごとにぎこちなさが増している。

「……庵野の笑いはまあ、カットするとしてだ。今のシーンはまだ使えるだろう。ファーストコンタクトだ。多少ぎこちなさがある方がリアリティもある」

それで行けるな？ と言いたそうに、部長は振り返る。映像をチェックしている果凛先輩がぐっと親指を立てた。

「ひとまず、今日の撮影はここまでにしよう。とはいえ、これ以上この調子が続くと問題だ」

「ミーティングですね」

「ファミレスで駄弁るだけだろーが」

真琴がぼそりと真実を言い当てる。それはそれで楽しいと思うけれど。

「真琴は来ないの？」

じろりと三白眼が私を見据える。視線が重なった。こういう時、男の子というか真琴はズルいなと思う。睫毛長くて羨ましい。そんなことを思いながら、真琴を見ていると、向こうが折れた。

「……行くよ」

「なんだかんだ律義だよな。いい後輩を持って幸せ者かも」

「従わなきゃ、カントクがうるせーだろーが」

だよねー。なんて私も笑い返す。あははと笑い返していると、視界の片隅で果凜先輩が腕を組んでいた。その視線の先には、頭をがしがしと掻いている真琴がいる。その表情がいつになく真剣だったから、私も思わず表情を引き締める。

学校から私たちのペースで歩いて十五分。そこに行きつけのファミリーレストランがある。名前を「T・スポッティング」と言う。ギリギリアウトな名前通り、オレンジのけばけばしい店内だ。目つきの悪い鋭角的ツインテールの金髪少女と、不愛想な黒髪美女がウェ이터をやっている。どちらとも接客態度は最悪で、料理の出来も、褒められたものではない。最近入って来た背の低い男の子が厨房に入ってから味は結構良くなった。とはいえ、それはここ数か月のことだから、悲惨な客足を考えればとっくに潰れても良いはずだった。それがまあ、何故息が長く続いているかと言えば、彼女達も多分同業者だからだ。

私達はそこそこ掃除の行き届いたテーブル席に座る。私と真琴が隣同士、果凜先輩と部長が隣同士って感じだ。

「ちゅいっす。いつものでいいよね？」

ツインテールの女の子が、私達の注文を勝手に決めて通り過ぎて行った。返事をする間もなく、口笛で『蒸気船ウィリー』を吹きながらモップ掛けをしながら中坊へと消えて行った。曲に合わせてお尻を振っている様子を、果凜先輩はどこかうっとりした様子で眺めている

「果凜。話を始めるぞ」

「後でID教えてもらおっと……ああ。はいはい。了解。んじゃま、どこまで撮れてるか確認しようか」

部長の諷める言葉を聞いて、果凜先輩がこっちの世界に返って来る。ごそごそと鞆からホチキス綴じされた紙束を取り出す。私達もそれに従って、紙を開く。

台本にはそれぞれ個性が出るという。四人が開いたホンは、どれも同じものなのに、全く別物みたいな雰囲気を出していた。例えば、果凜先輩は色とりどりのマーカーでメモが書かれている。よく見れば色や太さはしっかりと使い分けられて、単に華やかなだけじゃない、果凜先輩のメメさが見える。真琴のホンをちょろっと覗き込む。紙はくしゃくしゃだが、セリフや動きに所々書き込みがある。文字そのものは見えないが、多分、真琴なりに精一杯ホンと向き合っているみたいだ。

部長がスマホにコピーした映像を確認しながら、私はぼんやりとあらすじを頭の中でなぞる。カメラの前でピースするウェイトレス二人と、ノリノリでその様子を撮影してる果凜先輩を無視するとしてだ。

舞台はどこにでもある私立の学校。`あたし、は学校に通う教師と恋に落ちてその子供を身籠った。しかし、教師は妻子を持つ身であり、`あたし、は子供を墮ろしたばかりか、教師にもフラれてる。捨て鉢になって死のうとしている `あたし、だったが、それを `俺、に止められる。それがさっきのシーン。

`俺、はいわゆる不良。家族にいわゆる筋者がいて、それにも堅気にも染まれない半グレというやつだ。`俺、と居場所を失った `あたし、が傷をなめ合うようにして惹かれあっていく。果凜先輩曰く「ちょっと古いケド、この予算と素人でやれる限界だったよー」だとか。

「進捗としては半分程度だろう。ここからシーンを増やしたり削ったりで多少前後はするが……」

「問題は、こっから見せ場シーンが多いってことだよなー」

最初の出会い、お互いに惹かれていくシーンについては概ね撮り終えた。そして、距離の近付いた男女が何をするかと言えば、まあそういうことになる。初稿ではほんとに `そういうこと、を匂わせる場面があったが、その辺は高校生が撮った作品ってことで修正された。それにしても、キスとかハグとか、そういうシーンもあるわけで。満足した果凜先輩が腕を組む。

「あーし的には、これ以上のラブシーンカットはヤかなー？」

「とはいえ、役者二人の都合も考えねばならんだろう。ある程度はカメラのアングルで誤魔化しも効くだろうが」

果凜先輩と部長は、そう言ってじろりと私達を見る。その圧になんともなく気圧されてしまう。ドリンクバーの紅茶をひとくち含んで唇を湿らせる。

「うーん、そう言われても……」

ラブシーンに抵抗があるかと言われれば、それは勿論ある。脚本のテーマは `あたし、と `俺、のちょっとセツナイ系の恋愛だ。それをなあなあで誤魔化すわけにはいかない。お腹を括っではいるけれど、流石にプロの役者とはいかない。 `あたし、がするのは必要だと思ってるけど、私が年頃の男の子にそういうことをするってのはちょっと、そう。恥ずかしい気もする。

「じゃあ、質問を変えよっか。まこっちゃんのことはどう思ってる？」

「ナマイキな弟」



隣でぶくぶくと音がした。なんとなく面白くなさそうな表情をした真琴が、ストローに空気を吹き込んでコーラを泡立てている。拗ねていることは分かる。けど、異性として見てますって言われても困るだろうと思っていい感じにぼかしたお姉ちゃんの気遣いを分かってほしい。

「じゃあ、お姉ちゃんが弟にちゅーするのはどう？」

「ドラマじゃよくありますよね」

「そんな感じでいいんじゃない？」

なるほど……なるほど？ とはいえ、言いたいことは分かった。あくまでこれは演技なんだから、そんなに気負うなってことだろう。何も深刻に考えることではない。強引に誤魔化されているが、多分それくらい軽い方が精神的にも楽な気がする。

「庵野のことは大して問題ではない。単純なヤツだからな」

部長の視線が、隣でぶくぶくと泡立てている真琴へと映る。

「別に。するのは悠喜の方からだろ。コレがいいってんならいいんじゃないの？」

肘をついてストローを噛み潰しながら、真琴はいつもに増して無愛想に答えた。確かにホンでは、そうになっている。教師との関係が少しずつ噂になり、学校での居場所を失う`あたし、に`俺、は一つの解決の道を示す。そこで`あたし、はその決断を知って……って流れだ。確かにその通りだけど……

「他の場面でも真琴の動き、なんか変じゃん。それでやれる？」

私の言葉を無視して、真琴はガジガジとストローを噛み潰している。時折横目で私を見ては、すぐにそらしてを繰り返す。

私ではどうしようもない。それとなく部長に助けを求めるが、ふむと嘆息をついてコーヒーをすすっている。隣の果凛先輩の表情は、先程と同じく真剣だった。それが私と真琴を交互に見据え、やがて真琴をじっと見つめるようになった。

ややあって、なにかを決めたのかよいしょっと、気の抜けた掛け声で立ち上がる。通路に出て、真琴の肩をポンと叩く。

「ちょっと私、トイレ行ってくるわ。まこっちゃんもトイレ、行きたいんじゃない？」

「はあ！？ 何言ってんー」

果凛先輩の腕が一瞬、数十センチ伸びた気がした。頭一つ分ほど体格差のある真琴を一瞬で立たせて腕を極め、口を塞ぐ。

なんてお手本のような<sup>ゼロレンジ・コンバット</sup>超至近距離格闘術。そして無駄遣い。

「そんなワケで、ちょっと連れションしてくるねー」

真琴のひざ裏を時折蹴りながら、果凛先輩たちが陰に消える。

「今の、なんですかね……」

「さあ。だが、果凛に任せておけば心配あるまい。なにせー」

「だっ、誰が童貞だクソアマ！ 犯すぞ！」

「なにせ、一番部員の心の機微を見てるのが彼女だからな……」

部長の声は少し自信がなさそうだった。あと、そんなに動揺しながら「犯す、なんて言っても迫力はない気がする。

「へいお待ち。季節のフルーツパンケーキふたつに、ポテトフライ二つ。今のドーテーくんには大盛りサービスかもだ」

年頃の女子高生が本気の格闘術を見せた様子にも動じず、ウェイトレスがメニューを置いていく。なんとなく、居心地が悪くて、季節もクソも無い缶詰のフルーツポンチが盛られたパンケーキを食べる。着色されたそれは、不思議と味がしなかった。

## ▼▼FAST FORWARD

制圧の依頼が入ったのは「可愛い女の子を斡旋する」会社だ。情報ではターゲットは五人。仕留めたのは事務所で三人、廊下で二人。情報通りであればこれで全員のはずだ。とはいえ、肝心の情報と言うやつアテになったことは少ないけれど。

壁を背中にするようにして、ゆっくりと廊下を進む。あまりに静かすぎるせいで、どこからか聞こえる、何か柔らかいものを叩き付けるような、空気を含んだ音さえ鮮明に聞こえる。

聞こえた先は、社長室だった。雑居ビルにしては見栄えの良い扉。それを思い切り蹴破る。

女性の裸身が見えた。けれど、その全身が内出血で青くなり、頭に至っては原型を留めないくらいに潰れたそれを女性といえるかどうかは怪しかった。`それ、にもまあ、そういう機能はあるらしくて、肉袋を相手に一心不乱に事を致している。

生きてた頃はスタイル良かったんだろうな。先輩みたいに。そう思ってしまう自分がいやで、引き金を数度絞った。一発で背中がめくれ上がり、もう一発が延髄部を砕いた。もう一発いっところと思った所で、わき腹に鈍い衝撃を受けて身体が一瞬宙に浮いた。調度品の飾られた棚に激突したらしい。ガラスが割れて、ばらばらと降り注ぐ。変な笑いが唇に浮かぶ。

――順番待ちってこと？

ぼやこうとしたら、息が詰まって喋れなかった。こひゅーという間抜けな息が漏れる。部屋で順番を待っていたらしい

`それ、は、転がっているグロックを蹴飛ばした。腰のナイフを抜いて、無造作にブレザーごとアーマーを、下のシャツを、ブラを引き裂いた。殺さなかったのは気まぐれか、`それ、の趣味かは考えないことにした。

先端が皮膚の上を滑って、お腹の上がじわりと熱くなった。腕で突き放そうとしたら、殴られて視界がぶれた。

奥の歯が欠けたみたいだ。吐き出すのは負けた気がするから、そのまま飲み込んだ。能面みたいな顔が私を見ていた。機械のクセに女を犯す仕様があるとか、ちょっと笑えて来る。こういうときくらい、もうちょっとギラついた顔をしてくれてもいいのに。無表情なまま腰を振られても悔しさとかあんまり無さそうじゃない？ こんなことを考えるのはきっと殴られたせいだ。冷たい手が滑り込んで、身体のあちこちをまさぐってくる。

これから、どうなるのかな。いや、どうなるもなにもという話だ。操とか云々以前に、死ぬだろう。それもいいかなって、ちょっと思ってしまった。殺す殺されるの社会には慣れっこだと思っていたけれど、思いのほか心の底はガリガリと削れていたらしい。とにかく、色んなことがどうでもいい気がしてきた。

身体をまさぐっていた `それ、の手が、ジャケットの下にあるホルスターに伸びた。

砂漠の荒鷲  
デザートイーグル。銃口がお腹の上を滑る。

▲▲ REWIND

夕暮れの屋上。私はフェンスにもたれて夕陽を見ていた。

「これが、ここから見る最後の空か……」

「あたし、眼を閉じる。飛び降りようとした日も、こんな夕方だったなってい愛おしむみたいに。」

バン！ バン！ 銃声が響く。その音に、驚いて身を竦める。陸上のピストルの音ではない。

カツカツという足音。いつもの、見慣れた金色の髪。

「君……」

「よう」

「俺、は薄く、いたずらっぽい笑みを浮かべてその手を掲げる。その手に握られているのはステンレス仕上げの光沢を放つ、巨大な拳銃。デザートイーグルの五〇口径仕様。拳銃としては最強クラスの得物だ。体格の良い、そしてチンピラっぽいナリの彼に、そのギャング御用達の拳銃はひどく似あっている。」

けれど、あたし、は物々しい銃よりも、顔やシャツにべっとりとついた血に目を奪われている。

「その血って……」

「俺のじゃねえよ」

ここで、私は目を見開く。彼が殺意を持つほどの人間を、ひとりだけ知っているから。そして

「まさか——」

言いかけたところで、唇を塞がれた。あれ、キスシーンはもういくつかセリフを挟んでからだっ  
たし、そもそもホンではあたし、からすることになってたし、そもそも真琴はそういうシーンを嫌がっていて……

「悪い、勝手なことした。けど、もう心配する必要はねえよ」

これも、脚本にない言葉だ。けれど、あまりに真に迫り過ぎていて、あたし、も、私、も何が何だかさっぱりだ。先輩たちはカメラを回す様子はない。

「全部悪い夢だと忘れてくれ」

そう言って、俺、が銃を宙に向ける。何度も引き金を引く。まるで花火を打ち上げるみたいに、銃声が鳴った。それは何となく、葬式の時に使う礼砲を思い出す。

俺、は泣いてるようにも笑っているようにも見える表情を向け、きびすを返して校舎に消えていく。

遠くで歪んだサイレンの音が聞こえる。徐々に大きくなるそれは、学校へ向かっている。

後には茫然とする私を取り残され――

「そんなこと、する必要なかったのに」

どうにかして絞り出したセリフは掠れてどうしようもなく、演技なのか本音なのかも分からない。けれども、終わらせなきゃと思う一心で、掠れた喉を鳴らした。

「あたしは。君と一緒にいれば、それだけで……」

「カット！ ご苦労。ホンとは違うがいいアドリブだった」

呑気な部長の声が響く。けれど、真琴が戻ってくる様子はなく、私は私で喋る気力も残されていない。ただ、さっきの感触を思い出そうとしているみたいに、親指が唇の上を滑った。

「前のミーティングから真琴の演技は良くなったな。憑き物が落ちたみたいに自然になった。真琴、戻って来てもいいぞ？」

善き哉善き哉と頷いている部長。けれど、私はそれどころじゃないし、真琴は一向に戻ってくる様子が無い。そして、ミーティングで何があったかと言えば……

「果凛先輩、ちょっといいですか」

「うん？ お疲れちゃん。リップ使う？」

「後で借ります。そうじゃなくて、あの時のミーティングで、真琴に何を吹き込んだんですか？」

あはー。バレちゃったか。と言わんばかりに舌をペロッと出した。おちょくられてる気がして、軽くアッパーの構えを取る。

「冗談冗談！ 吹き込んだというか、アドバイスと言うか……まこちゃんが何で映画やろうと思ったか知ってる？」

「このままだったら部長がゴネにゴネるからですよね」

後で調べたけど、最初にこねくり出した論はロラン、何とかという思想家のそれだ。多分、こちがやる気を見せなければ、第二第三の引用を引っ張って来るだろう。そうなれば真琴だったまったものではないだろう。

「それもあると思うケドねー」

って言って果凜先輩は困ったように笑う。

「多分ヒロインがあーしだったら、やんなかったと思うよー」

「でも、ラブシーンは抵抗あったみたいじゃないですか。それどころか、演技もぎこちなかったし……」

部長の困惑も、果凜先輩のにへらっとした笑いもよそに、私はどんどんまくし立てる。自分でも、なんでこんなに必死になって否定しようとしているのか分かんないけれど、私自身制御が効かなくなってしまっている。頭がぐるぐるする。今までの真琴の表情が、むすっとした不機嫌そうな表情が、別のモノに見えてきてしまう。

主演を命じられてオーバーにむせ返った仕草も。

恋人役を演じようとして演じきれない姿も。

弟と言われてぶくぶくとストローに息を吹き込む仕草も。

「忘れちまえ」

キスを終えた後の、泣きそうな、笑っているような表情も。

「律義だよねー。よくある話じゃん。カップル役を演じてそのままくつつく話なんてそこら中にあるのに。それは、ズルい、気がするってさー」

なはは、と笑う果凜先輩の目が、猫みたいにきゅっと細くなった。それで、どうするの？ って言うみたいに。

「ちょっと行って来ます」

ぼかんとしている部長と、けしかけてきた果凜先輩を置いて、私は階段を駆け下りる。すぐに追いつくと思ったけれど、廊下の先にプリン頭は見えなかった。

とはいえ、あの銃をぶら下げたまま遠くに行けるわけもない。面倒くさくなつたから適当な教室に飛び込んでバルコニーに飛び出す。そのまま柵を乗り越えて、身体を振り子のようにして下の階のバルコニーに滑り込む。同じ要領で跳んで着地。目指すは「映画部」のプレハブ小屋だ。

「おう、どうしたよ、先輩」

大当たり。いつものフジカラーのベンチに座った真琴が、いつものぶっきらぼうな調子で迎えてくれた。俯いているせいで、人工的な金色の髪が顔を覆っている。表情は見えないが、腕まくりしたシャツからは素肌が微かに透けている。足元に落ちている血糊を拭いたタオルやシャツから匂う汗は不快では無いけれど、ちょっとヘンな気分になる。

真琴はそれっきり何も話さなかった。持っていたデザートイーグルを所在なくいじくっている。

私はそれとなく色あせたベンチに腰掛ける。思ったよりベンチは狭くて、肩がギリギリ触れ合うかどうかといった距離。

男物のメンソール系のボディソープの匂いがした。

「ねえ、その銃ってどうしたの？」

ああ、もう。聞きたいのはそんな話じゃないのに。けれども、取り掛かりとしては悪くないのかな。多分。

「先輩言ってたろ、グロックじゃ見栄えが物足りないって」

ああ。そういうことか。そんなことを言ってた気もするし、言ってなかった気がする。それだけ言って、また真琴は黙る。時折私の方を見て、何かを言おうとしては、口を嚙む。

「さっきの演技、よかったよ。最後の方は、ちょっとビックリしちゃったけどね」

ビクッと真琴の肩が震えた。「そうか」というぶっきらぼうな返事。また黙るのかと思ったら、がしがしと頭をかきむしる。

「言ったら。忘れろって」

「いいよ。`私は、一緒にいられればそれでいいから」

真琴がごくりと唾を飲み込むのが分かる。なにか、大きな決心をするように息を吸いこんで、

「悠喜センパイ。すんません。ズルい気もしたけど……」

「大丈夫。待っててあげる」

私は、真琴の手にそっと自分の手を重ねる。それで、真琴は何も言えなくなった。我ながらズルいなあと思う。お姉さんぶっておいて、私の方が余裕がないんだ。

微かに汗ばんだ手と、ひんやりした金属が心地よい。

「今度、その。海に行こうぜ。二人でさ」

ぎこちない真琴の言葉。それくらいなら、いいかなと思う。ちょっと派手な水着にしたら驚くだろうか。なんだか楽しみ。

#### ▼▼PLAY FORWARD

ああ。それだけはダメだ。

殺すことは覚悟していた。殺されるのは、覚悟していた。殺される以上、酷い目に遭うことは覚悟していた。甘んじて受け入れてやろうじゃないか。

けれど、その銃に触るのはダメだ。それで慰み者にされることだけはダメなんだ。

それだけは――

下着越しに冷たい銃の感触。電気ショックを流されたみたいに身体が跳ねる。それに紛れて砕けたガラスを握り締める。手がズタズタになるのも構わず、ガラスまみれの拳を横面に叩き付ける。もう一方の手で、もっと大きな破片を掴んで顔に突き刺す。ぷちっと軽い感触。眼を抉るって結構簡単みたい。

`それ、が怯んだのを見計らって、私はすり抜けるようにして拘束から逃れる。ほとんど引っかけるだけになったブレザーとパンツ一枚なんてみっともない姿だけれど、私は生きている。

`それ、が体勢を立て直し、デザートイーグルを構える。



「その銃に……」

懐に飛びこむ。肩甲骨を後ろに持っていかれるようにして軸をずらす。数秒前まで頭のあった場所を五〇口径のアクション・エクスプレス弾が通過する。耳の真横で爆音が響き、耳の奥がキーンと鳴る。

二発目を放つ前に、私の腕が銃を持つ手を極める。

「さわるなああああ！」

片手が銃身を、もう一方がグリップを押さえ、`それ、の腕ごともぎ取るような勢いで身体を捌き、銃をもぎ取る。

後は、構えもなにもなく引き金を絞った。女子供でも撃てるようになっているとはいえ、ライフル弾並の破壊力を持つ銃の反動は破格だ。腕を持っていかれるような感覚。

`それ、の胸が爆発した。至近距離のマグナム弾のエネルギーが、が拳大の風穴を作り出した。

どうと `それ、が倒れる。

もう一発撃った。ガラスまみれの片手の感覚はなくなった。`それ、の下腹部がなくなった。まだいけると思ってもう一発撃ったら、今度こ片手の感覚がなくなった。

それでも、撃つことはやめなかった。

気が付けば、立っているのは自分だけだった。

跳ねた薬莢が腿にぶつかって、じわりと熱い。浅く裂かれたお腹から垂れる血が、からだを汚した。手から流れる血が、彼の拳銃を濡らした。それでも、生きている。耳に仕込んだ骨伝導のインカムから声が聞こえる。

《ヴァルキュリアよりローン・ドッグ、状況の報告を》

孤独な獵犬  
ローン・ドッグ。ひとりで `それ、を狩るには相応しい名だ。

「ええ。 `あたし、は問題ありません」

▼▼PLAY BACK

フジカラーの色あせたベンチに座って、私は映画を見る。

「全部悪い夢だと忘れてくれ」

「そんなこと、する必要なかったのに」

「あたしは。君と一緒にいれば、それだけで……」

「カット、アドリブだが……」 「真琴に何を――」

「多分……あーし……」 「行って来ます！」

みんなで作った映画は、正直言ってつまらない。そりゃあ、素人が作ったらそうなるに決まってる。

けれど、そこには確かに、部長や果凛先輩がいて、真琴がいた。みんなは、そこでバカ話をして、撮影についてあーでもないこーでもないと考えて悩んで。そんな当たり前があったんだ。

「あたし、はそうして腹の、心の穴を埋める。それで充分だ。」

「いいのか？ 俺達はそう長生きはできない」

「そりゃそうだけどさー。後悔残すのも駄目っしょ。それに、あーしらが言っても、説得力ないって」

「かもしれん。所で、次の休日だが、海にでも……」

部長の言葉が、自然と真琴の誘いと重なった。

「今度、その。海に行こうぜ。二人でさ」

けれど、二度と来ない「今度」だけは、どうしようもない。この先には何もないから、「あたし、はこうするしかない。」

▲▲REWIND

あとがき

「文章も構成もガタガタ。けど、お前の書きたいものへのパワーとか勢いみたいなものは伝わってくる」

文芸部に入って、私が一番尊敬している先輩に言われた言葉がそれでした。反論のしようがありません。今読み返しても、昔の自分をぶち殺したくなります。

けれど、読み返すとそれを書いた頃の自分がぶち殺すぞと行って来ます。お前こそヘンに色気を使いやがって、と。昔と今の自分の殺し合いです。ぎゃあ、じぶんころし。

腐っても文芸部で四年、お仕事とかでも物書きをしていると、自然とその手の欲望を制御する方法を覚えるようになります。ツインテールとかレズとかダダ漏れじゃねえかというのはさておき、どうすれば上手いこと魅せられるかってレベルの意識は芽生えてきます。けど、昔の私の言うことも頭にちらつきます。

なので今回は私が書きたいものをひたすら盛り込みました。やりたいことをひたすら詰め込んで、頭を抱えてた頃を思い出して書きました。正しいとは思いません。一年の頃のパワーがあるとも言いません。むしろ、全部がダメダメかもしれません。けれど、私はこれを書きたかったと胸を張って言えます。

そんなキラキラした欲望が僅かでも伝わればと思います。

あと私、皆勤賞じゃん。褒めて。褒めろ。褒めてください。

一月十日、尾崎裕哉を聞きながら。

マルチプレイモード

文部 蘭

今宵も神秘的な 夢が降りて

なけなしの退屈を 千切ってくんだ

魔力が封じ込められてるって 噂の石

掻き集めて僕ら 物語るんだ

さだめ  
運命 なんて棄てといてさ

嫌だね なんて言わないでよ

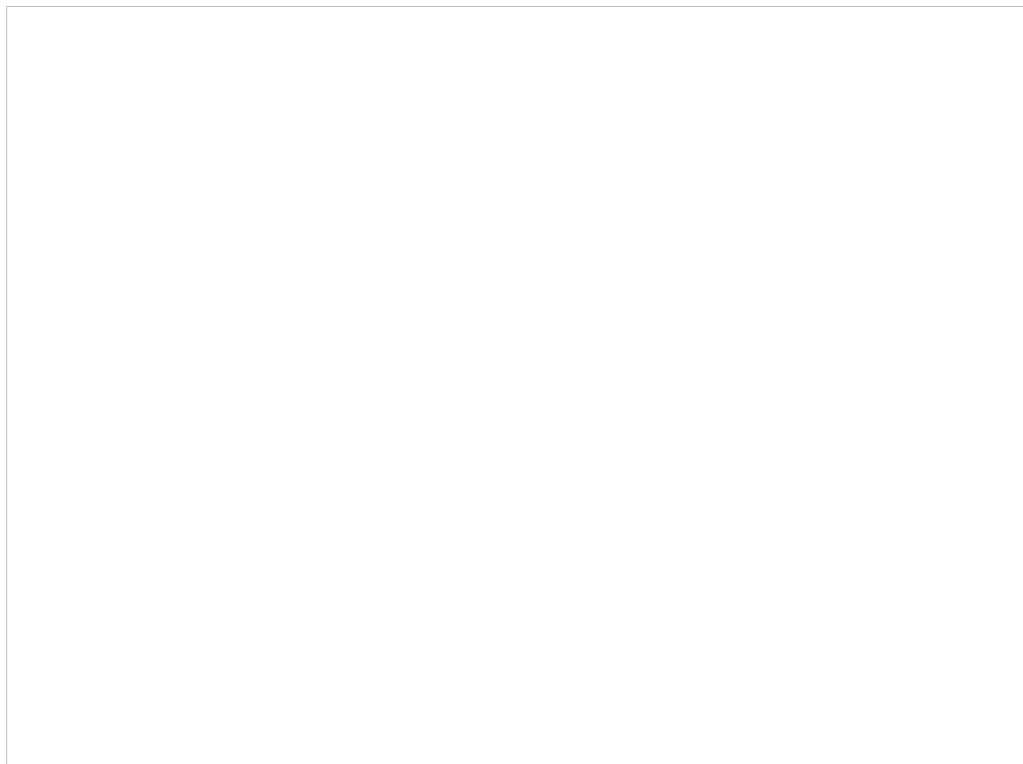
今日もせっせと 惰性的ログイン

あと どれだけレベルアップすれば

神話になれるの？

君と僕にしか通じない

世紀の大発明に似た



とっておきの呪文で 教えてよ

静的果実、動的世界

文部 蘭

大量の嘘 破裂しそうで

ああ やなこった つってたら事故った

ありふれたこの<sup>ほし</sup>地球で

というかそもそも 唐変木な僕は

丸まったモルモット

否 待った 或いはコメット

そうらまた 昨日を消せる

消えそうな夕暮れに また僕は

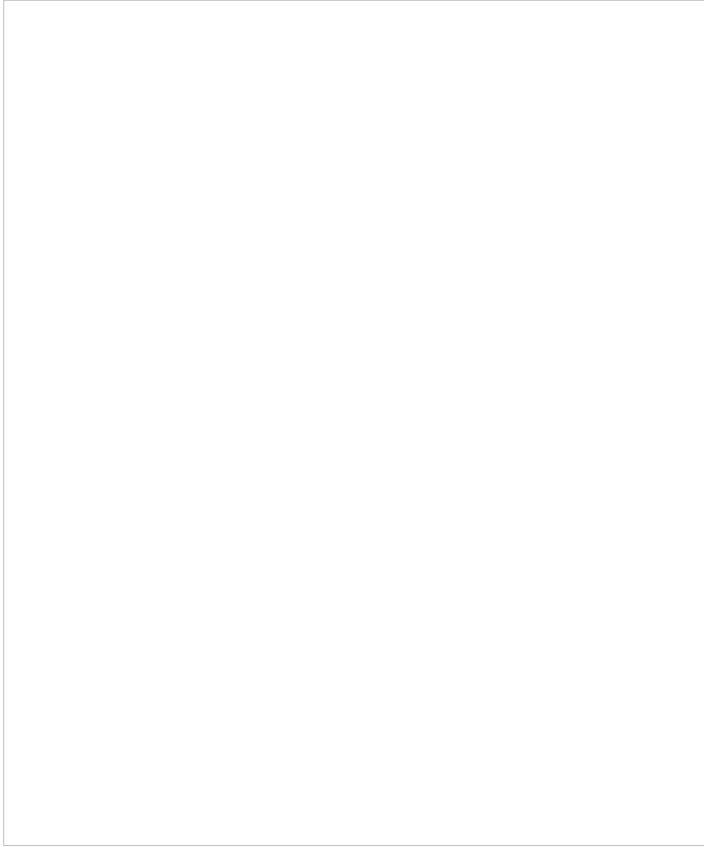
紛れて 世界を蹴った

真っ白な頭を 真っ黒に染め上げるような

そんなカテゴリー

ふと途切れてしまった 日常を

やらかいホッチキスで留めて



真四角なコトバ 真ん丸に丸めて

もう 見えやしないよ

太陽系第三惑星

文部 蘭

じゅわあ、と音を立て沸騰するその景色がまた空気を揺らしていた。揚げられた串カツを軸に、世界がぐるぐる回っているようだ。豚肉は衣を着せられ、玉ねぎには軽い焦げ目が付いている。わずかに蒸気を帯び、「わたくし」を主張しているようにも思える。こんな風にいとも簡単に自己主張できるのならどれだけ人生は楽になるのだろう、と僕は考えていた。

店内は午後十時を回ったというのに、賑わっている。至る所で湯気が上がり、熱気の充満した空間にはどこか安心感が漂っていた。僕がこの場でバイトを始めたのは三か月前。大学ももうすぐ卒業というタイミングで、ほんの資金稼ぎのつもりで始めたのだ。

「はい、お待ちどうぞさん！」

僕は今しがた揚げ終えた串カツを皿の上に乗せ、カウンター席に腰掛ける女性に差し出した。

女性は串カツから滲みだす油分が衣服に垂れないようにと、慎重に口へと運ぶ。何回か噛んでから、口元を手で押さえる。その手首に、群青と白が交互になった空色のミサンガがきつく巻き付いている。「やっぱり美味しい」と付け加えた。

やっぱり美味しい、の「やっぱり」の部分に彼女らしさが含まれていると僕は思った。彼女はいつだって、相手の気心を巧みに操ろうとする獣のような習性を持っているからだ。

彼女は僕の幼馴染、<sup>なぎさ</sup>渚だ。小学校へ入学した時からの付き合いで、もう十五年もの間関わっていることになる。一度も寝癖を付けたことのないような真っ黒な髪を肩のあたりまで垂らし、瞳はコンタクトを入れているせいで大きめだが、笑った時にだけ目尻が下がる。頬は大抵の場合紅潮していて、健康的な丸みを帯びているのだった。

その渚が串カツを宙で泳がせながら、僕に話しかける。

「ねえ、いつもおんなじ作業をして飽きないの？」



僕は次の串カツを揚げながら、口を動かす。「飽きないよ。どうして？」

「だって、バイトしてる時の拓斗の顔。なんか楽しくなさそうだし」

そう言われた瞬間、僕ははっとした。危うく、揚げかけの串カツを床へ落としてしまいそうになる。喩えるなら、体内に別人の血液をごっそりと注ぎ込まれたような感覚がしたのだ。かかところが少しだけ浮き、喉が微かに鳴る。

いつだって、そうだった。僕の本心を最終的に暴いてくれる役目を担うのが、渚。君だった。すべてお見通しなのかもしれないと思うと、少しだけ恥ずかしくもなる。ところが、その羞恥心はなにも遠ざけるようなものではなかった。むしろ、渚だけに僕の本心が伝わっていればそれでいいとさえ考えることだってある。

僕の笑顔が二種類あることを渚は知っている。ひとつは社交辞令的な表面上の笑顔、もうひとつは大切な存在にしか決して見せない純度百パーセントの笑顔。渚にはもう幾万回と笑顔を見せてきた僕だから、そんなことはお互いにとってはすでに常識だった。

「そんなことないって。やってみると意外に楽しいもんだよ」

僕はちょっとだけ渚に反論してみた。けれど、渚は納得のいかない様子で、ため息をつく。

「ほら、意外に、って言っちゃってるじゃん。その時点で黒だから」

意地悪な微笑みを向けて、渚は串カツを頬張った。肉汁が数滴、真っ白な皿の上に切なく垂れる。周囲は蒸気で熱せられ、湿度が高い。

「……急に呼び出して悪かったな。すまん。ただ、どうしても渚に食べてもらいたかったんだ」

僕は素直に謝った。背後をバイトの後輩が慌てて通過していく。

「ううん。全然気にしなくていいよ。私、どうせ今日暇だったから」

嘘つけと心の中で呟きながらも、僕は渚に感謝していた。呼んだらすぐに駆け付けて、付き合ってくれる。こんな我儘が通用するのは渚だけだ。

「駄目だな、俺も。いつまでも幼馴染に頼りっぱなしでさ」

「そうだよ。拓斗だって、はやく恋人作った方がいいよ。年齢イコール彼女いない歴って、本気でヤバイよ」

渚には付き合っ二年になる彼氏がいる。インディーズ・バンドのベース担当らしいが、僕は彼についてはよく知らない。当の僕は渚が指摘した通り、年齢イコール彼女いない歴の余りもの男子だ。

でも、それにはちゃんとした理由があるのだから、僕にはどうすることもできない。

——僕は渚のことが好きだ。

もう十五年も勝手に想い続けている。けれど、渚にはいまだにその胸の内を明かそうとしたことがない。突け放されるのが怖いのだ。その一言を放ってしまえば幼馴染という領域からことごと悉く追放されるのではないか、と一歩も踏み出せないまま時だけが過ぎて行ったのだ。

渚は僕の本心をなんでもかんでも見破るのが得意だ。そんな名探偵の彼女でも、僕の好意にはどうやら気付いていないらしい。

「彼女は今はいないなあ。社会人になってからでも遅くはないと思うし」

僕は渚の手前で見栄を張った。そう？ と少しだけ心配そうな上目遣いで見上げてくる渚に対して罪悪感を覚える。きっと、このいたたまれなさは串カツの油分みたいにいずれは重力に負けて落下してしまうのだろうけど。その場から逃げ出したくなるのを必死で堪え、僕は再び串カツを揚げ始める。

周囲は蒸気によって温められ、下手をすればむせるほどになっている。ちょうどその時、ラストオーダーを知らせる声が店内に響いた。

\*

バイトを終え、僕は渚と共に家路についていた。

「あー。串カツ美味しかったなー。また来てもいい？」

「うん。何回でも来てほしいしさ」

そんな他愛のない会話を続けながら、足をゆっくりと前進させる。ビルが立ち並ぶ夜景は一向に就寝する気配を見せず、いまだにぎらぎらと照り続けているのだった。もうすぐ日付を超えるというのに、呑気な街だと思ってしまう。

加えて冷気が頬を痛めつけていた。僕らが過ごす雪国・新潟では秋という季節が異様に短い。一か月もあればご立派なもので、大抵の場合は秋の後半からすでに秋は失われていくことが常だった。それは名もなき季節であるし、新潟特有の複雑な季節の交差に等しい。

新潟駅まで歩いてきた僕たちは、ためらうことなくそのまま駅の改札へと向かう。電子マネーをかざし、新しい空間へ二人で侵入する。

すぐに電車がホームに入ってきた。黄と橙の直線を付けられたその車体は心なしか、少しくたびれているようにも見えた。

僕たちは座席の中央に腰を下ろした。乗客はまばらで、浮かない顔をしたサラリーマンと、スマホをいじり会話をする男子学生の二人組がいるだけの、静かな車両だった。

「なんかすごく眠たいんだけど」

車内の空気を暖めるように、渚は僕にそう呟いた。彼女の瞼は今にも剥がれ落ちそうで、僕はほんの少しだけ恐かった。気をそらすように、必要のない咳ばらいを試みせる。

列車の扉が軽快に閉じられ、越後線が走り出した。

先ほどまでの寒さが嘘だったように、車内に暖気が充満していく。その静かなる支配に身を委ね、僕は右肩に渚の体温を感じた。

渚は僕の右肩に寄りかかり、すうすうと赤子のような寝息を立てて眠りにについている。

僕は自身の右肩に心の中で礼を述べた。右肩にしてはよくやってくれた、間違いなく今月のMVPだ、という趣旨の謝意である。今、僕は右肩のおかげで渚の温もりを感じることができているのだ。当の渚はなんとも思っていないだろうけど。僕にとっては一大事も一大事だった。

渚の寝顔を見つめる。緊張の糸が一本も絡まっていない、無垢な表情をしていた。昔から変わらない寝顔だった。寝顔にこそ、その人の本性が現れるのではないかとふとそんなことを考える。もしそうだとしたら、渚は良い意味でも悪い意味でも純粋なまま歳を重ねたのかもしれない。

向かいの座席でスマホをいじっていた男子学生のひとりが、僕の方を一瞬見やった。彼は僕と目が合ってしまったと勘違いをして、すぐに視線をスマホに戻した。程なくして、相方の学生に「俺も彼女欲しいなあ」と吐き捨てるように言ったのだ。

俺も、という部分に僕はひどく傷つけられた。

傍から見れば、僕の右肩に渚が全体重を預けて寄り添っているこの光景はカップルのそれに似ているかもしれない。けれど、実際はそうじゃないのだから、事態は深刻だった。僕は彼の放った一言を渚が耳にすることがなくてよかった、とひそかに安心していた。

同時に、傷ついてもいた。勝手に、ひとりで寂しさがこみ上げてきそうになっていた。その寂しさは形を伴って、胃の奥から逆流し始め、喉を通り抜け、口元まで出かかっている。胃酸を存分に纏ったそいつは、僕の歯の裏側で一時停止した。そのまま呑み込んでしまおうと僕は努力したが、結局その寂しさは咳となって体外に放出されてしまった。

急に恐ろしくもなった。対面に座る学生の、彼の何の気ない一言が僕の内面をめぐり散らかしていく。ひょっとすると、渚にはもう一生手が届かない、と一刀両断されたような感覚がしたのかもしれない。

確かに渚は僕の右肩で眠っている。僕をひどく動揺させていることすら自覚していないほどに、深い眠りについている。そのはずなのに、世界で一番遠い場所に僕と渚は分かたれているような気がしてならなかった。

僕は渚の肩に手をまわそうとして、途中でやめた。ちゃんと物理的に感じ取れる距離で、渚が近くに、隣にいることを確かめたいとする欲求に襲われる。だが、幼馴染という枠からはみ出す勇気も持ち合わせていない僕は、その欲求にさえ敗北した。しっかりと打ちのめされたのだ。ジャブなんて最初からない、一発KOだった。僕は僕と格闘し、額の裏側が妙に熱を帯び始める。暖房が少し効き過ぎているせいかもしれない。あるいは、現実を急に喉元に突き付けられて、前頭葉がオーバーヒートしているのだ。

「次は青山、青山。お出口は左側です」

疲労をにじませた車掌のアナウンスが響き渡る。その声にすら妙に現実感を覚えた僕は、全身のあちらこちらがかゆくなりはじめた。そのかゆみが全身を駆け巡っていくうちに、右肩が震えた。

渚は目を覚まし、両の瞳を手の甲で拭いながら「もう着いたの、はやっ」と力ない声を振り絞った。

この狭い車両の中で僕に起こった悲劇。渚のいる地点から銀河の彼方まで勢いよく飛ばされた僕は、信じられないほど疲れ切っていた。そんな僕の様子には微塵も触れず、渚は出口傍の手すりにもたれかかり、青山駅に到着するのを待ちわびているだけだった。その彼女の横顔の中に、僕はまた現実の影を見るのだった。そして、小枝のように細い手首に括られた空色のミサンガは、心なしか少し緩んでいるように見える。

\*

青山駅に到着し、僕たちは改札を静かに潜った。

駅を出ると、冷たい空気が迎えてくれた。もうすぐそこまで冬が迫ってきていることを告げるような、やらせに似た空気に思えた。

「ううっ、寒い」

渚はマフラーを抱くように腕で押さえ、両肩を震わせた。束の間の仮眠から目覚めたばかりの、その気怠そうな瞳が夜の闇を吸い込んでいるようでもある。

僕は渚を送ることにした。渚は実家に住んでいて、青山駅のすぐ近くにある。僕はその駅からの距離の近さを呪った。どうしてこうも歯車がかみ合わないことがこの世の中には多いのだろう、と復讐心のような大変面倒な気概が胸の奥の方であぐら胡坐を掻いているのだ。

「渚ってさ、今の彼氏とはどんな感じ？」

心にもないことを訊ねてしまった。渚の表情が一瞬だけ強張る。だが、すぐにいつもの柔和なものに変わり、家族然とした声で答える。

「……まだよく分かんないや」

その返答は僕を緊張させた。渚の彼氏がどういう評価を受けているのか、渚にとってどれくらい大事な存在なのか、そうしたことを包みたくてもうまくいかない歯がゆさがあったからだ。これでは何の収穫もないし、第一渚の私情にはもう一切入り込む隙がないのではないか、と半ば焦燥にも似た不安に襲われる。

しばらく会話が続き、沈黙したまま僕らはただ歩いた。渚はというと、今にもアスファルトの上で寝そべってしまいそうな、壮大な眠気を纏ったまま歩いている。そんな彼女の秘めた幼さを真横で確認しながら、僕は時計の秒針を数える時にするように、足音で正確にリズムを刻みながら歩いていた。

「ここまででいいよ。あとは一人でも大丈夫」

公園を過ぎて、住宅街に入ったところで渚が告げる。ほんの数メートル先に渚の実家が見えた。

「そっか。じゃあ、またな。暗いから気を付けろよ」

僕がそう言うと、渚は少しだけ照れたような顔をしてみせた。あるいは、その<sup>ずる</sup>狡い表情は、彼女が眠気という魔力を帯びたことで発生させたひとつの事象かもしれない。

「渚、あのな……」

「ん？」

あと一言の熱が足りなかった。僕はまたも好機を逃す。これが十五年も続いている。

「いや、なんでもない」

僕たちは互いに手を振って別れた。

渚の手首に必死にしがみついた空色のミサンガが、激しく揺れていた。

青山駅に引き返す途中、僕は考えていた。手を振って別れたあの時こそ、絶好のチャンスだったはずだ。そして、その事実は自分でも理解していた。それでも、決定的な何かが足りなかったのだ。その「何か」が一体どんな格好をして僕の邪魔をしているのか、深夜に軽い偏頭痛を患う僕の頭では解答を導き出すことができなかった。

頭の裏側が引っ張られるようにずきずきとしていた。神経が疲弊していた。およそこの世のものとは思えない痛みに笑われている。その重たい頭蓋を引きずるようにして、僕は駅を目指した。

後悔、とはなんて恐ろしい人間の習性だろうとふと考えた。自分自身が最適だとして起こした言動を、すぐに未来の自分が打ち消す。なんとも卑劣で、醜い悪習だろう、と。数分後の確定的悲劇、と言った方が分かりやすいかもしれない。そう、僕は数分後の未来においてほぼ確定的に自爆するだろうと予測して、渚への告白を洩ったのだった。確かに、卑劣で醜い。

酔っ払いが一喝しながら、傍をすれ違っていく。ああ、彼はどこまでも自由人で、後悔などとは無縁の人種なんだろうと勝手に納得をする。

やがて青山駅に到着した。

白いコンクリートで塗り固められた、駅の建物へ足を踏み入れようとしたその時、入口の天井付近に大きな蜘蛛の巣があることに気づく。しかし、不思議にもその中心には家主であるはずの

蜘蛛の姿はない。居場所を失うまいとして、役目を終えたその蜘蛛の巣がただ風に揺れているだけだ。奇妙だった。同時に、僕への啓示か何かに違いないとする確信があった。肝心な要素がごっそり抜け落ちているぞ、といったような。いずれにしろ、今の僕には渚を奪うほどの余力すらないのだと悟らせるには十分な出来事だった。

それも僕の蜘蛛の巣には糸さえないのだ。それだから、いつまでたっても渚をひっかけることができない。ただ時の経過とともに劣化していくばかりで、何の進展もないままだ。まるで受刑者の心持ちのようだ。僕はこの現実の重さに砕かれそうになる。背中に罎ひびが入り、腰骨があっけなく折れて、終いには地面にめり込んでいく。そんな想像が頭をよぎり、慌ててかき消した。

時刻表を見ると、終電が迫っていた。少々の焦りを電子マネーに注入しつつ、改札を足早に通過する。駅のホームに佇む名前も知らぬ冷気が、顔を冷やす。

ホームの真ん中にそびえ立つコンクリートの柱が、電灯によって照らされているのを見つめる。僕はそれを見て、レーザーパルスを思い浮かべた。駅の真ん中に突如として出現したそのレーザーパルスは、ただ義務的に真っ赤な光を上下に動かしながら時を刻むのだ。一定間隔の心地よさを僕らに与えては、素知らぬ顔でその行為を繰り返すのだ。そうした想像を網膜上に保存しながら、ホームに滑り込んできた列車に僕は飛び乗った。

\*

ここで一旦、昔の話をしよう。

小学二年生の時のエピソードだ。

その日の帰りはとてもよく晴れていて、オレンジ色の大空がみんなのため息なんかを吸収していくような天気だったのを憶えている。

通学路の途中、公園でひとりベンチに腰掛ける渚を見つけた。彼女は何か手作業に夢中になっていて、僕に気づいていないようだった。

「おっすー、なぎさ」

用のない通行人を振り向かせるくらい大きな声で、僕は渚の名を呼んだ。

すると渚ははにかんで、こっちに来てと手招きをしてみせた。

僕がベンチの傍まで駆け寄ると、渚が「両手を出して」と言ってきたので、僕は恐る恐る空気をすくうみたいに両手を差し出した。

「目、つむって」渚は悪戯っぽく要求した。

僕が両の瞳を閉じると、手のひらに嘗められたような、気持ちの悪い感触がした。

開けていいよ、という渚の合図と同時に手のひらを確認すると、そこには群青と白の二色が交互に波打つミサンガがあった。

「なに、これ」

戸惑う僕に、渚は「ミサンガ」とだけ短く世俗的な答えをくれた。

「二つ作ったから、一つはたくとにあげる。ぜったいになくしちゃだめだよ。ずっとともだちのしるしだからね」

「……うん」

頷きながらも、その時僕は生まれて初めて世界が残酷だと知った。

ずっと友達。

それは好きになってはいけないよ、と釘を刺されたも同然だった。僕はもうこれ以上、渚の奥深くまで侵入することは許されない。手のひらにあるミサンガの、その輪っかに頭を通すことができないように。

手渡されたそのミサンガが、渚による贖罪の品のように思えて仕方がなかった。当時の僕はただ「プレゼント」といった程度の認識でしかなかったのだが、今思えばあのミサンガは間違いなく渚が作り上げた贖罪の品だったのだ。境界線を引く代わりにこれをあげるから許して、といったような。

帰宅してから、僕は泣いた。

ランドセルから取り出した漢字ドリルが濡れ、丸いし<sup>じ</sup>みができた。慌てて連絡帳を覆い被せると、それも濡れた。

「夕飯できたわよー」



一階の台所から忙しそうな母の声がした。台所へ到着した父と姉が椅子を引く音が聞こえる。やや遅れて、嗅ぎ慣れた食卓の匂いが鼻に届いた。僕は急いで涙を手の甲で拭い、私物をランドセルの中に戻す。

自分の部屋を出るその直前、僕は渚からもらったばかりの空色のミサンガを、ゴミ箱に放り込んだ。

このエピソードを大人になった今でもたまに思い出す。

その度に、胸がきつく締め付けられ、呼吸が乱れてしまう。

再び時間軸を現在へ戻そう。

\*

ある時、僕は渚に呼び出され、古びた居酒屋を訪れた。

木製の壁のところどころに悪魔が入り込めそうな隙間のある、歴史ある造りだった。すっかり日も落ちて真っ暗な夜。今にも雪が降りそうなほど空気は凍り付いていて、それに呼応するかのように行き交う人々の表情も冷めきっている。

僕はその居酒屋の入口までやってきて躊躇う。渚が僕を呼び出した理由をふと思い出す。それは彼氏に一度会ってほしい、という極めて利己的なものだった。僕は吐き気がした。それでもどういふ訳か断ることはしなかった。その瞬間ほど、僕が反動によって生きている人間である事実を思い知らされたことはない。

入口のすぐ傍の側溝に、白濁した液体が蒸発した跡がくっきりと残っている。きっと、客のとしゃぶつ吐瀉物を店員が流し込んだのだろう、と想像する。僕はその白みがかった周辺を大げさに避けるようにして、入口へと大回りをした。

靴を入れる下駄箱が並んでいる。適当に空いている正方形にくたび草臥れた両の靴を収納し、のれんを潜ろうとした。

その瞬間だった。

「そうそう、だから拓斗ってさ、いっつもうじうじしててキモくって。一緒にいるのが耐えられないんだよね、マジな話！」

「なんでそんな奴と関わってんだよ。そんなどうしようもねえ奴、ほっとけよいい加減」

「まあ、やろうと思えば一瞬で絶交できるけど……ってというか、あんなのとととと死んでくれた方が嬉しいんだよね」

僕は耳を疑った。下駄箱まで届いたその甘く、軽く、高い声が渚のものだと理解したからだ。おそらく、渚は彼氏とすでに入口にほど近い座席を陣取っていて、僕に対する悪評を着にして酒を口に含んでいるのだ。

あんなの。死んでくれた方が嬉しい。

渚から発せられた嘘偽りないその言葉たちが僕を支配する。その支配はとてつもなく僕をがんじがらめにした。それゆえに、下駄箱の傍から一步も足を踏み出すことが出来ない。僕はまた一つ、別の世界を潜ったんだ。咄嗟にそんな気がした。先程側溝で見た吐瀉物の跡が記憶として甦ってきて、吐き気が増してきた。

冷たい下駄箱を背にして、僕はその場に座り込んだ。

渚の一言は、確実に僕の内側を破壊した。木っ端微塵、と言い表した方が適切に思えるほどに。後に、恐怖が襲ってきて、それはすぐに憎悪の波に掻き消された。僕はこのままこののれんを潜るべきだろうか、と考える。安物の乾いた笑顔を貼り付けて、二人の前に姿を現すことが果たして正しいのかどうか、気が狂った僕には判別がつかなかった。

奥から再び、渚とその彼氏の楽し気な会話が聞こえてくる。実に陽気で、呑気な声の応酬だ。

それでも、その渚の声の高さとは裏腹に、本当は僕のことを殺したいって思っているんだろう？ その疑いが纏わりついて、僕は金縛りにかかった時のように筋一本さえ動かなくなる。急に、しゃれこうべ 髑髏 ひとつになってしまったかのような感覚がして仕方がなかった。

「そんなに嫌いなやつなんだったら、いっそのこと俺が殺してやろうか？」

「それだと、あんたが殺人犯になっちゃうじゃん。そんなことしなくても、いずれどっかで消えるでしょ。拓斗って、そういう類の人種だし」

耳を塞ぎたかった。けれど、その悪意に満ちた会話がしっかりと内耳の蝸牛<sup>かぎゅう</sup>まで届いてくる。眩暈がし、同時多発的な偏頭痛がする。

渚とこれからどう向き合えばいいのだろうか。僕には全く分からなかった。ただ、のれんの奥から到着する、彼女の甘く汚らしい声に精一杯の落書きをしてやりたい一心でいっぱいだった。むしろ、そうしなければならないというような、途轍もない義務感に覆われる。

君子危うきに近寄らず、という文言が頭に浮かぶ。僕はただその場から逃げ出したかったのだ。下駄箱から靴を取り出し、普段よりもきつめに紐を結び直す。その作業を行う手が小刻みに震えているのを確認したら、なぜだか冷静になることができた。

「寒っ」

口にする必要のない言葉を吐いてから、僕は居酒屋の外へ出た。僕はもう、僕自身の体温すら正確に測り取れないくらいに潰されていたのだ。それはちょうど、分度器が忙しくあらゆる角度を誤測するような、気の狂った状態に似ている。

夜空を見上げてみる。疎<sup>まば</sup>らに散った星々に紛れて、欠けた月が浮いていた。

僕はその眩しい月に馬鹿にされたような気がして、畜生と呟いてしまった。前を通りかかった女性が怖がるように、走り去っていく。

こういう時、健常者ならば涙を流すのだろうか。僕の頬は残念ながら乾いている。もう、僕は削りに削られて、実体の無い存在になり下がったのではないか。そんな畏怖を混ぜ合わせた吐息が白く濁り、僕は思わず鼻を<sup>すす</sup>吸る。

こんな世界に仕組んだ首謀者が一体どこのどいつなのか、考えても答えを出せない。いつからか僕は裏返しになってしまったし、それは周囲の人間も同じ様だった。じゃあ、どんな理由があってこうなったのか？ 僕は素知らぬ顔で照り続ける月を憎んだ。

\*

それから数日が経ったある晴れた日、僕は公園に渚がひとりで見かけた。鬱陶しいほど日光が熱を帯びた、平凡な午後だった。

渚は時折瞬きをしながら、丸裸になった大木を見つめていた。やがて、僕の存在に気づき、「あっ、拓斗じゃん」と努めて明るい声を出した。

その時僕は、不必要な懐かしさを抱いてしまった。新品の靴を手にした時、ああこの匂いだ、と納得する動作に近い。

「こんなところで何してんの？」

第一声を間違えた。

「何って、ただ感傷に浸ってただけ」

それは、僕の台詞だろ。

「ふうん、渚にしては……珍しいね」

本当はそんなことが言いたいんじゃない。

先日の件を渚に話すべきかどうか、迷いが生じる。話せば、終わる。あらゆるしがらみも、時の残酷さも、そのすべてを終わらせられる。けれど、僕の喉は塞がったままだ。降り注ぐ日光は、相変わらず鬱陶しい。

僕の中では、渚との関係が分からなくなっていた。僕は本当にこの人のことが好きだったのか、それさえも疑わしくなった。十五年もの間<sup>はぐく</sup>育んできた願望は、一瞬にして絶対零度にまで冷え込んでしまった。今となってはもう、何もかもが遅い。

「どうしたの？ さっきから難しい顔して」

渚の表情、その筋肉の動きが、僕を不安にさせる。どうして君は……。

消されたい。粉々にされたい。

そんな被虐嗜好が頭を掠める。僕はどうやら、もうそこまで来てしまったらしい。

突如として僕に降りかかった災いは、<sup>あざみ</sup>薊の葉の、その先端にできた棘のようにちくちくとしていた。加えて、無抵抗な僕を痛めつけるのだから、余計に質が悪い。

たとえそうであっても、僕は渚に伝えなければならない。そうでもしないと、この十五年間がはじめから存在しなかったことになってしまうから。

「なあ、渚。話しておきたいことがあるんだけど……」

僕が話し終わると、渚は伏し目がちになって、黙ってしまった。

やっと思い出した。僕は、渚のことが本当に好きだったんだ。

俯いた渚の手首には、もう空色のミサンガの姿は無かった。

終

あとがき（文芸部員へ託すメッセージ）

この現実世界は、実に三角形的だと僕は思う。第一点と第二点がある関係性を築き上げたとなると、そこから第三点が弾かれる。その繰り返し、である。そうした現象はどこか事務的作業にも思えるし、時には面倒くさそうに引き起こされる数学的事象のようにも思える。とにかく、僕はこの実に三角形的な舞台の端っこで奇妙に踊り狂う人形のように無个性的に、あるいは、無造形的に要求される振る舞いを全うしてしまう癖を持ち合わせている。それは傍目から見れば滑稽に映るだろう。そして、そう見えてしまうのは事実であり、認めざるを得ないのだ。あなたの主張することは間違っていると抗う理由も僕には無いし、第一そこまで押し付けがましく語るようなことでもないからだ。

世間体？ そんなもの知ったこっちゃない。

誰かが作り上げた価値基準だとか、一般的な評価だとか、そんなもの見つけたら海にでも棄ててやりたい。でも、僕は別に世の中を斜視している訳では決してないので、そこは誤解しないでいただきたい。法律はちゃんと守るし、最低限の倫理観だって守っている。人の道を外れる、だとかそんな話をしたいわけじゃない。ただ、僕が言いたいのは、「こうでありたい」と希望することそれ自体があまりにも拒否される世の中に対して、またその文化的行為に対して警鐘を鳴らしているだけだ。「こうであるべき」だとか「これ以外は無し」だとか、望んでもいないのに哲学を強制されることがまだまだ多すぎるのだ。それはウェイターが客に逆注文をつけるみたいに、非論理的で、不条理なことだと思う。そうやってぎゅうぎゅうと押し込められた「像」の枠内であなたたちは生きていけるのだろうか？ 答えはNO。

そうであるべき姿などは初めから存在しないことは誰もがご承知のことだろう。だが、それを実際に行動に移すことが出来るのはほんの一握りの人間で、それが本当に悲しい。この世界には正統派も正攻法も正義も正解も実は存在しない、とつくづく思う。それ故に、異端も邪道も闇も不正解も存在しない代物なのだ。それらがあると思いついていては過ぎない。

それこそ条件反射的に人ってのは躁鬱を繰り返す生き物だと僕は認識している。世の中の理不尽さに疲れ果てたときは無理にでも笑おうとするし、束の間の喜びに浸った後は次の心配事を引っ張ってくる。そういう風に出来ているからこそ、ややこしいことが起こりうる。実際、僕もそ

れで嫌というほど苦勞してきた。それこそ比喩でなく胃の臓物が引きちぎれてしまうぐらいに。

それって、悪いことなのか？

防衛。そう、それは自己防衛術にほかならない。自分の中にピリピリとした空気を漂わせる防衛大臣がいて、そいつが脱現実的な指示を脳へ向けて送り込んでいるのだ。そうだと。

そして、そうであってほしい。その防衛本能とは諸刃の剣で、扱いには細心の注意を払わなくてはならない。というのも、その本能とは、本質的にホルミシス効果を帯びているからだ。つまり、少量であれば自分にとって有益となる反面、過剰であれば有害なものに変わる。ここでいう「有益」とは気分的に精神崩壊しないくらいにまで自己意識を留めておくことであるし、「有害」とはそれこそ独りよがりになり排斥的思考・行動に至ってしまうことにほかならない。そう、それほどデリケートなのが防衛本能というものだろう。自分にとってマイナスな感情を引き起こしかねない外的事象が起こるたびに、僕らはカテーテルを脳内に挿入し、防衛本能を必死に呼び覚ます。もちろんその外的事象の範囲は個人によりけりではあるけれど。

そうした動作が具体的な形を持ってしまったとき、それは頭痛という象徴的現象として立ち現れるのだ。それは頭皮を前から、横から、後ろから思い切り誰かが引きはがそうとするみたいな痛みだ。僕の場合は多少なりともストレスを感じるとすぐにこうした縛欲の強い魔物が立ち現れては消える。だが、その痛みを理由に現実から目をそらしてはいけないことも本能的に知っている。だからこそ、厄介なのだ。例えば、今尋常ではないほどの空腹を抱えているあなたの目の前に、極上のステーキが置かれ、その肉厚さや立ち上る蒸気に目を奪われ、思わず生唾を呑み込んでしまうほどに食欲をそそられているとする。一見、素敵な待ち時間のように大方の人の目には映ることだろう。ところが、だ。あなたは肉類を一ミリでも摂取すると死亡が確定してしまう体質だったとしたら？ あなたはきっと溢れ出る食欲を満たしたいと思うけれども、最終的には目の前のお皿から目を背けてしまうだろう。これとまったく真逆のことを僕は日常的に繰り返している。いや、むしろそうしなければならぬ習慣を身につけてしまったのだ。

別に悲劇的な話がしたいわけじゃない。実際、こうした生き方をしているひとは日本では案外多いと思うから。しかし、その状態が長引けば長引くほど、人間性は衰弱していき、やがて崩壊することは明らかだ。いずれは、そうした生き方を否定するような存在に出会い、価値観まるごと変えてしまうのがよさそうだ。もしくは、そうした存在を自ら探し続ける放浪の旅に出発するか、いずれかが解決策たりえると僕は考える。

幼馴染が添い寝するワケ

今畑鏡

――ねえ。眠れないの。そっち行ってもいい？――

「は？」

寝る前にスマホを見ていたら、柚華からそんなメッセージが送られてきた。思わず声が出る。見間違いかと目を擦って画面を凝視し、本当のことで首を傾げた。スマホの時計は午前二時を指している。どうしたことだろう。新手のいたずらか？

かなり久々に来た幼馴染からのメッセージ。そいつは突拍子もなく、俺の眠気を吹き飛ばすには十分すぎた。

俺が幼馴染とはいえ、深夜に、それも高二的思春期真っ盛りの男の部屋に女子が来るのはどうかしているだろう。

――じゃあ行くから、よろしく！――

既読をつけたからか、柚華から続けざまにそんなメッセージが送られてきた。おまけにダッシュするクマのスタンプが添えられている。どうやら本気らしい。

え？ ちょっと待てよ！

俺は慌てて立ち上がり、部屋の電気を付けて周りを見渡した。水着のアイドルが表紙を飾る週刊誌がまず目に入る。

やべえ。やべえ。週刊誌を手にとるとクローゼットの中へ放り込む。それから壁にあるアイドルのポスターを剥がした。柚華に、いや女子に見られたらマズイものは片っ端から見つけ、手当たり次第クローゼットに投下した。

そうこうしていると、コツコツとガラスを叩く音がした。俺は生唾を飲んでカーテンを開けると窓の向こうに柚華が立っていた。「あけて」と口パクをしている。

俺が掃き出し窓の鍵を開けると、柚華はカラリと窓を開けて俺の部屋に入ってきた。冷えた夜風が足の甲に当たった。



「あー寒かった。そろそろ六月だけど、まだ夜は寒いね。いやあ、りょー君の部屋が一階で助かったよ」

柚華が両手で肩をさすっている。

「ちょっ！ お前、なんで来てんだよ。今よー」

「シーッ。夜中なんだから静かに」

「あ……おう」

柚華は人差し指を口元に当てた。確かに、大声で寝ている親が起きたら大変だ。もしも、こんな深夜に幼馴染とはいえ女の子を連れ込んでいるのが見つければタダじゃ済まされない。

「なんで、来たんだよ？」

「さっきメッセージ送ったじゃん。寝れないって」

「いやいや寝れないからってさ……」

俺は呆れた。柚華はどこかおとなしく見えた。

俺が知っている柚華と雰囲気が違う。服のせいかな？

柚華は淡い青色のパジャマの上に ベージュのカーディガンを羽織っていた。普段なら絶対にお目にかかれない。俺には姉がいるから女性モノのパジャマは見慣れている。が、着ているのは姉ではなく柚華だ。思わず凝視してしまう。

柚華は「りょー君の部屋とか中学以来だねえ」と興味津々に部屋を探索しはじめた。柚華が歩くたびに素足がフローリングに張り付くペタペタした音がしてやけに生々しい。

「あれ、エロ本とか無いんだね」

「ねーよ。仮にあったとしても柚華に見せねーよ」

「ふうん。まあいいや。……うん、クローゼットの中はチェックしないであげるよ」

「そうしてくれ」

それから柚華は物色に飽きたようで、ベッドの端にちょこんと座った。

「りょ一君の部屋に来るのも久しぶりだけど、話すのも久しぶりかも。高校も同じで家も隣なのにね」

「俺らも高校生になったんだし、昔とは違うだろ」

「そう？ りょ一君は昔と変わらないみたいだけど」

柚華が俺の顔を見て笑う。

俺は昔と何も変わっていないのかも知れない。だけど、俺から見れば柚華はだいぶ変わった。

俺よりも男なんじゃないかってくらいやんちゃだった柚華は高校生になって随分と大人しくなった。お尻も胸もかなり大きくなって体つきは全体的に柔らかな大人の女性っぽい。

……それに彼氏も居るし。俺なんて彼女ができる気配すらないというのに。

「なに変な目で見てんの？ 変態」

「見てねーよ」

柚華と俺はポツポツと他愛もない雑談をした。同じ高校に通っているが、俺は理系で柚華は文系だからクラスが異なるのだ。クラスが違えば人間関係も変わる。話のネタは尽きなかった。

柚華の彼氏の話にはお互い触れなかった。幼馴染ののろけ話なんぞ聞きたくもなかったし、柚華も話そうとはしなかった。

気づいたころには柚華が部屋に来てから三十分経っていた。

「もう夜遅いんだからさ、帰ったら？ 明日も学校あるんだし」

「えー、まだ話し足りないよ」

柚華はまだ居座るつもりらしい。俺だってまだまだ話し足りない。けど流石に深夜だ。ベッドに寝転んで睡眠の体勢に入る。

「眠いんだよ。もう寝るから。帰ってくれ」

言ってもダメなら態度で示す。

ベッドが軋みその反動で体が揺れた。柚華が立ち上がったらしい。よかった。帰ってくれるようだ。

パチリとスイッチを押す音がして、ふっと照明が消えた。

足が床を擦る音がする。またベッドが軋んで揺れた。掛け布団の端が上げられ、その隙間に柚華は身体を潜り込ませてきた。

「じゃあ私も一眠りするから」

「は？」

いい加減にしろ、と振り向こうとしたら、背中に何か硬いものが当たった。何かを突き立てられている……？

「あ、これ以上近づいたらダメだからね」

カチリとノックする音。さらに鋭いものが突き立てられた。尖っているからチクリと痛い。多分この感触は、ペン先だ。

「柚華、なにやってんだよ」

「だって、りょー君も男なわけじゃん。色々と危なそうだし」

「だったら、まっすぐ家に帰れよ。なんで帰らないんだ？」

「いいじゃん。少しだけ。少しだけだから……さ。理由は聞かないでよ……」

柚華は消え入りそうな声色でそう言って、グリグリとペンを押し付けてきた。

「痛え、痛え！ わかったから、ペン先はしまってくれ」

「……ありがと。ホントに一眠りしたら帰るから、お願いね」

柚華はペンをノックしてペン先をしまった。しかし、ペンは俺に突き立てられたままだった。

数分後、後ろからすうすうと寝息が聞こえてきた。どうやら柚華は本当に眠ってしまったらしい。首筋に柚華の吐息が当たってくすぐったい。

いつもなら深夜の我が家は、冷蔵庫のぶうんと鳴る音と親父のいびきで満たされているはずなのに、今晚は柚華の寝息が加わっている。ありえない話だ。柚華が使っているシャンプーの匂いだろうか。柑橘系の匂いが鼻腔をくすぐる。

俺は寝てしまおうと目をつぶった。早く寝てしまわないと俺がどうにかなっちまいそうだ。しかし、そう思うとなかなか寝付けないもの。かえって心臓がドクドクと鼓動を早めている。

疲れていたからか。後ろから聞こえてくる柚華の寝息はどこか子守唄のようで、その寝息に聞き入っているうちにどんどん睡魔が襲ってきた。どうして柚華は俺の家に来たんだろう？

翌朝、母親が俺を呼ぶ声で目を覚ました。後ろを見ると柚華の姿は綺麗サッパリなくなっていた。

掃き出し窓のカーテンが半分開いている。

柚華は一眠りして帰ったらしい。昨晚のことが夢みたいだ。

しかし、柚華はたしかにここで寝ていたのだ。

俺は左右見て誰も居ないことを確かめた。そして、多少の興味本位で柚華が寝ていたであろう場所に顔を埋めてみた。

ほんのり柑橘系の香りがする……………。

「起きてるー？」

「うわっ！ お、起きてるよ！」

キッチンから母親が大声で叫んできた。

驚いて顔を上げる。そして、自分がやっていることが急に恥ずかしくなって、顔がぼうっと熱くなった。

ブンブン頭をふってから時計を見ると、いつもより起きる時間が大分遅いことに気づいた。まずい。急いで制服に着替えた。

朝ごはんを身支度を手早く済ませて家を出た。自転車に跨って高校へ向かう。

いつもより五分遅れで家を出てしまった。このままでは柚華と遭遇してしまう。

風を切って自転車を漕いでいると、家から一番近いコンビニが見えた。店前には柚華が居た。彼女は彼氏を待っているのだ。

柚華は俺に気づいたようで、俺の方を見て小さく手を振った。

でも、僕は全く気づいていないフリをして下を向いて彼女のその前を駆け抜ける。

柚華は彼氏と付き合い始めてから、毎朝ふたり一緒に登校していた。小学生かよ。

あいつらは二人の時間に浸っているせいなのか、進む速度がかなり遅い。しかも幸せそうに笑っている。

そんな二人の姿を前にして登校するのは心苦しい。目の毒である。それにその二人を追い越すのもかなり気まずい。追い越す瞬間、二人が俺を見るその視線がどうしようもなく見下されているようで嫌なんだ。

あいつらのせいで、俺は朝練も無いのに朝早くに登校することになった。

しかし、昨日の柚華はなんだったんだ？ 寝れないとか言っちゃってさ。柚華は彼氏がいて、十分リア充しているだろ？ 悩みでもあんのか。それなら俺じゃなくて彼氏を頼ってくれよ。

なんで俺なんだよ……

考えれば考えるほどモヤモヤして、その分ペダルを踏む足に力が入る。

五分遅れで家を出たはずなのに、いつもより早く学校に到着した。額からボタボタと汗が落ちた。

――今夜もお願いね――

このメッセージは柚華が今夜俺の部屋に来るという合図だ。だいたい週二回送られてくる。時間はマチマチだが、最初みたいに真夜中に突然送られてこないだけが救いだ。

俺はメッセージを確認すると、念のために部屋を片付けて、掃き出し窓の鍵を開ける。

柚華は俺の家族が完全に寝静まる午前二時頃を狙って来る。柚華は俺を起こさないようにそろりと窓を開ける。が、開けた拍子にヒンヤリした夜風が部屋に吹き込んでくるため結局目が覚めてしまう。

柚華はペタペタと足音を立ててベッドに近づき、掛け布団の端から体を滑り込ませた。

布団の中に柚華の柑橘系の匂いが広がる。それに反応して俺の心臓が跳ね上がる。

「ありがとう」と言って俺の背中にボールペンを突き立てる。ペン先は出していない。

数分後、後ろからすうすうと寝息が聞こえてきた。ボールペンは突きつけられたままである。器用なもんだ。寝ているのにボールペンはちゃんと持っている。

柚華がボールペンを突き立てるのは俺と最低限の距離を保ちたいからだろう。俺はその距離感に心もどかしくなる。

距離にして大体十五センチ。どうして柚華はその距離にこだわるんだろう？

柚華が背後にいと、俺は柚華のことばかり考えてしまう。

小さい頃、俺と姉貴と柚華の三人でよく遊んでいた。仲良くなった理由は家が近くて同い年だったから。あと俺に姉貴がいたからだ。姉貴のおかげで俺は柚華と仲良しなんだろう。

姉貴が大学進学で家を出たあとも、俺と柚華の中は相変わらず良かった。学校に行くときは一緒に、互いの家に遊びに行くこともしばしばあった。柚華に彼氏ができるまでは。

あーもう。考えるのは止めよう。

俺はきつく瞼を閉じて睡眠に努める。

柚華の事を考えると、最後は彼氏が出て来ちまう。忘れもしない彼氏の顔。柚華と同じ部活で先輩なんだっけ？ 思い出すだけで良い夢が悪夢になっちまいそうだ。

そういえば、俺はそいつの名前を知らない。まあ、いいや。そいつの名前を知ったところで俺には一切得が無い。

朝起きると、柚華の姿はもうない。眠り足りない目を擦って起き上がった。やけに明かりが眩しく感じる。全身がじんと熱い。睡眠不足だ。でも、それは心地よい感覚だった。

俺は左右を見て、ついでに母親がキッチンで朝食を作っているのも確かめてから、生唾を飲んで、柚華が寝ていたであろう場所に顔を埋めた。これも柚華が来た翌朝には毎回やっている。

柚華の匂いがする。昨日柚華はたしかにここに居たんだ。

……………何やってんだ、俺？

すっくと立ち上がってそそくさと制服に着替えた。

朝早く家を出て高校へ向かう。柚華と彼氏が待ち合わせをしているコンビニの前を通ったが、二人はまだ来ていなかった。

向かい風が湿っていて髪がやたらと額にまとわりつく。空は灰色の何層にもなっている厚い雲で覆われていて太陽が見えなかった。梅雨の訪れを肌で感じる。

結局のところ、柚華がどうして夜中に俺の部屋を訪れて、そのうえ添い寝をするのか分からなかった。柚華は、理由は聞かないで、と言ったきりで話そうとしない。俺も理由を追求しなかった。けど明らかにこの状況はおかしい。幼馴染の女の子が夜な夜な来て添い寝しているのだ。しかも彼氏がいる幼馴染だ。

一方で俺はこの状況が嬉しかった。どうであれ疎遠になっていた柚華と距離が縮まった。睡眠不足だけど心は充実している。

鶴の恩返しじゃないけど、理由を聞いたら柚華はもう俺のところに来てくれないんじゃないかと不安だ。だからこの異常な現状をキープするために、あえて柚華に添い寝する理由は聞かずにいた。それが良いかわからない。ただ柚華が俺の家に来るのを自分の手で止めたくはなかった。

「お前さ、最近居眠り多くね？ もう休み時間だぜ」

机に突っ伏していた俺に中島は心配そうに話しかけてきた。

「ふあああ。そう？」

「いやいや。ほら、あくびしてんじゃん」

体を起こすと、声が出るくらいの大きなあくびが出た。

「寝不足かよ。もしかして、徹夜でソシャゲでもしてんのか？」

「いや、そうじゃないよ」

ちらりと時計を見ると、二時間目がもう終わっていた。古典の授業の記憶は全くない。丸々寝てしまったようだ。古語辞典を枕に熟睡していた。古語辞典のカバーはよだれで少しシミになっていた。俺は中島にバレないように手でそれを拭き取った。

気がつくと、柚華が夜な夜な俺の家を訪れるようになってから一ヶ月が過ぎた。

今夜もお願いね、というメッセージを合図に柚華は俺の部屋に来るのは相変わらずだ。しかし、頻度はさらに増えていた。週に二回程度がだんだん増えて、週に四回は来るようになった。俺が慢性的な寝不足になるのは当然のことで、その睡眠不足は居眠りで賄うしかなかった。

「じゃあさ、夜な夜な何してんだよ」

「なんでもないよ」

「あーもしかして……エロい動画でも見てんのか？ 興奮して寝れないとか笑えるわ。なあ、オススメがあるなら俺に教えてくれよ〜」

「ち、違うってば。エロいことなんてしてないし、オススメもない」

まあ、ある種興奮して寝られないのは確かなんだけどさ。

俺の後ろで女の子が寝ているんだぜ？ 興奮しないわけが無い。いや、別にペンを突き立てられてることに興奮しているんじゃない。そんな趣味はない。

「ほらよ、ロクにノートも取ってないんだろ？ 貸してやるよ」

中島が古典のノートを差し出してきた。開くと事細かに授業の内容が書き記されていた。中島は勤勉家で予備校にも通っているし、ノートも先生の一言までメモするくらい真面目な奴だ。

「サンキュー！ 助かるよ」

「原因は追求しないけどさ、高二の今って大事なんだぜ？ 居眠りなんかしているとあっという間に授業で置いてきぼり食らうぜ」

「おう、わかったよ」

うんうん頷くと、中島は自分の席に戻っていった。

中島の言うとおりで。寝不足だとともに授業を受けることが出来ない。もともと勉強はそんなにできる方じゃないのに、このままだと成績が下がってしまう。

そうだな……柚華に言おう。

目を擦って外を見ると、雨が降っていた。そこまで強くはないが、この調子だと夜まで降り続



けそうな雨だ。衣替えしたばかりでワイシャツが肌寒く感じた。

その夜も柚華は俺の部屋に来た。

今日は睡眠量を稼ぐために早めに寝ていたが、開いた窓からざあざあと雨音が聞こえてきて目が覚めた。

ペタリペタリと足音がする。その中にポタリポタリと水滴が落ちる音がした。

もしかして――

がぱっと掛け布団を起き上がり電気をつけた。柚華は驚いたらしく、声を出すまいと両手で口を抑えていた。

「と、突然びっくりするじゃない」

「夜な夜な部屋に侵入してくる奴が何言ってんだよ。俺は毎回びっくりしてるわ。てか、傘差してこなかったのかよ」

柚華は髪が濡れていて、ぽたりぽたりと滴が床に落ちていた。パジャマもところどころ濡れている。そのせいで体のラインが、とくに胸元が際立っていた。俺は目を逸した。

「近いから平気かなーって思ったんだけど、思った以上に雨が強くてね」

「あーもう。タオル貸すわから早く拭け」

「ありがと」

クローゼットからタオルを出してなるべく胸元を見ないように柚華に渡した。柚華は撫でるようにして雨を拭き取る。昔のやんちゃな柚華と違って、その姿は妙に色気があって、大人の女性っぽい。胸がドキドキして心臓に悪い。

「柚華。もしもだけどさ、俺がこの状況で勢い余って襲いかかったとしたらどうすんの？」

「なに急に」

俺が寝ている背後で柚華は横になっていて、相変わらず俺にボールペンを突き立てていた。

「いや、俺も一応男なわけじゃん。で、柚華も一応女の子なわけで……」

それとなく遠回しに、夜な夜な彼氏でもない男の部屋に来て添い寝するのは止めたほうがいいと言ってみた。

まあ、濡れた柚華の姿を見て、くっきりと浮き出て見えた女性らしい部分に少なからず興奮して動揺を覚えていたのもあるが、これ以上夜中に俺のところへ来られたら睡眠不足で色々なところに支障をきたすのだ。

「ふうん」

柚華はカチリとペン先を出して、そのまま俺にグリグリと突き刺しだした。

痛え、痛えと喚いて、許しを請うと柚華はペン先を収めた。

そして、弱々しい声で呟いた。

「あんたに私を襲うなんて度胸ないでしょ。それに、りょー君にそんな度胸があったらさー」

「度胸？」

「いいや、別に気にしないで。……はあ、疲れた。今日は歩き回って疲れているの。早く寝かせて」

「お、おう」

それっきり、柚華は何も言うことなく、すぐに寝息が聞こえてきた。

俺はといえば、柚華が来る前に寝ていたこともあったし、なによりさっきの一言が耳に引っかかって眠れなかった。

柚華の寝息と、冷蔵庫の駆動音、そして、今夜は外から雨音がかすかに聞こえる。夏が近づいてきて夜も気温が高いせいで、部屋が蒸し暑く感じた。

度胸、か。確かに俺は度胸がなかったのかもしれない。

柚華と知り合ってから何年も経った。告白するタイミングは何回もあったのだ。

でも断られるのが怖くて、拒絶されるのが怖くて告白せずにいた。きっと現状に甘んじていたんだ。幼馴染という立ち位置が心地よくて、このままの関係がずっと続くんだと思っていた。

勇気がなかった。

度胸がなかった。

好きだ、って言葉は常に喉元にあったのにそれを隠していた。

だから、柚華に彼氏ができたと知ったときは明日世界が終わるくらい絶望して後悔した。

後悔は手遅れになってからやっと気がつく。その思いは今も抱え続けて俺の身体を蝕んでいる。

まるで不発弾みたいだ。爆発させてしまえばいいのに、未練タラタラの俺はまだそいつを持ち続けている。

ふと、ペンを突き立てる柚華の力が緩んだ。今夜は本当に疲れて熟睡しているようだ。

俺は起こさないように、何か言われたとしても寝返りを打ったと言い訳できるくらい自然に柚華の方を向いた。

俺と柚華の間にあるのはボールペンだけだ。僅か十五センチほどで手を伸ばせば彼女の顔に容易く届いてしまう距離だった。

柚華は少し切なそうな寝顔をしていた。陶器みたいに艶やかな額には濡れた髪が張り付いている。柚華の寝息が俺の鼻に当たってむず痒かった。

柚華の寝顔を見つめていると、たまたま柚華の目元に涙の粒があるのを見つけた。

別に、涙を拭うくらい許されるだろう。

俺は手を伸ばした。いやらしい気持ちではない。これは偶然だ。偶然で仕方がなくやるだけだ。

生唾を飲んで柚華の肌に触れた。柚華に触るのはいつぶりだろう。こんなにひんやりして柔らかいのか。

柚華がスンと鼻をすすった。泣いているのか？ 怖い夢でも見ているんじゃないか？

俺は柚華の頭を撫でてみる。そうすると柚華の寝顔がいくらか安らいだように見えた。

「……………」

柚華がもぞもぞと寝言を言い始めた。なにを言っているんだろう。俺は彼女の口元に耳を近づ

けた。

「……………しんや君」

囁く声は柔らかい。俺の血の気を引かせるには充分すぎた。

我に返った俺は手を引っ込めて、柚華に背を向ける元通りの体勢に戻った。冷蔵庫の音と柚華の寝息と雨音が聞こえる。やけにその音が大きく感じた。俺は寒くもないのに震えていた。

柚華が寝言で別の男の名前を言っていた。俺の好きな幼馴染は別の男に恋しているのだ。

「なあ、これっきりにしよう」

柚華が立ち上がるのを見計らって、俺はそう言った。

空は薄い青色でそろそろ太陽が登る頃だった。

横になっている俺を見下ろす柚華は、最初こそ「私の寝相悪かった？」なんて冗談半分に言っていたが、俺が真面目に話していると分かると、手ぐしで髪をすいて「どうして？」と首を傾げた。

「柚華が背後にいたら寝れねえよ。こんなの間違ってる」

「いいじゃん。幼馴染の私と添い寝できるなんて彼女が居ないりょー君にとっては役得じゃん。私は睡眠できて、りょー君は女の子と一緒に寝れるんだし」

「ちげえよ。こんなん……ただの生殺しだ。それに柚華だっていいのかよ……彼氏居るくせに。これって、浮一一」

「言わないで！」

拒絶するように柚華は首を横に振った。

「……そんな酷いこと言わないでよ」

「いや、そういうことだろ。寝るときにさ、俺にペンを突き立てているのだから、彼氏に申し訳ないと心の何処かで思っているからだろ。……あのさあ、俺じゃなくて彼氏を頼れよ。彼女が夜な夜な別の男の家に行って寝ているって知ったら彼氏はどう思うんだ？ 悲しむに決まってるだろ。今ならまだ色々間に合うだろうからさ、早く帰れ。そして俺の家には来るな」

俺は矢継ぎ早に感情の赴くまま言いたいことをぶち撒けた。怒りは湧いていない。ただ、柚華はもう別の男の彼女だという事実を再確認するのは歯痒かった。

柚華は動かずに俺を見ていた。瞳から感情は読み取れない。

やがて、目を閉じて柚華はふるふると首を振った。

「……うん、そうだね」

いつも通りの嬉々とした声色でそう言うと、作り笑いを浮かべた。デパートの受付嬢みたいな笑みだった。

「ごめんね。色々と、じゃあ、帰る。ありがと」

他人行儀の言い方で、表情で、俺と彼女の距離が幼馴染から他人にまで広がったように思えた。

カラカラと掃き出し窓を開けて柚華は自分の家に帰った。

部屋に吹き込んだ風は、夏が近いせいか早朝でも暑く感じた。

俺は布団を被った。ところどころ濡れていて、柑橘系の匂いが鼻について、少しむせた。

「ふあああ」

机から顔を上げたら大きなあくびが出た。

俺は暑さに弱い。体が怠くなるのもそうだが、途端に睡魔に襲われる。とくに授業中は酷い。先生の呪文まがいな喋り方とメトロノームみたいに一定のリズムでチョークを黒板に打ち付ける音が噛み合ってしまうえばもうギブアップ。俺は睡魔に完全降伏して机に突っ伏すことを選択する。あの机の丁度いい冷たさがたまらないんだよな。

「お前さ、相変わらず寝不足かよ。心優しい俺が助言したっていうのになあ、もうノート貸してやらないぞ？」

授業が終わると、後ろから中島の声がした。直後、ノートが振り下ろされて角が俺の後頭部に直撃する。痛ってえ。

「いやあ、この天気だと、眠くなっちゃうよね」

後頭部をさすりながら俺は中島の方を向いた。

「嘘つけ。寝不足だろ。トイレで顔洗って目のクマ見てみろよ。テストも近いんだぞ。夜更かしも程々にしろよな」

中島は呆れた様子でため息をついた。

トイレへ行くと、バシャバシャと顔洗って眠気を飛ばした。タオルなんて持ってきていないし、ハンカチも無いもんだからワイシャツの袖で顔を拭いた。鏡に映る自分の顔を見てみると、目は充血してうすい赤色になっていてその下に真っ黒で大きなクマがぶら下がっていた。

前言撤回。こんなに眠いのは暑いからでも、先生のせいでもない。明らかに睡眠不足のせいだ。

はあ、なんでこうなったんだろう。

柚華が俺の部屋に来なくなってから一週間過ぎた。

柚華が来なくなったから、夜中に起こされることもなく俺の夜に平穏が戻って安眠できると思っていた。がどうしたのか。柚華が来そうな時間になると目覚めてしまう。そのまま悶々と眠れずに時間だけが過ぎていくのだ。

俺の体は柚華が夜中に来る生活に慣れてしまったようである。そればかりでなく、なぜか背中が心細いのだ。先端がある程度尖った、ペンで背中を押して欲しい気がする。

いや、別に俺にそういう方法の趣味に目覚めたわけじゃない。ただ、心残りがあるのだ。

俺は柚華になんで夜な夜な俺の家に来ては添い寝まがいな事をするのか聞いてなかった。女の子が幼馴染とはいえ、異性の部屋に夜中来るのは明らかに異常だ。なのに、俺はあえて理由を知ろうとしなかった。解決しようとしなかったのだ。

柚華を拒絶してから俺はその理由が、柚華がちゃんと眠れているか気になっているのだ。

スマホを取り出して、柚華に連絡しようとするが、自分から来るな、と言った手前もあるから恥ずかしさが勝ってしまい、メッセージは送れずじまいだ。

とぼとぼ教室に戻ると、机の上には中島のノートが数冊置かれていた。

「中島、毎度すまん」

「いってことよ。友達だろ。俺ら。それにお前にどんな事情があるのかわかんけど、早くどうにかしろよ」

「中島あ……頼れるのはお前だけだよ」

「キモいから目を潤ませてこっち見んな、くっつくな」

中島は照れ屋らしい。手で俺を押しつけて自分の席に戻ろうと踵を返した。

「あー、そうだ。噂なんだけどさ、クラスの女子で浮気している奴がいるらしい。ほら、窓際で一番後ろの席の娘。あんなにおとなしい性格の娘が浮気するなんてなあ」

「は？ なんだそれ」

「どうだ？ びっくりする話題で目は覚めたか？」

中島のいきなりの発言で驚いた。しかし、俺はさらに仰天することになる。

「いやまあ……俺が通っている予備校の話なんだけどさ、どうにもその相手は一個上の先輩で、バレエ部の部長らしいぜ。すげえ話だよな。俺なんか女子にもてる気配すらないのにあちは浮気なんかできるのかよ」

待て待て。俺は記憶を巡らす。柚華はバレエ部だ。で、彼氏は同じ部活の先輩なはずだ。まさかそんなわけないよなあ？

窓から見える空は初夏の様相をしており、一面の青地に、縦長に渦を巻いた入道雲がぼつんとひとつ浮かんでいた。

たらりと冷えた汗がこめかみからもみあげをなぞった。すっかり目は覚めていた。

夜八時過ぎの駅前は、学生とサラリーマンでごった返していた。片や帰路を急ぎ、片やまだ家に帰りたくないゲーセンやら飲み屋に繰り出す。祭りにも似た異様な喧騒ができていた。

俺はというと、一時間ほど前から駅前通りのベンチに腰掛けてスマホをいじりつつ、道路を挟んで向こうにある予備校の入り口を眺めていた。

意外と俺は考えるより先に体が動いてしまう人間らしい。噂話だけを頼りにここまで来て張り込み紛いのことをしていた。

中島によると、柚華の彼氏の先輩は部活を引退してからは毎日駅前の予備校に来て受験勉強に励

んでいるそうだ。

一時間経ったが、件の先輩は姿を見せない。俺は予備校についての知識がなく、授業の時間割がどうなっているとか、何時まで開いているのかも分からない。これならそこらへんの情報も中島から聞いとけばよかったと今更になって後悔した。

最初はスマホをいじることでその場をしのいでいた。しかし一時間経っても先輩は現れないのでしびれを切らしかけていた。

立ち上がって、道路を渡って予備校の入り口まで来てみたが、中の様子は全くわからない。いっその事、予備校の中に入ってみようか。でも、部外者が入っていいのか？ そうだ。入塾希望とか理由をつければいいんじゃないか？

俺が入り口でうろちょろしていると背後から、

「えっ、りょー君？」

と、声をかけられた。振り向くとそこには目を丸くした柚華が立っていた。

「ゆ、柚華」

柚華はここに俺がいるとは予想外だったらしい。「こっちに来て」と柚華に袖を引っ張られると、入り口から離れたところに移動させられた。

焦った様子の柚華は横目でこちらをにらみついている。

「どうしてここに居るの？」

「まあ、なんというか、塾の……見学っていうか、どこにあるのか見たくてさ」

お前の彼氏が浮気している現場を突き止めに来たなんて言えない。適当にごまかした。

「てか、柚華こそどうして此処にいるんだよ。ひょっとしてさ、彼氏のお迎えにでも来たのかー」

しまった。余計なことを口にした。おそろおそろ柚華を見ると、柚華は唇をきゅっと結んで、

「……………うん」

と、気まずそうに俯いた。その顔に照れなんてものは全くない。むしろ入試で合格発表の瞬間



を待ちわびている受験生みたいだった。

それから、お互い会話することはなかった。俺は居心地が悪いので目の前を歩く人を数えて気を紛らわしていた。

もうすぐ時計が九時を廻ろうとした頃、予備校の入り口からどっと学生が出てきた。どうやら授業が終わったらしい。いろんな高校の制服が見えた。その中には見知った顔がちらほらあって、件の先輩の姿もそこにあった。そして、その先輩の隣にはクラスメートの女子の姿もあった。

柚華がゆらりと歩き始めた。俺も柚華の後ろを追いかける。

先輩たちは二人でおしゃべりをしながら歩いていて、柚華と俺は二人に気づかれない程度の距離を保って尾行した。彼らの歩調はゆったりと遅くて、気をつけないと追いつきそうだった。

心のどこかで、彼らは仲が良くて家が近い友だちなだけで、周囲がカップルだって勘違いしているだけじゃないかと思っていた。が、ふたりの距離は友達のそれよりも明らかに近く、時おり肩と肩が触れ合っていてカップル同然だった。多分、中島の噂通りなんだろう。

柚華の顔をちらりと見ると、まるでつまらない映画を見ているように目が据わっていた。

彼らは通りを曲がって住宅街に入ると、人気がなくなったのを機にふたりは指と指を絡めて手を繋ぎだした。

柚華が気の毒で仕方がなかった。もう先輩らはデキているのは確実だ。先輩は浮気していたんだ。俺は怒りで唇を噛んだ。

瞬間、柚華はズカズカと小走りで彼らの元へと向かった。

突然柚華が現れて驚いた二人は、固く繋いでいた手を離してさっと二人の距離を空けた。

三人の元へ駆けつけると、柚華はじっと先輩を見つめていて、先輩は額に手を当てて顔を隠していた。そしてクラスメートの女子はこの状況を理解できていないようだったが、俺に気がつくとはつが悪そうに後ずさりした。

「ねえ、なにこれ？」

涼しげな声色で柚華は先輩に尋ねる。怒りも悲しみもなく、彼の口から本当の事を聞きたい、ただそれだけの様な表情をしていた。

対して、先輩は目を泳がせて左右に首を振っては何度も頭をかいていた。

「柚華……これはさ、違うんだよ。この人はただの塾で仲良くなった友達さ」

「うそ。ホントのこと言って」

先輩が言うあやふやな言い訳を柚華はばさりと切り落とした。

「……私、友達なの？」とクラスメートの女子がポツリと言うと、その場に座り込んで泣き出した。

「いや、マジだって。俺はなんも変なことなんてしてないし。今日だってたまたま、この子と帰り道が一緒に帰ってるだけだよ。俺はさ、柚華が一番だからさ、信じてくれよ」

先輩がなんとか取り繕おうと声を大にして言い訳をしていた。それに伴って身振り手振りも大きくなる。嘘をついているのがバレバレでその姿は滑稽だった。

先輩が何を言っても柚華は納得しない。クラスメートの女子は先輩が言い訳を重ねるたびに涙を流して鼻をすすっていた。

なんだよ、この状況。見苦しいにも程がある。取ってつけた言い訳を繰り返してばかりの先輩はなんて往生際が悪いんだ。

こんな男が柚華の彼氏で、柚華を傷つけていたっていいのか。

「呆れた。お前みたいな男、彼氏失格だ」

柚華の手を取ると俺は一目散にその場を後にした。

「ねえ、先輩から告白してきたんだよ。ねえ、どうして？ 私、何か彼にわるいことでもしたのかなー」

後ろでポツポツと柚華が俺に尋ねてくる。声が震えていて、もしかしたら泣いているのかもしれない。けど、俺は柚華の問に対して答えを持ち合わせていないし、慰めの言葉も見つからない。だから、聞こえるように相槌を打つことしかできなかった。

柚華は俺に手を引かれて力なくおとなしく付いてきた。こうやって柚華に触れたのはいつぶりだろう。柚華の手は熱かった。俺が柚華の手を強く握っても、柚華から握り返してくることはなかった。きっと、柚華は俺なんかじゃなくて先輩にその手を握ってほしかったんだろう。

俺じゃ力不足だな。

柚華は俺じゃなくて先輩に傍に居てほしかったのだ。そう実感するたびに悔しくてたまらなかった。

夜空には雲ひとつなくて散らばった星がよく見えた。いっその事、土砂降りでも降ってほしかった。

翌朝、雨音で目を覚ました。外を見ると、ボタボタと大きな雨粒が振って、アスファルトの窪みに水たまりを作っていた。朝なのに灰色の空から今日は一日中降り続けそうだなと思った。

身支度を済ませていると鏡に映る自分の目元にこびりついていたあの大きなクマは消えていた。昨夜、柚華を家まで送ると俺は疲れがどっと出て倒れるように眠った。熟睡だった。そのおかげで体の疲れは取れたんだろう。でも、胸の中にモヤモヤが残っていてスッキリしていない。そのモヤモヤの理由がよくわからなかった。

今日は自転車じゃ行けないな。玄関からビニール傘を取って外に出た。

家の前にオレンジ色の傘が見えた。その中からぎこちない笑みした柚華が顔を覗かせた。

「お、おはよう」

「……おう」

そして、そのままふたりで学校に行くことになった。

柚華と一緒に学校に行くのはいつぶりだろうか。

隣り合う二つの傘がときどき擦れ合う。その度に距離を少しだけ離れた。歩くたびに俺の歩調が柚華より早くて先に進んでしまう。昔なら気にせずにできたのに、久しぶりすぎて柚華との距離感が、歩調が上手く合わせられない。

最初はお互い何も話さなかったが、柚華は大きなため息をひとつ吐いて話し始めた。

「あのね。昨日の夜、彼氏と別れた」

不思議と明るい口調でそう言った柚華は、穏やかな笑みを顔に貼り付けていた。カラ元気を出しているみたいで息苦しかった。

いや、違うな。おそらく柚華のせいじゃなくて、俺の気持ちのせいだ。

「そっか」

「もう、なんでりょー君が悲しそうなの。別にあんたが別れたわけじゃないじゃん」

「そうだけどさ」

違うんだよ。悲しいわけじゃない。むしろ、俺は心のどこかで柚華が彼氏と別れたことを喜んでいるのだ。幼馴染の不幸で喜んでいる。そんな自分が嫌味でいやらしくて気持ち悪かった。

「あーあ！ 別れて正解だった」

どんよりとした空模様で柚華が晴れやかに言う。

「今までが嘘みたいにくっすり眠れたよ。これからはりょー君のところにも行かなくても平気そう。いろいろとありがとね」

柚華がこっちを見て小さく口角を上げて微笑む。その表情がたとえ無理をしているとしてもかわいくて仕方がなかった。

もし、俺に勇気があったら。素直に自分の気持ちを柚華に言えたなら――

「あのさ……別に俺のこともっと頼ってくれてもいいんだぞ……俺、お前のこと嫌いじゃないし」

「えっ？ 何って言ったの？」

「なんでもねーよ。忘れてくれ」

ダメだな。人の不幸につけ込むなんて虫がよすぎる。ルール違反だと思うし、このタイミングで言ってもきっと柚華は喜ばない。

柚華が首をかしげてこっちを見る。

もし俺が告白すれば、柚華はきっと驚くだろうな。

そんな事を思って俺は苦笑した。

## あとがき

オーバーな理想を詰め込みすぎました。どうも、今畑です。

締め切り一時間前まで書いていた作品は文芸部フォーマットにコピーしたら見事に規定枚数をオーバー。泣く泣くポシャりました。みなさんも書くときはフォーマットで書いた方が良いでしょう。文字数はやめといた方が良いでしょう。会話文が多いと十五枚なんて一気に終わっちゃいます。

それはおいといて、最近身に染みるほどいい言葉を見つけたのでせっかくの機会ですしここに載せておきます。

『責難は成事にあらず』

『紫煙で炊いた飯は不味い』

過ぎた正義は悪となる

中村 よしな

『押しつけ善意、お断り。

貴方のお悩み解決します。

どうぞ、パロービル4Fへ。

いつでも貴方をお待ちしています』

ファイル238 とあるサラリーマンの依頼

胡散臭い。それが男の第一印象だった。

見た目は三十代前半。髪は短く、紺のスーツが似合っている。普通のサラリーマン風だが、笑顔が、仕草が、雰囲気胡散臭い。信用してはいけないと自分の本能が告げている。まず、殺し屋なんて職業、今どきありえない。犯罪だし、危険だし。やっぱりいたずらだ。会社の子が噂してたから、面白半分で来てみたけど……。ていうか、事務所、キレイだな。うちのボロい会社と変えてほしいよ……。

「いらっしやいませ、お客様。今回はどのようなプランをお考えで？」

「っあ、はい。えっと、その……」

しまった。考えすぎた。落ち着け、俺。向こうにとっちゃいいカモなんだから、怪しまれたらなにされるか分かんねえだろ！ 自然に、普通に依頼しに来た風を装わなきゃ！

「実はですね、殺してほしい人がいるんです」

「そうでしょうとも。でなければ、このような場所には来ますまい」

「はは、そうですね……。オホン、実は、殺したい人というのは、俺の上司で」

「まあまあまあ、紅茶を召し上がりながらゆっくりと話され

ては？ 私は逃げも隠れもしませんので、急がなくても大丈夫

ですよ」

なんだよ。人がせっかく話そうとしたタイミングで。やっと、持ち直したのに……。わざと俺をこの場にとどめようとしてんのか。やっぱり殺し屋なんてウソだな。こんな紅茶飲んで、悠長に話なんてしないだろ。詐欺か宗教勧誘か、それとも俺みたいに、冷やかして来たヤツをからかってんのか？

俺は紅茶を二口ほど飲み、唇を湿らせた。男は相変わらず考えの読めない顔をして、俺が話し始めるのを待っているようだ。

「えっとですね、」

プルルル、プルルルッ、プルルルッ、プルルッ、

なんだよ！ また、俺の邪魔すんのかよ！ どっかで見てんのか！ 偶然だったらタイミングよすぎるわ！ 残念ながら、俺のスマホはマナーモードだからこんな着信音は鳴らないんだよ。商談中に電話するっていう、マナーの悪さから俺を追い詰めようとしたんだろうけど、無駄足だったな！

男も自分のスマホだと気づいたのか胸ポケットからスマホを取り出して、着信を消した。

「失礼しました。では、続きをお話してください。」

「あ、はい。上司がですね」

プルルルッ、プルルッ、ピッ。

「……失礼しました」

「……えっと、話して大丈夫ですか？」

「はい、申し訳ありません。お話下さい」

「その、俺の上司が」

プルルルッ、プルッ、

「ああ、もう！ 出てください！ 話せないじゃないですか！」

「……すみません、それでは、お言葉に甘えて失礼します。」

お前の方がマナー悪いわ！ 逆に俺にはめられんぞ。最初の胡散臭さはどこ行ったんだよ！ そういうキャラをすんなら、最後までやり通せよ！

男はそそくさと部屋の隅に移動し通話を始めた。しかし、狭いワンフロアでは、小声でも会話が丸聞こえだった。そう、どんな内容でも、だ。

「『もうっ、仕事中に電話したらダメって、いつも言ってるじゃないか！ 今、お客様がの相手してるんだから！ 切るよ！ ……え？ あ、すみません。それだけは勘弁を。はい、はい。私が悪かったです。はい、すみません。……え？ 夕飯？ いや、今、お客様を待たせて……、あ、はい！ カレーで大丈夫です！ はい！ ……えっ！ 本当かい？ 本当に作ってくれるのかい？ わかった、なるべくすぐ帰るよ。……うん、じゃあね、愛してるよ、マイハニー♡』

……いやあ、お騒がせしました、お客様。では、続きを聞かせてください。」

男はやけに輝いた顔で戻ってきた。そうだろう。奥さん、大事なんだな……。

反対にこの間、俺は終始死んだ目をしていた。話をできないどころか、盛大なラブコールを聞かされたのだ。無理もないだろう。今年やっと就職し、彼女無い歴＝年齢の人間にはあまりに酷な仕打ちだった。



俺はもはや、このイタズラに関する興味どころか、話す気力さえもなくなっていた。しかし、ここまで来たからには、最後まで付き合ってやるよ、という謎のプライドにより、続きを話すことにした。別に、話を長引かせて殺し屋の帰りを遅くしてやろうとか、リア充爆発しろとかは思っていない、断じて。

「おや？殺したいのはあなたの上司ですか。入社当初からお世話になっているのに…。」

どうせ、いたずらだし、もし悪用されたとしても、ざまあみろという心持だったため、嫌いな上司をターゲットにした。

「……俺があいつの世話になったことなんて一度もないですよ。仕事も教えなけりゃ、俺を完全に見下してるし……。あげくのはてに、俺に自分の失敗を押し付けて『これだからゆとりは！』って、人の気にしてること刺激して憂さ晴らししてますから」

俺は、殺し屋の質問に答えながら、コイツこの胡散臭いキャラまだ守るつもりなのか、とある意味感動していた。

「フム。理由にもそう書いてありますね。」

「はい。ホンットろくでもないジジィなんですよ。長く生きたからって、俺より何でもできると思ってるんですよ。」

「なるほど。では、あなたがその人を殺したい理由は、コレで間違いないですね？仕事を教えず、体面だけを気にし、自分を評価してくれないからだ、と」

「はい。殺し方はなんでもいいんで早めをお願いします。あと、お金なんですけど、ちょっと今月ピンチで」

「申し訳ありません、お客様。この仕事を受けることはできません」

いきなりだな。商談成立まで話したの、実は俺が初めてだったりして？ それはそれとして、ち

ちゃんと作り込んでほしいわ。でも、ま、イタズラにしちゃ、よくできてたわ。いい暇つぶしにもなったし、紅茶もまあまあ、うまかったし。てか、帰ったらまたあのくそジジィに絡まれんだろな……。はあ……。

「……えっ、そうですか。まあ、別にいいですけど」

「本当に申し訳ありません。私は、このような私怨が理由の依頼を行っておりません。広告をよく読まれなかったのですか？ せっかく妻が心込めて作ったというのに…」

はあ？ 何言ってんだ、この人。……あーあ、さっきまで面白いイタズラで話のネタになってラッキー、儲けモンだ！ とか思ってたのに。何？ 殺す理由がダメ？ どこにイチャモンつけてんだよ。人を殺す理由なんて恨みとか私利私欲とかばっかだろ。なんだよ【過ぎた善意】って。てか、また奥さんのことかよ。やめろよ。俺に優しくないわ。仮にもお客様だろ。

俺がシラけているのが分からないのか、あえて無視しているのか定かではないが、男の嘆き、もとい惚気を続ける。

「まったく、妻が、見ず知らずの人にまでも優しくできる妻が、ワタシにはもったいないくらいの妻が！ 丹精込めて作ったのに！ 温かみを感じれるから、とわざわざ手描きして、色まで塗ったのに！ ……良いですか、このチラシにもあるように、私は過ぎた善意をとめるために依頼を受けているのですよ。法律では裁けない、むしろ、周りからは賞賛されるような類のものを！ まったく、こんなに大きく書いてあるのになんで理解できないのですか！」

知らんわ！ てか、チラシまで作ってたんだな。ご苦労様です。奥さんまで巻き込んで、いい年した大人が何やってんですかね。そんなんだから、尻に敷かれるんですよ。チラシとか、細かいものでクウォリティ上げんなら、キャラ崩壊しないようにするとか、設定盛り込むとかしたほうがいいと思うな。うん。もう、関係ないけどね。

俺はこれ以上惚気を聞きたくない一心で変にテンションをあげ、最速で帰り支度をする。BGMは相変わらず男の惚気だ。これが目的なのか、と疑いたくなるほど熱意に満ち途切れることはない。そこから逃げるため、俺は席を立った。

「おや？ 話の途中なのに、お帰りですか？ それでは、さようなら。またのお越しをお待ちしております。」

二度と来るか、こんなところ！

そんな意味をこめて、俺は力任せにドアを開めた。

## ケース274 とある教師の依頼

え、この人、胡散臭い。それが私の恩人の第一印象でした。

殺し屋さんのことは、この前の同窓会で友人が笑い話として教えてくれました。私は、藁にも縋る想いでここに来ました。たとえ、いたずらだったとしても誰かにこの苦しみを聞いて欲しい……。友人が言うには、惚気が多いと言っていたけど、私の話を聞いてくれるなら、その惚気にも付き合うつもりです。

私は、深呼吸して、扉を開けました。

「いらっしゃいませ、お客様。今回はどのようなプランをお考えで？」

「初めまして、殺し屋さん。私を助けてください」

「勿論ですとも。さあ、こちらにおかけください。紅茶を淹れますね。アールグレイでよろしいですか？」

事務所はきれいで、紅茶のいい香りがしていました。隠れ家カフェと言われても不思議じゃない、落ち着いた雰囲気、私も気分を落ち着けることができました。

「どうぞ、砂糖とミルクはご自由に」

「ありがとうございます。……おいしいですね。」

「それは良かったです。では、お話をお聞かせ願えますか？」

「はい。実は……」

私には、弟がいます。五歳離れていて、やんちゃで、とても大切なんです。そんな弟は、ひどい甲殻類アレルギーを持っています。一口だけでも、蕁麻疹が出ます。幸いなことに、家族だけでなく、学校や近所のひとにも理解してもらって元気に暮らしています。

でも、一人だけ、分かってくれない人がいます。それが、祖母です。祖母は優しく、温かい人で、いつもお菓子やお小遣いをくれます。少し頑固なところがありますが、とても大事な私の家族です。けれど、祖母がくれるお菓子はいつもエビやカニの入ったせんべいでした。それに、ご飯を作ってくれるのですが、そこにもそれらを使っていました。弟のアレルギーを好き嫌いだと信じて理解してくれませんでした。むしろ、注意すればするほど認めようとせず、好き嫌いを治すため、と躍起になって全部の料理に入れるようになりました。一度、弟が祖母からもらったせんべいを食べて病院に行ったことを覚えているはずなのに……。父も母もいくら言っても聞かない祖母に注意するのに疲れてしまいました。

先週のことです。私たちは、いつものように祖母の家に行きました。祖母は、ご飯を作って私たちを待っていました。見たところ、甲殻類が入っていませんでした。そのことを尋ねると、祖母は弟のアレルギーをやっと理解した、と言ってくれました。私たちは祖母に感謝して、安心して食事をしました。けれど、突然、弟が苦しみだしました。息ができないようで、首を掻きむしっていました。アナフィラキシーショックが起きたのです。慌てて、病院に行き、弟は一命をとりとめました。もう少し病院に来るのが遅かったら、弟は死んでいたそうです。そんな弟に対して、祖母は信じられないことを言いました。

「なんだ、ずいぶんと演技がうまいじゃないか。そんなにうまいなら、演劇部にでも入ったらいいんじゃないかい？」

そう、祖母は言いました。本心から言っているようでした。祖母は、弟のアレルギーを理解したのではなく、さらに狡猾に私たちを騙して甲殻類を食べさせようとしたのです。このままだと、弟は殺されてしまう、そう私は不安になりました。祖母に会わない、という選択肢はありませんでした。一度、私が大学受験で行かなかったときに祖母がひどく落ち込み、体調を崩したからです。自分のことを嫌いにならないでくれと、病床で懇願されました。だから、殺し屋さん、私を、父母を、弟を、助けてください。

私の祖母を殺してください。

「いいでしょう。そうですね、ご高齢のようですし、事故死に見せかけるのは簡単そうですね。」

「え？ そんなにあっさりでいいんですか？ 私まだ、名前も言ってないし、お金もそんなにないのに……。どうして？」

「理由が全てですよ。確かに、あなたのおばあさまは善意より弟様を苦しめております。これは、法では裁けない。法で裁けないのであれば、ワタシども、殺し屋の出番です」

殺し屋さんは、にっこり笑って私を助けてくれると言いました。少し胡散臭いけれど、ここまで真剣に私の話を聞いてくれて、助けると、力強くいってくれました。殺し屋さんは神様だと思いました。これでやっと、父母を、弟を救うことができると、安心のあまり、涙ぐんでしまいました。

「ありがとうございます。殺し屋さんは、私たちの恩人です。……それで、殺し方なんですけど、あんまり苦しめないように、痛くないような方法でお願いします。」

「恩人は大袈裟ですよ。……分かりました。そうですねえ、こちらのプランは……」

殺し屋さんの話を聞きながら、私は心のなかで父母、弟、何より祖母に懺悔しました。私は、罪を犯します。たくさんたくさん悩みました。苦しみました。けれど、この選択以外に方法がないと思いました。私を憎んでくれてもかまいません。私には、祖母と分かり合うことが不可能だと感じました。

それに、祖母は病気でこの先長くありません。闘病に疲れている、とこの前、父と話しているのをこっそり聞いていました。祖母を楽にしてあげることもできるのです。

私は、後悔はしていません。

だって、先の短い一人の老婆の犠牲で若く尊い青年の命を救うことができるのですから。

ケース289 とある女子高生の依頼

「いらっしゃいませ、お客様。……おや？ また、アナタですか。ここは、遊び場ではないですよ」

「いいでしょ、別に…。というか、遊びでこんなトコ来ないわ。カビ臭い。いつも、オネガイしにきてるでしょ」

「ひどい言われようですねえ。掃除はこまめにしていますのに。それと、遊びで来ないと言われましたが、先月も来たでしょう？ ご家族も心配されているのでは？」

「月に一回しか来てないでしょう？ それより、オネガイがあるの！ オ、ネ、ガ、イ！」

「殺し屋に月一で来るのがおかしいと言っているのですよ。アナタ、私のこと便利屋程度にしか思っていないのでは？」

じっとりと責めるようにアタシを見る殺し屋を無視して紅茶を飲んだ。今日の紅茶はダージリン。苦味とか紅茶の良さはまだわからないから角砂糖を二つ入れる。いつもジュース出せって言ってるのに、変なトコで頑固なのよね。

「……はあ、お願いというのはいつものようにアナタの愚痴を聞けばいいのですか？」

「違うわよ。今日のはアンタも気に入ると思うわ。というか、いつものも愚痴じゃないわ。オネガイよ！」

失礼な殺し屋である。最近は依頼理由が【過ぎた善意】じゃないから、そう思ったのかもしれないけど……。ホント、紅茶とか事務室の改装と依頼理由とか、変なトコにこだわるのよね。そんなんだから、奥さんに逃げられたり、尻に敷かれたりしてるんだわ。ダメな大人ね。

「ウザイ教師を殺してほしいの。なるべく早くにね。報酬はいつもの方法でいいかしら？ あと、やるなら、夜にして頂戴。」

「はいはい。畏まりました。……理由を伺っても？」

「勿論いいに決まってるじゃない。というか、アンタはその理由にこだわる癖に今更、何聞い

てんのよ。あと、クネクネしててキモイわよ」

「手厳しいですねえ。ヤレヤレ、少し趣向を変えてみただけだというのに。口が悪いですよ、お嬢さん」

気持ち悪い。キモイじゃなくて、気持ち悪い。手振り身振りで話店のが特に。声のトーンまで変えて。ホントに何か変なものでも食べたのかしら。それとも頭でも打ったのかしら。まあ、話さないに進まないし、コイツの状態には目をつぶりましょう。

「私がソイツを殺したい理由はね、暑苦しいからよ」

「と、言いますと？」

「ソイツはね、二週間前にウチの学校に来たの。最初はちょっとイケメンだからキャーキャー言ってたの。でもソイツ脳筋で、成績を上げるのに、十五時間勉強しろだの、暗記するのに単語を百回以上かけだの……。できなかった子は、反省文を書かされるのよ？ オマケに校則を破る子がいたらすぐに、親に電話するの。本人の目の前でね。授業も擬音ばっかで分かりにくいし、熱意で突っ走ってんのよ。なんで教師やってんのかしら」

「それはまた、ずいぶんとアクの強い方そうですね。しかし、殺したいほどでしょうか？」

「ソイツのせいで、一人自殺したのよ。昨日ね。だから今日は学校が休みで、アンタのトコに来たのよ」

「そうでしたか。ああ、自殺に至るまでの経緯は要りません。きっと、その方の言葉を真に受けて頑張りすぎたのでしょうか？ できなかったことに絶望したのでは？」

「ええ、そのとおりよ。ホント、それぐらいで死ぬなんてバカよね。……知っていて、止めなかった、アタシもだけど」

「おや？ 後悔しているのです？」

「少しね。アタシに話しかけてきた変わり者の一人だったのよ。その子のことは、いいわ。とりあえず、熱血教師のこと頼んだわよ。じゃ、帰るわ。今日はパパが早く帰ってくるのよ」

「その依頼、承りました。それでは、お気をつけてお帰りくださいね。またのご利用をお待ちしております」

胡散臭いし、ジュースは用意してくれないけど、依頼したことは完璧にこなすアタシの秘密の友達。次も期待しててね。きっと気に入る話をもってくるわ。

本日、二十一時五十六分に衝突事故がありました。死亡したのは〇〇さん、二十八歳。けが人はいません。警察は運転手の〇〇さんから大量のアルコール反応が出たことから、飲酒運転による事故の線で捜査しています。

「いらっしゃいませ、お客様。おや？ 月一ではなかったのですか？ ずいぶんとお暇なようですねえ。……お嬢さん？」

「……パパを殺して。パパを、じゃないと、アタシが殺されちゃう。オネガイ、パパを殺して。何でもするから。パパを！」

「どうしました？ 落ち着いてください、お嬢さん。ほら、吸って、吐いて、吸って、吐いて……。大丈夫ですよ。ホットミルクでも作りましょうか。」

アタシはうなずき、殺し屋から離れた。途端、心細くなり、また泣けてきた。こんなに自分が弱いだなんて思いもしなかったわ。

「できましたよ。熱いのでお気をつけて。少しは落ち着いたでしょうか？ いきなり、泣き出したので驚きましたよ。それで、お父様を殺してほしいとのことでしたが……ワタシが納得のいくものでしょうね？」

「勿論よ。アタシが間違えるわけじゃない。そうでなき



や、誰がアンタみたいな人にオネガイに来るのよ」

「お嬢さんも言いますねえ。それでこそ、アナタらしい。早く泣きやんで、お話願いますかな？」

ウインク交じりにそういわれたけど、このタイミングでウインクは、ひどいんじゃないかしら。アタシ以外の人だとぶっ飛ばされるわよ。まあ、いいわ。取り乱したけど、コイツにパパを殺してもらうんだから、ちゃんと話さなきゃ。

アタシは姿勢を正して殺し屋の目を見た。相変わらず何を考えているのか読めないが、信用できるのは、今までの仕事ぶりやいつも話していることから知っていた。

殺し屋は、現時点で一番のアタシの味方であり、切り札だ。

「パパの仕事はね、よくわからないの。でもいつも難しそうな書類を読んだり、英語で電話してたり、いつも忙しそうなの。いつも遅く帰ってきて、休みの日も少ないの。それで今日、友達にパパが何してるか聞かれて、答えられなかったの。それが悔しくて、パパのこと大好きなのに、何も知らないって気づいて、それでね、こっそりパパの部屋に忍び込んだの。」

ここまで話して、ホットミルクを一口飲んだ。温かさと甘さ

に安心した。この後、パパのことを悪く言わないといけない。

それは、嫌だけど、パパを止められるのは自分しかいないのだ。

「それで、パパが何やってるか知ったの。パパはね、政治家の秘書だったの。国を変えるために頑張ってるの。誰もが笑顔で暮らしていける理想の国づくり……。聞こえはいいけど、実際にしていることは選ばれた強者が住みやすい国づくり。病気の人も高齢者も隔離する。子どもの時に才能検査をして、英才教育を受けてそれ以外の未来の自由はない。こんなの【理想】じゃないわ」

「なるほど、そんな計画があったんですね」

「ええ。それで、パパの部屋にいたことがばれちゃったの。……パパ、見たこともないような顔してた。それで、アタシのこと、こ、殺す、って、パパの、大事な書、類を見た悪い

子、はもういないから、殺すって。パパにとってアタシっ

て、何だったのかなあ……？」

言いながら、また、泣けてきた。アタシはパパのことが大好きだったけど、パパはそうじゃなかったんだ。アタシを殺すって、言ったときの目が、声が、雰囲気、ホントのこと言ってるって言葉よりも雄弁に語ってた。

「承りました、お嬢さん。いつものように、早いうちがよろしいでしょうからさっそく、今から、行ってまいります。お嬢さんはここでお待ち下さい」

「今から？ 流石に早いわ。もう少し後でも……」

「いいえ、【善は急げ】ですよお嬢さん。それでは」

またしても、ウインクをして言い、コートを着て行ってしまった。ウインクがマイブームなのだろうか、気持ち悪い。三十を超えたおっさんがするのはちょっと無理があるわ。イケメンならともかく、胡散臭いアイツはちょっと……。

アタシは急展開に追いつけず現実逃避を決め込んだ。アイツが返ってくるまでに部屋の掃除でもしようかしら……。そうやって、パパのことを考えないでいられる間は良かった。

しかし、それも長くは続かなかった。アイツが返ってきたのである。パパの死体を持って。

「ひっ！」

「安心してください。死んでますよ。っと、悪ふざけが過ぎました。お嬢さん、あなたの依頼、完遂いたしました」

「え、あ、うん。……ホントにパパは死んでるの？」

「触って確かめられますか？」

「……いいわ。ありがとう。ところで、相談なんだけど、今夜とめれくら、あえ？」

視界がゆがむ。口が回らない。手足が震える。

ドサリ

殺し屋が私を見下ろしている。体が重い。のどが渇く。

何が起きたのかわからない。

暗転

最後に見た殺し屋の、歪んだ笑顔が頭から離れない。

「やれやれ、【親の心子不知】というヤツでしょうかねえ」

殺し屋は、二つの遺体のそばでつぶやいた。そのまま、ポケットからライターをとりだし、部屋に火をつけた。

「お嬢さん、最後にあなたを殺したいという依頼をしてきた

のは、あなたのお父様ですよ。あなたが最初の依頼をしてきたのを日記で見たと言っていました。あなたが心配で、よく部屋に忍び込んでいたようです。アナタと一緒にですね。まあ、褒められることではないですが。……それで、あなたがたと

え【善意】もっていたとしても、人を殺している、という事実

を知り、自分の責任だと感じたようです。アナタのお父様は、

自分がアナタに殺されるようなことがあったら、育てた責任と

してあなたと死に、始末をつけたかったそうです。簡単に人を

殺すような子が、今後、社会で生きていけるはずがない。そ

う、考えたようですよ。」

殺し屋は燃え盛る炎を気にせず、語り続ける。

ガラン

建物が崩れ始める。

「それでは、またのご利用をお待ちしています」

了

---

初投稿です。こんにちは。

入部当初は、出すつもりがなかったのに、不思議なものです。初めて、小説というものを書きましたが、楽しいものですね。さて、今回はタイトルが全てです。あと、殺し屋さんを書きたくてこうなりました。今後、精進してまいります。

では、どうぞよしなに。

テンプレートな日々から

空橋 つばさ

おそろいのペアリング。今はまだ、彼氏彼女の間柄だけど、このシルバーのペアリングがわたしたちをつないでくれると信じている。

彼が選んだのはシンプルだけどセンスのよさが光るペアリングだ。うしろには名前の小野まりから一文字とってMと記されている。

デートのときにさりげなく身に着けるようにしている。最初のころこそ、ペアリングを身に着けたわたしをみて、彼はからかったりしていたけど、今ではそんなこともない。ふたりの日常の一部として溶け込んでいたからだと思う。10歳年上の彼は恥ずかしいとつけることも少ないけど、私は満足だ。

きちんと形でのこしてくれたことが何より嬉しかった。

「まり、元気？ 彼氏さんも上手くやってる？」

今日は親友である由紀子と久々の食事だ。安いけれどご飯が美味しいという個室居酒屋で向かい合って座っている。室内は女性客も意識したつくりとなっていて、

「もちろん。こないだもデートしたばかりだよ。とおるもいい年齢だしね。あと数年のうちに結婚したいなあって思ってる」

「まりの彼氏って年上だったね」

「うん。10歳上。でも何だかこどもっぽいところもあって可愛いし、銀行に勤めていて、しっ

かりした人なの。仕事のほうでも最近調子がいいって…。将来有望、みたいな？ 不満があるとしたら、なかなか会えないことかなあ」

「たしかに仕事忙しそう。まりもいよいよ結婚かあ？ いいなあ。わたしの彼氏なんか、この間、何してたと思う？ 公園で寝てたの！ なかなか帰ってこないから心配したのに、本当に最悪！ でも、憎めないんだよね。そうそう、この間、あたしね、オーストラリアから帰ってきたんだけど……」

おしゃべりが好きな由紀子とわたしは大学の天文サークルで同期で妙に馬が合って現在まで付き合いが続いている。正反対の私たちは磁石みたいに相性が良かったのだと思う。

由紀子は自由人だ。大学卒業後は突然海外へ姿を消した。周囲では一時期話題になったけれど、私は由紀子ならいつかやると思っていた。

「あ、店員さーん。ビールおかわり。まりは？ なにか飲む？」

じゃあ、私もビールでと店員さんに伝える。

「そうじゃなくて！ あたしの彼氏じゃなくて、まりの彼氏について言いたいことがあったの。覚悟して聞いて。中々、まりと話す機会がなくて……」

電話で言うのもね、と先ほどとは打って変わって声を潜めた彼女の言動はジェットコースターのような。でも、レールみたいに安定感があって、変わることもない芯を感じさせる。

「実は、4ヶ月前くらいにね、見ちゃったの……。」

由紀子にしては珍しく、口ごもっている。先ほどまでの陽気なオーストラリアの話とは一変して、真剣な表情をしている。

「……まりの彼氏さん、駅前で女の人とホテルからでてくるところ、私見たの。はやく別れた方がいいとおもう」

私をまっすぐ見つめる曇りのない目。そういう正直で、すこし強引なところが由紀子の魅力で、学生時代に心底あこがれていたことを再び思い出したのだった。

家に帰ると、ひと気のない冷たい部屋がわたしを出迎える。白い息がみえそうなくらい冷え込んでいたので、暖房をつけてもまだコートを着ていた。

青い歯ブラシセット、わたしのきかない英語のCD、彼が持ち込んだ枕、辛い味が好きな彼のための調味料。（わたしは苦手である）部屋のなかで一人きりのはずなのに、とおるの気配を感じるのがどうにも切なかった。

とおるのことを愛おしいと思う瞬間はある。寒そうにマフラーをして足踏みをしているとき。眼鏡をはずしている風呂上がり。笑うときにできるえくぼ。それを隠そうとする手のひら。わたしの名前呼ぶときの低く柔らかな声。特別に好きではない。燃えるような恋ではない。だけど、朝、毛布から抜け出してカーテンを開けられないような、きっとそんな関係だ。

不思議と別れる気はおきなかった。頭の中にぼんやりと、でもたしかにあったうわき、の文字がよりはっきりと輪郭を帯びただけであった。

わたしはそのうえで彼と結婚したいと思っていた。大学を卒業して、うだつのあがらないわたしに彼はいろんなことを教えてくれた。

掌から溢れるくらいの知識。今まで生きていた世界の裏側まで、彼は世界のひろさを教えてくれた。身体のふしぶしが満たされていくような前よりずっと大人になった気分がした。

浮気していたとしても、彼のことを求める女性がたくさんいて、わたしは別れる気はなくて……。わたしの彼が求められることを自慢すべき誇るべきことに思える。一方、わたし自身が有象無象の取り換え可能な部品の一部になったみたいで、もやもやする。

そんなことを考えながら、ペアリングを取りだしては眺め、またしまうことを繰り返した。

十一月も終わる頃。

肌に吸い付くような寒さが厳しい。冬用のコートが外出時の必需品と化してしまったこの季節。

とおるとの久々のデートが迫っていた。もともと多く会えない関係だった。一緒に暮らしている



わけでもなく、それにとおるは仕事が忙しく今月は出張も多かった。由紀子の言葉が頭をかすめるけど、こうして会えることに安堵するのだった。

今日はすこし豪華な食事をするからと伝えられていたので、わたしはこの日のために買った綺麗な服装で、髪型は美容院にお願いした。こんなにお金をつかうのが久々だと思うくらい贅沢をして、そうやって作り上げられた鏡にうつる自分は自分ではないようだった。

とおると斜めに切り取られたデザインが特徴的なビルの前で待ち合せをする。わたしはいつもはやく来すぎてしまうので近くに買い物ができる場所がたくさんあるこの待ち合わせ場所は嬉しい。そうこうしていると時間になってとおるもやってきた。

店内は小ざれいにまとめられ、フランス語だろう文字が見える。クラシックがかすかにながれていた。お客さんたちは料理だけではなくそれらすべてに浸っているように感じた。

「まり、ここは前言っていたお店だよ。実は、ぼくのお気に入りの店でね。何度かお邪魔したことがある。好き嫌いはあった？」

「ないよ」

「じゃあ、ぼくが予約しておいたものにしよう。なんと言っても、食材にこだわっていてね。とても美味しいんだ。次のミシュランの候補なんじゃないかって話題のお店なんだよ」

そんなことを話している間にきれいな女の人がこちらへやってくる。お飲み物は、というのでわたしはよくわからないけれど彼が頼んだものと同じものを注文した。

「今日のまりは、一段と綺麗だね」

とおるはこっちをみてそういった。今日はいつもよりも気合を入れていた分、とおるにそう言われるとなんだか報われた気がする。とおるは必ずひとつわたしを褒めてくれる。とおるにとって取るに足りないことなのだと思うけれど、わたしは女児みたいに胸がじいんと熱くなるのだった。

「とおるも元気そう。出張どうだった？」

「まあ、どうだったって言われても、そこそこかな……だけど、学生時代の同級生に会ったんだよ。すごくやんちゃをしていたやつなんだけど、しっかりと仕事をしていて感心したな。年月は人を成長させるというか……」

「とおるの学生時代って想像できない」

「たしかに、もう年だからね。そいつとは学部時代の友人で、ぼくは工学部だったから、周りが男ばかりでね。そんな頃の自分を思い出したよ」

「工学部だったの？」

「うん。ずいぶん昔の話だなあ。父親が大学の先生でね。ぼく、実は負けず嫌いだったんだ。だから、この分野で父親には及ばないってわかったとき、今の仕事をすることをきめたんだよ」と子どものような笑顔で笑う。口元にえくぼができていた。わたしは彼の両親のことも彼自身のこともあんまり知らなかったのだと思った。

「とおるは負けず嫌いなのは当たり前じゃない。そうじゃないとここまで仕事頑張れないじゃない」

そのうち、料理が運ばれてきたにわたしはとおるとしか、このようなレストランに来たことがないから、緊張した。いつもそうだ。試験を受けに来た学生みたいに緊張する。あとから、美味しかった？と聞かれても、たいした返事はできなくて、とおるの言葉を繰り返しているにすぎないのに、彼は満足そうな顔で頷いてくれた。

それから、わたしたちは学生時代のことについて話した。いつの間にか店内のクラシックは聞えなくなっていて、わたしはずいぶん夢中になったものだった。

こういうあとにとおるはわたしの家によく来る。だから、とおる好みの部屋にした。アンティークな雑貨屋で、こういう風なものが欲しいのです、とある映画の一場面をみせた。店主から言われるがままに雑貨を買い、さらにおすすめされた彼が好きそうな本なども買って飾っておいた。とおるは少し古い映画にでてくるようなものが好きなのだった。「まりも、これ好きなの」ときくので、わたしはわずかにほこりのかぶったそれを見ながら少し、と言った。

そのまま、とおるはわたしの家で一夜を明かした。すべて予定調和のように思えてしまう。以前、とおると過ごしていたときに感じていた全能感は薄すらいだように感じた。

わたしは、散らばっている衣服をたたみ、テレビをつける。昨日の朝、パン屋さんで買っておいした食パンを焼いて、エッグスラットをつくる。簡単に野菜を切ってベーコンなどを焼く。一人では食べない朝ごはんをつくりつつ、そう思った。

「とおる、クリスマス、あいてる？」と朝ごはんを食べているとおるに尋ねてみる。本当は昨日言いたかったけれど、わたしは今、ようやくそう言った。

「ごめん、仕事が忙しくて」

「そっか」とわたしが返事をすると、とおるは申し訳なさそうに、はやく昇進するから、今が頑張りどころなんだ、まりには本当に苦勞をかける、と話してくれた。

「ううん、大丈夫。とおるはわたしの自慢だよ」といつの間にか口にしていた。

とおるに今の顔を見られたくなくて、わざとテレビのほうを向いた。髪を前にたらすと、口の中にかみの毛が一、二本入ってきてざらざらした。わたしは話すことが思いつかなくて、とおるも何も言わない。しばらく、テレビの音がこの部屋を支配していた。とおるにコーヒーのおかわりいる？と聞くと、お願いというのでコーヒーをいれる。コーヒーをわたすと、「本当にごめん。そのかわり、別の日に会おう。なるべく時間つくるから」ね、と続けられた言葉に、わたしは頷くことしかできなかった。

結婚するので、会社を辞めます。と、同期が打ち明けたのは一二月に入ってからだった。わたしは事務として、カメラの部品をつくる会社に勤めている。ひとつひとつが世界をつくるというのが会社の理念で、朝出勤してくると目に留まる位置に印刷して、張り付けてあるのでわたしはすっかり覚えてしまった。

「まりさんも結婚した方がいいわよ。ほら、あの、銀行マンの彼氏。すごいわねエ」と上司がいう。彼女は少し太っていて子どもも二人いる。最近の娯楽は噂話だともいうように、口を一生懸命動かすその姿にわたしはエサを求める鳥を思い浮かべた。

「ええ。わたしの彼、最近忙しくて……。まあ、銀行に勤めてるんですけど、最近また昇給するらしいんですよ。だから、安定してからが結婚かなあと考えています」

わたしの彼をそういう風に言われることに悪い気はしなかった。だけど、今日はピアノ線で心臓を貫かれたような小さいけれど、鋭い痛みがじわじわとひろがっていく。

「そうなの。そうなの。でも、あんまり夫が忙しいと大変よ銀行って出向……ていうの、ある

から、ねエ。うちって、夫が育児にも理解を示してくれるからいいけど。それでも、二人の子を育てるの大変だったんだから。でも、やっぱり子どもっていいわよ。毎日にしあわせを与えてくれるわ。がんばらなきゃってそんな気にさせてくれるよ。最近の若い子って結婚しない子も多いじゃない。だから、心配で」

はあ…と返事をした。この上司はわたしが話すことを求めているのではなく、自分が話したいタイプだと付き合いで知っていた。

「ところで、結婚した長谷川さんいるじゃない？彼女、退職するって言ってたでしょ。実家の方でいい人見つけちゃって、地元に戻るんですって。大変よねエ。もうこっちには戻ってこないつもりかしら」

そのあとも、子どものために大切なことだとか、今の人はどうだとか話していたけれど、わたしは話の半分も理解がおいつかなかったので、適当に相槌をうっていた。ただ、とおるはわたしと結婚する気はあるのか。それだけが気になった。

お昼休みに、自動販売機でジュースを買う途中、今日大人気の長谷川さんに会った。

「長谷川さん、結婚おめでとう」とわたしが言うと、彼女は

「ありがとう。突然だったし、迷惑をかけるかも、ごめん」と申し訳なさそうに笑っていた。

「地元に戻るんだ」

「地元のひとでね。彼の職場も地元だから」

そっか、とって「今、しあわせなの？」と聞いてみた。

「もちろん。しあわせだよ。しあわせと思わないとやってられない。結婚するってしあわせなことでしょう。だから、わたしはしあわせなんだと思う」

「わたしも……」

結婚したいな、と言いかけてやめた。結婚すれば幸せ。わたしはずっと他の人から押し付けられた価値観の中で他人の羨むしあわせという服装をきて歩いてきた、そんな気がした。さっきの上司も長谷川さんもしあわせなのにその種類がちがうように思った。

代わりに、長谷川さん、いなくなると寂しいねという今日、何千回言われたであろう言葉を送った。

由紀子を誘ってクリスマス会でもしようと思ったけれど、そういえば、彼氏いるって言っていたなと思い出して辞めた。

他の友人にクリスマス空いている、と尋ねるのも躊躇われた。何より、クリスマス直前に誘っても、予定が空いている者なんて少数だろう。

クリスマスは一人で過ごそう。たまには、自分の好きなものをとびきりつくって食べよう。そして、わたしのための服を着るのだ。そう思っていたけれど、わたしは長谷川さんの仕事の引き継ぎがあることを思い出して、あきらめた。一人でのいないクリスマスを過ごすことより、会社でも何かしらの理由をつけていた方が楽だった。

会社から駅まで、ちょうどクリスマスの雰囲気のカップルを片目に帰路へと急いでいた。

街のところどころのイルミネーションが人々を賑わせている。葉が落ちてしまった木も寂しさを隠すようにデコレーションされている。信号は青に変わっていた。ち、と煩わしそうに舌打ちをされる。

ぼうっと街の雰囲気にのみ込まれながら歩いていたら、いつの間にかわたしと彼がよく待ち合わせ場所につかうビルの前に来ていた。今年も本当だったら、ここで待ち合せするはずだったのだとわたしはさらに切なくなった。

でも、そこにはとおるがいた。

隣には当たり前のように着飾った女がいる。

なんだかそれはずっと前からわかっていたような見慣れた光景に思えた。そして、ふつふつと怒りが湧き上がってきた。その怒りですら彼に対する意から怒りなのか、女に対するものなのか、反対に私自身に対する怒りにも感じられた。

2人を無言で写真におさめる。この写真をばらまきたいけれど、それよりも、クリスマスの夜に

恋人をとられた女のおさめた写真というのがどうにもむなしくて、でも、削除することもできなくて、わたしは彼らを追うのでもなく、ただ茫然と眺めていた。

ようやくとおるに会えたのは年末だ。とおるはいつものように家に来て、今まで通り会話をして

いた。

「ねえ。やっぱり、とおる、浮気しているでしょう」

そう言ったとき、世界の時間がとまったような気がした。

さっき入れたばかりの電動ポットからはじいーと音がしているし、冷蔵庫からはがらんと氷ができたらしい音がする。

私たちの間だけが静寂を保っていた。

「…なんで？ どうした突然。まりらしくないなあ」

しばらく経っていたと思った時間は一瞬で、彼は愛嬌のある顔をこちらに向けて先生が悪い子をたしなめるような顔つきをして言った。

「でも、したでしょ？」

とおるは笑顔で嘘をつくのができる人でそんな嘘がきつとわたしを満たしていたのだと思った。

「今日はやけにぐいぐいくるね。そんなまりは可愛くないよ」

「そうやってごまかす。別にしてもいいよ。でもね、その女の子たちのなかで私が一番でいたかったの。恋愛でまで優劣をつけてほしくないの」

一度言い出すと止まらなかった。こんなにヒステリックになったのは初めてだった。

「…本当に今日はおかしいな。まりらしくない」

「まりらしくないって何？ とおる、私の何を知ってるの？ ほら、いつも作っているパエリアだって、私の得意料理じゃないの。それに洋服だって、あなたが、そういう格好好きだから」

「別にしてくれなんて言ってない」

「別れたくないって引きとめて言いなさいよ。浮気してましたって。でも、許してあげるから。ねえ、本当にわたしが一番じゃなかったの？ なんで？ クリスマスも仕事だったんでしょ。あのビルの前で待ち合せとかしていないよね？」

「お前、何。みてたの？ ストーカーかよ、怖いなあ。いい加減にしろよ。そうやっていつもいつも、人と比較してばかりで。それでいてずっと、にこにこににこにこしやがって。私は被害者ですってか」

とおるはいつも物腰が柔らかくて、余裕があって、そんなところに安心していた。わたしより10歳上の彼は、こんなに小さい人だっただろうか。ソファーに座っているからか、今日の彼は必至で、古い映画の話を詳しくしてくれたような、そんな余裕は見られない。

「だいたい、お前は何にもないんだよ。行動すべてが紋切型だ。ステレオタイプだ。だれかのテンプレートに沿った行動ばかり、しやがって、気持ちわるい。そんなお前にずっとかまってやったんだ、むしろ感謝すべきじゃないか」

とおるはおさまらないと言ったようにいう。

「心のなかで誰かと比較して、他人の不幸は蜜の味ですってか。お前の先輩が結婚したときも笑っていただろ。あんな将来のない人しか捕まえられない先輩かわいそうって。そういう雰囲気のにじみ出てるんだよ。綺麗な服を着てたってお前の陰湿で、ずる賢いところはにじみでるんだよ」

「かわいそうだな。自分の幸せをわかんないんだな。人と比べることしかできない。お前は自分がまるっきりないんだ。ただの女であってそれ以上でも以下でもないんだ。……かわいそうだな」

お前は自分がまるっきりないんだ。その言葉が頭から離れない。とおるが浮気をしてること、それ自体よりもずっと重くのしかかってきた。目を瞑っても、朝のニュースをみても、気が付けば彼の言葉が頭の中からあふれてくる。

こんなこと誰にも知られたくない。だけど、一人で受け止めるには重すぎる。今までだったら、ずっと心の奥に、深海にしずめるみたいにして置き去りにしていた。由紀子に電話しよう。長い呼び音のあと、ようやく彼女の声が聞こえた。

「まり？どうしたの？」

由紀子の声が聞こえると、とても安心してしまってああ、本当は哀しかったんだ。わたしはずっと、他のだれでもないわたし自身の話をきいてもらいたかったのだと思って、泣きくずれた。電話越しに大丈夫？どこにいるの？返事して！と心配する由紀子の声が耳のまわりをあたたくして、わたしはそのまま、ずっとそれを聞き続けた。

「本当に心配したんだよ。電話越しでずっと泣き続けるし、どうしようかと思った」

そう言って、息をぜいぜいとさせながらわたしの家に由紀子はやってきた。ごめん、とわたしは言う、

「それで大丈夫なの？　　というかそもそもどうしたの。……やっぱり彼氏のこと？」

「それは、もういいの」

わたしが泣きながら言うと、由紀子は何も言わずにわたしのそばにいてくれた。

少し時間がたって、涙が落ち着いて、自分のためにこんなに泣いたのはずっと前のことだなあとぼんやりと考えたら、自然と言葉がこぼれおちた。

「あのね、わたし自分がまるっきりないって言われたの」

由紀子はただこちらをじっとみている。

「だから、ああ、わたしってたしかにどこにもないよなあっ思ったら涙が止まらなくて。ずっと、なんていうのか言葉にできるものに捕らわれていたっていうか……」



「まりさ、多分彼氏のことそんなに好きじゃなかったんだと思うよ。銀行に働いている年上の彼氏が好きだったんだよ。そういうところ、学生時代からあると思う。でも、ごまかし続けてわたしはある意味偉いなあって思っちゃう」

「偉い……？」

「うん。わたしはさ、わりと自由にやらせてもらってるし、他人が何を言っても言わせとけて思うんだけど、まりは違うじゃない？だから、そんなところもまりの一部だと思うの。まりはまりのしあわせを見つけられればいいと思うよ。あとからしあわせだって感じることもあってあるわけじゃない」

「実はね、わたしは由紀子のこと、ずっとずるいって思ってた。好きなことばかりして、言いたいことを言うの。すべて無自覚なのに自分の強みにしていくのずるいって思ってた。でもね、すごい憧れてたの。だから由紀子のこと嫌いじゃなくて……。むしろ好きだよ。じゃなければ、こんなに友達してないよ」

「わたしもだよ。ずっと自由に生きてきて、本当に友達と呼べる人もほとんどいない…。まりのこともね、ずるいって思ってたよ。他人に媚びてばかりで気に入られて。でもそんな要領の良さが羨ましかったんだなって」

「そういえば、わたしたち喧嘩もしたことなかったね」

「大きくなってからの喧嘩って、ないじゃない」

「たしかに。喧嘩というより、我慢か縁を切るかの二択みたいなのところあるよね」

わたしたちは、正反対なようでいて、根本は似たものだったのかもれない。そうおもうと笑えてきた。ずっと二人でこんな話をしたのは初めてだって思うくらいに話して、朝方、由紀子は帰っていった。

「わたしって誰だと思う？」

今日初めて会った彼に聞いてみた。

目の前の彼はまだ若く、カジュアルな服装をしている関西風の青年。今までだったら、最初から会っていなかった人。わたしは由紀子に薦められて、婚活までもいかないけれど、様々な人と会うことにしてみた。

「誰って、小野さんやろ？何言うてるねん」

彼は突然、変な奴やなあいうように声を出す。

ああ、彼のなかでわたしは変な女であり、付き合うに値しない。だから、いまはまだ不合格だ。でも、きっとそれでいい。

いつも、かれらと会うときはまず、小野まりです。趣味は料理です。尽くすタイプです。年齢？ 27歳です。事務仕事をしています。と同じような説明ばかりしている。

料理好き映画好きの27歳OLであるわたしは単なる説明でしかない。今まで、わたしはその説明を一生懸命に演じようとしていた。きっと何度もなぞりすぎて何もかもが真っ黒になった履歴書みたいにそれはわたしさえも埋め尽くしてしまっていた。

「そうだね」

わたしは小野まりであり、わたしはわたしだ。

頼んでおいたカフェオレを一口飲んだ。口の中にはほの苦い味が広がっていった。

ふと、窓をみる。あの女によく似たひとが信号をまっていた。あの女もわたしも、自分をさがしている。不安定で時折、わたあめを水につけたみたいに溶けてしまうこともあるけれど、いつもそこにあるのだ。

そう思うだけで、どんなわたしも肯定できる気がした。

タンポポを探しています

## 十文字

冬の厳しい寒さがやっと和らぎ始めた三月の上旬、部活を終えた私は一人家路についていた。少しずつ日が伸びているとはいえ、辺りはもうすでに薄暗くなっており人通りもそれほど多くない。……だからだろうか、帰路の途中にある大通りに面した小さな公園で私は気になるものを見つけた。

白い服を着た男の子だ。小学校に就学しているかいないかくらいの子で、ブランコの近くにある草むらの中に入って何かを探しているようだった。私は公園の中を見渡してみたが、男の子の他に人はいない。どうやら、彼は一人でここに来ているようだ。

——あんな小さい子がこんな時間に一人でいるなんて、危ないなあ。

そう思った私は、思い切って男の子に声をかけてみることにした。男の子の近くまで行き、肩をポンポンと叩くと彼は振り向いてキョトンとした表情を見せた。

「……こんばんは。君、一人？ お父さんかお母さんは？」

私は男の子を怖がらせないようにその場にしゃがんで、ゆっくりと優しい口調でそう尋ねた。すると男の子は首を横に振って「一人で来た」と答えた。

「こんな時間まで一人でいちゃ危ないよ。いったい何をしていたの？」

そう訊くと、彼は手に持っていたものを私の目の前に突き出した。一瞬で私の視界が黄色に染まる。

「わっ……これって、タンポポ？」

「うん！ ちーちゃんにあげるの！」

そう言って屈託ない笑顔を見せる男の子の姿を見て、私は少し微笑ましい気持ちになった。

「そっか、頑張ったんだね。……でも、今日はもう遅いから早くおうちに帰ったほうがいいよ？」

「ん！ わかった！ バイバイ、お姉ちゃん！」

男の子はそう言うと、私の横をすり抜け公園の外に向かって駆けていく。

「あっ、ちょっと待って！ 危ないから一緒に……ああ、もう！」

私は少し遅れて男の子の後を追いかけた。公園の入り口に来た時、男の子は信号のある横断歩道の前で立ち止まっていた。そして私がもう一度声をかけようとした瞬間、まだ信号が青になっていないにもかかわらず、男の子は横断歩道を渡り始めた。

「えっ？ ちょっ……」

わたり始めた直後、乗用車が男の子に真横からぶつかった。

——確かにぶつかった……はずだった。

しかし、男の子は乗用車をすり抜け、そのまま何事もなかったように横断歩道を渡り切り、反対側の歩道の向こう側に消えていった。

私は目の前で起きた信じがたい光景にしばし呆然としながらも、男の子の渡った横断歩道の傍まで行って辺りを確認してみた。

横断歩道の横にある車両用信号機の根元には——小さな花束と缶ジュースが置かれていた。

その後、家に帰った私は母親からあの公園付近で起こった交通事故について聞くことができた

一年前の春、下校途中の小学生があゝの横断歩道を渡ろうとしたところ、信号無視をしたトラックに轢かれ命を落とした。その子の手にはタンポポの花が握られていた。おそらく、病気で入院していた妹を元気づけようと摘んでいたのだろうとその子の家族は話していた。

それから数か月経たないうちに、その子の妹も兄の後を追うように天国へと旅立ったそうだ。

それを聞いた私は、次の日またあゝの公園に行ってタンポポを摘んで、横断歩道のわきにある信号機の根元にお供えした。『あの男の子と彼の妹が天国で幸せになれますように』そう願いながら。

## ○あとかぎ

ホラー系のちょっと怖い話を書きたかったので書きました。この物語がフィクションかノンフィクションなのは、皆様のご想像にお任せします。

奇蹟への供物

松本惇暉

あなたは静かに革命を待っている

福音書を逞しい胸に縛りつけて旅行中だ

目的地はない

逆戻りして自分の故郷を通り過ぎてしまうかもしれない

あなたは朽ちた肖像画を掲げて微笑している

道の反対側を大勢の教師と子供が同じ靴を履いて行進する

誰もが自分の色で染め上げた憲法を謳いながら……

左右が入れ替わった鏡の国は椿事に溢れている！

あなたは震えながらも歩幅を変えない

おのれは愚かな道化師でよい！

これから生まれ来る子供たちが愉しくなるために

踊るのだと呟く

わたしは塵芥で顔を塗りペンを握って

願わくはあなたの伝記を残したいと思う

あなたはこれからも静かに奇蹟を待っている……



殺人

Puney Loran Seapon

いつだったか、誰かに聞かれたことがある。「人を殺したいと思ったことはあるか」と。

どのように答えたのか、細部までは記憶に無いが、概ね「ある」に近い事を言ったはずだ。まあ俺でなくとも、似たような答えの人は多いだろう。

とは言え、実際に人を殺したことがあるか、となれば、「ある」と答える人は少ないはずだ。

だが、少し考えてみたい。「人を殺す」とは、どういうことであろうか。包丁で人を刺す、車で轢く、等で命を奪うことは「人を殺す」ことと言えるだろう。

例えば、自分が女性であると仮定して、満員電車の中に立っている状況を想像してみる。すぐ後ろに男性がいて、気まぐれに、その人に痴漢の冤罪をかけてみたとしよう。高い確率で、その人の冤罪は晴れないはずだ。その場合、その男性の人生はお先真っ暗なことになるだろう。要は、「社会的に殺した」と言える。命は奪っていないが、「人を殺す」と言えなくも無い。

そんなことを考えていたら、「人を殺す」ってことが何なのか、分からなくなってしまった。

そもそもの話、俺は何でこんなことを考えていたのだろう。

頭の中を整理するには、物語を読み聞かせるかのごとく、自分自身に心の中で話しかけるのが一番だ。自分を客観的に見れるからな。

まあ、取り敢えず俺。しばしお付き合い頂こうか。

\*\*\*

改めて自己紹介をしよう。俺の名前は<sup>よつしまのはる</sup>依島昇。性別は男。少し前に大学三年生になった。自分で言うのも難だが、ほどほどに頭はいい。

そんな自覚があるからか、中学生くらいの時から、人に勉強を教えるのが好きだった。「分からないところはないか」とか「ここ出来て無いじゃん。教えてやるよ」とか言って周って、大層ウザがられた記憶がある。一種の悪癖と言えなくも無い。苛められなかったのは、運が良かったからなのか、それとも俺が気がつかなかっただけなのか。

まあ、それはおいて置いて。そういうわけで、今はアルバイトで個別指導塾の講師をやらせてもらっているのは、当然といえば当然の流れだった。アルバイトなんて他にも色々あるのに、これしか考えられなかったのは、呆れるべきか褒めるべきか。

たしか、大学一年生の秋くらいから始めたから、もう一年と半年続けていることになる。

初めての担当生徒は、高校二年生の男子だった。容姿は平凡ちゃ平凡だが、割と明るそうな子という印象を受けた。名前は伊藤<sup>すぐる</sup>優。理系の科目がダメで、特に数学が苦手だった。

だが逆に文系の科目はとても良く出来ていて、こりゃあ絶対進路は文系なんだろうなと思っていたところ、「数学者になりたい」なんて話をされて驚いたのは、今でも記憶に残っている。最近数学に興味が出てきたんだと。いやいや現実見ろよ、無理だろう、なんて最初は思ったものだ。思っただけではなく、ついうっかり口に出してしまったこともあったが、当の本人は「ですかねー」なんてケラケラと笑っていた。

まあ、何にせよ、今の成績だと進路云々以前に進級できるかが怪しいので、最低限数学は出来るようになるろう、なんて話をして、週一の授業が始まった。

取り敢えずまあ、授業は順調だったかと聞かれると首は傾げなくてはならない。優よ、二次方程式の解の公式を知らなかったのは擁護できんぞ。

授業を続けていけば続けていくほど、彼はどうやって高校に入れたのかと思うようなことが増えていく。いやいやヤバイって。中学レベルの数学からやり直したけど、比例のグラフが書けなかったのはマジでヤバかったっての。

てかなんなんだよあいつ。数学に興味がうんぬん言ってたくせして、分からないところ多過ぎだろう。よく数学が嫌いにならなかつたな、おい。

と、愚痴はいっぱい出てくるものの、だ。

それでも優の担当を投げ出さなかったのは、きっと「仕事だから」という理由だけではなかったのだろう。

だってあいつ面白いんだもん。英語の起源とか、昔ロサンゼルスに旅行しに行った時の話とか、いっぱいしてくれるし。「お前絶対数学より英語の方が好きだろ」って何度も突っ込んだけど、優はその度に「いや、数学の方が好き」って否定する。そのやりとりがなんだか面白くて、ついつい同じようなやり取りを何度も繰り返してしまった。多分、優も同じ気持ちだったのかもしれない……というか、そうであって欲しい。

授業は真面目に進めていたし、優も真面目に受けていたが、それ以外の時間は楽しくお喋りするのが常だった。

有体に言えば、俺と優は仲が良かったのだ。

とは言え、やっぱり授業は順風満帆とはいかなかったのだが。

高校二年の学期末テスト。まあ何とか優は赤点は回避出来たのだが、点数はあまり褒められたものではなかった。二月の模試の結果も、文系はとても良かったのだが、やはりというべきか、理系の方は悲惨で、これは苦勞するな、なんて思ったのも覚えている。

まあ進級は出来るようなので、それだけでもまだ救いがあった。教室長からは「取り敢えず進級出来るレベルの点数が取れるようにサポートしてあげて」と言われていたので、最低限はクリア出来し、まあよしとするか、なんて考えていた。

優が高校三年になって、本格的に受験勉強が始まったものの、俺達の間、ピリピリとした空気はあまりなかった。せいぜい、趣味の話をする時間が、ほんの少し勉強する時間変わったくらいだっただろうか。

春が終わり、夏が過ぎ、秋になった。優の成績は芳しくない。

芳しくない、と言っても、それは進路が理系ならの話だ。相変わらず、優は文系科目は得意で、進路を文系に変えれば、今からでもかなり偏差値の高い大学には行けそうだったのだ。

ある日、優に言われた。「学校の先生から、今からでも文系に変えないかって言われた」と。優の学校の先生も同じ事を考えていたらしかった。

現実的なことを言えば、俺も優は進路を考え直すべきだと思った。実際に、それとなく提案してみたなら、やはり首を横に振られたが。

ただ、心情的なことを言えば、優の好きにさせてあげたいと思ったのも事実だ。一年近くも彼の講師を担当したためか、親心にも近い何かがあったから。

教室長に相談したこともあったが、結局本人にその気がないので、何の解決にもならず、そし

て――

冬。センター試験が終わり、自己採点の結果、数学はⅠAⅡB合わせて百点を超えず、他の理系科目の点数も芳しくなく、しかし文系科目は全ての教科が九割を超えていた。行ける大学が無いわけではないが、優の「数学者になりたい」という希望は叶わない。

これを見れば、流石に優も意見を翻してくれるだろう……なんて思っていたら、なんと驚くべきことに、本当に優は意見を翻した。

そう、驚くべきことに、だ。一応何度か説得は試みていたが、頑なに文系に変える素振りを見せなかった優が、ついに意見を変えたのだ。

俺は安堵した。「数学に興味がある」なんて言っていたけど、実は英語の起源や海外にも同じくらい興味があることを、俺は知っていた。優の文系科目の成績なら、そういった分野を専門に学ぶ大学は、割と高いレベルのところまで選択肢がある。本当に好きなのかも怪しい数学を、浪人してまで学び続けるよりかは、その夢を諦める方が、絶対にいい。

そう思っていた。思っただけなのだが……俺自身も驚くことに、俺は「本当にそれでいいのか？」と聞いていた。

一年と半年教えてきて、優には数学の才能が無いことを、俺は十分に理解していたはずなのに、だ。

俺の言葉で、優は少しだけ逡巡したもの――

結局、優はこれからも数学者を目指すために、浪人することに決めた。教室長はそれを聞いて、大層驚いていたが……。

優が退塾する時、呆れたことに笑顔で「お世話になりました」と言われた。お前はこれから茨の道を進むことになるのに、よくそんな顔が出来るな……なんてことを言ってやろうかと思ったが、彼の笑顔を見て、結局、口を衝いて出た言葉は「頑張れよ」の一言だけだった。

\*\*\*

ああ、そうそう。そうだった。あの一件があって、俺は「人を殺すことは何か」って考えているんだっけ。

優が浪人していなかったら、今頃は大学生活をエンジョイしていることだったろうに。

あいつは今も、予備校で理系科目を頑張っているだろう。それは優にとって幸せなことかは、分からない。

天気は、今日も快晴だ。

#### 【あとがき】

お久しぶりです、Puney Loran Seaponです。

今回は『痴女』の続編でも書こうかどうか迷いましたが、シリアスで始まったものはシリアスで終わらせるのが良いだろうと思い、このような作品になりました。『痴女』にシリアスは無理ですからね。まあそんなことはいいとして、です。

『弾丸』からはじまり、『迷子』『変態』『恋愛』『過去』『友達』『混合』シリーズ三部作、『妄想』『珈琲』『小人』『未来』『独白』『黒感』『痴女』『彼女』、そしてこの『殺人』と、リレー小説以外は毎回必ず出してきました。終わってみると少し寂しいような気もしますが、それ以上に達成感もあり、ここまでお付き合い頂いた読者の方には、本当に頭の下がる思いです。

あまり長々と書くのもあれなので、ここで締めるといたしましょう。

これにて、Puney Loran Seapon劇場は閉幕です。ここではないどこかで出会うかもしれないあなたに向けて、では、また！



案山子 2018冬号

<http://p.booklog.jp/book/121090>

著者：新潟大学文芸部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sindaibungei/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/121090>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト